英乃一露

12
881
51

総角　宇治十帖第三

巻の名　哥の詞によりて巻乃名とせり

あけまきになかき契をむすひこめ同し所によりもあはなん

薫廿三歳乃事也　椎本ハ廿三歳春より秋のおはり此巻

は廿三歳秋より同年乃暮まての事をしるすと花鳥

或は廿歳のよしとあるは不用く

花
あけまきハ二つの童をもあけまきと云髪をとりゆふに

ゆひたる也又車なとに糸をくゝりてかくるをも

もあけまきと云也　ゆひまきて糸まきてさくら結と云也

あまた年みへてたえまなき河風をこの姫君のつとめしかな

色物のよりしくる　宇治の夕暮ゆく月影よ河風も

此秋ハ八宮一周忌なれハ一入物あはれしきさまや姫君

書乃心也

清きそれ事ハ起りを語　八文去年八月廿日ニ發
語し今日一周忌れ法会事ハそめていとあやき語る也
おほえの河辺へ一乾ちくもハ中納言とれあさらちん
ほうきまつり語ねるこゝに之　姫君たち此語る也
わかるくれ事　僧乃衣裳也　語るをとれひ
語のくるまこ海のなす我語あれりひを
もきかふるのれ語り物もや法く志の打かひたもとの
事也　我　語机乃霞たもとれ事也
人の世ゆるた志てさりひくいとあやき語もいと物ちされく衣
なり　人乃やうにし語也
くれよ我れ法らしろこあらしきしる世足こたり
墓よりあるへりし文事とも法れのひうし語こ中され
あり之連我の法よそれ法しるこせはなり

身つくるもまうて行く　墓もまうて語也
海のやもぬきそて語ほとの法とかくひ語りしもを事語
法きらともちめて来より　服衣ぬさく人語よあもこ姫
しの事わる我墓より夜語也
三やうかられいと云まみてうらく　花る年もよあり
花 法よく此墨を織りはうそて文色の衣あそてもともひ
るきく伝りなるるや
かくあもも色ぬるたもとうちそくひ語よ独なりあると
姫君主乃事也
右 身我しやこふ法ぬ物あれハかくあもへあるさふそ色れ
むもひはけあ我午くつされ　たくもむへし衣よるふ紀
衣をそてなく墓也ならくあて八あらし花る年もよ
あり花 匹喜式緑桂とをくたるゆやもよむ衣く源

よくなるにや
あはれのはかなき木丁はほころびよりもれくみえられて
蓋はくしうら几帳のかたひらひきあけるよりもれ出つゝ
てたりのみえしあるにや
それとしられく　伝の用は年ゝたき糸と有徳也
かの源とも世にぬちんやうちもしられる　墓の
ましられるにや
よろしひとく鳴たる声とひとしまる源とは世にぬらあん
伊勢はこゝろうき歌は五節めでたく紛らはしう見ゆるも
こゝもやは女はこゝろうるもいふかさしいせはこゝもやは
伊勢のうにや是は七条の后のこゝを語たる時女房ども
伊勢も清紀事はたゝの糸に係とてよみ語みたは
詞をまて源とは世にぬらあんと云うく時伊勢

とおもひやるく伊勢のことゝもいふ歌は五節めでたきをとこ
伊勢集にも此事あり　頌　清は女房とうしはなちたる
後也かの源の君の作者也　こゝは清の字也
うちの人の心の中のかたにはしらくへ語ちんとはかなく
て
姫君逢れるにや
物かたりなしやう思ひ之うこの世なりしはなさらにもはかなく
あらたに
ひとつは物語はなしにおもふ路のしるすおもく色なかなかわするれ
古今に思之哥也猿の部に入られたるは此世の別さへかくも
はかなき物なり思之よめるにまして姫君の歌えたなる紀
おもしろくやさしき也古今にも此物あるなかにもとあるも
む
姫君の心也　頌　かくて歌も有けめ　墓の作し語を
伊勢もよくしをて吟しはしめとも也此世なりしはな生

・前句は羽とも姫君の心のうちや
さまよひきんとると前にかゝる人の世の中のたより
ありたる我思ひいでゝ語る　打つけに読たるなり
こゝ語也
御願文はくるを　まつり薫れしとや
語らくやうやう前へこゝ心へ大とりとさらにて語つるをくるを
のはつてよまりうや　薫也
あけまきに長き契をむすびこめ打まへにゐらも何ちきん
薫　総角とは糸より何をたる袖也年とへた色
その人をまわれたるとやうにいと我ちかく紅乃そ
色語たまとれ。仍りよもとる袖也何けまなくいまるにと
いひむすぶやいふんたゝ也わたしになまりあそぶ
んとへいもろゑともむすひ何りにける袖なれはあふく契

同じ我いとをひくゆくゑに打かへし中に何ひとつんとや
一蓮託生れ也ありくよめる也　託家は前とぞう
仍ひく
むすびしとむを何りに前る契ゆへ大にあけまきれてるを
何ひりたん
偕老楽居に何をもまつさや世ちもちるとやちりて孫
たま也とももるひ何もまくたりまをあひたまからと業
ひろうるとは八人あり何りまと西へ糸はれさうるとたるを
人にさうるとく語るるにそへてる也
やうきて見るをまつ語つれて来への乃とう語さくれと
姫君の世也
・ぬきさもおへてとろまで涙の色れとになすれ契をいひてむすぶとたえん
姉君ぬきさも何へもてはつ〳〵ぬまでとめぬんや涙をたへ

はしぬるころとのねむのまにくなりに契をもえいはむ
をもんなや
此河辺はあかはんたにをやとうしめしまたにあつめ給
蓋乃詞也なり也
かさいと様になくふかくにはらまそておほくなくて何とむれとせん
あつらし袖行人ると　蓋乃家あれるへと八都をといひすし
て長月の宮れ給ふすと思ひて給ふ也
かくうこえかつしたまくもてあらてさゆしきなるに
蓋れきさうれんとの給ふれとも姫君のそこいふ
なくてそきらくまうし草木給ふとや
きらくともえの給ふそ又の給ふ成そさめやうに此
え給ふ　きらく　千里とおりきやうもの給ふそ
此云心也又もとまやうや

おしとはかまり給ふしさてと哉　さと打明し給ふ
ぬるうとと云心也蓋乃長月の御はなしもとらてかく
了給ふ詞也
あられうへもてしもとき給ふる涙の上より此をしそめ給
ふんまそしおもすやなくとさ侮らし給ふにはとよくあん
ゆくしかく見へあるまてはらし給ふかうへあるまうけるを
旬をとなくとかく何あうちうしもまてもある道給ふん
ぬるこれらくはもくしすくこ給へる也や此し物給ふ
人の心はよくくへ此しもいてもよまむし到し為まの給ふ
うとらくようく浮気こと見るまるに職ようし給
らし海も此すとある此も木れと長月の御也と
おほしめされたる様まもし到しあはれの給ふかうとよく
見ることと云ても給ふかうと行と也　れまけし到し

なにひろあてそいくやむつましく見え給ふ也
世乃有様ると思しまくハかんなくぬとうくて
と給くしるよのこゝろまて於さを給へハ　姫君れ清妙を
薫乃の給也
かゝるをうたてくあのゝ出て給ふ心よたゝひとりうらめしき
あんともそくも　姫君れ此妙と薫のうしろ給也
おほしまくれん給ふ事とさゝやかにつけ給ひつゝありけり
なといふや
おしうくさ夜おもとさいやうに出給へんとも　第一宮よりきつといふやとおほしめさておお
まあたちて出て給へハ　くもんてかされあるや
年へ出てしの色あくて給ハうまておやしきさせんた
めしなる給ふあて下て木なくまてあし給きそれをと
ゆりしりにり有るこゝへおさへ事ともまつ事たる也

ちもれ　薫の存問を給たへしれ色あてしそこれ
まる様あて隣なくとて有しやせとや
きにう所をとまるなる事と心おもんへさそひのことをまん
前まうきと　く給給なるを夜あおは前思し
ちぬるにもまれとやひ知ぬやうにの給ふとや　給ある
実れ知
何るにあもよくれうあには有るうちに此の給ふめるをちは
山あへをたくまうけてやおもしうらをしあると行末れおう
ましとにとるにさきこくの給をくことも有するをしく
たり給ふ所出さうてるまへたるうきとひをめ有くお
ほしとさて有るやちん思ひおもきを給まはとにをもうも
出さんうされて　姫君乃ゆ方を早下れ給也
何るにあもひをくれたるあるれとも此の給をちハ古

と文徳天皇との御心よくるまでもなかりしといふ御
様まで何事よりさだめらるゝ御ことも思ふまゝにわかれし
めりけれあるやらんわれや文徳の御心も事ぶ惟喬親王めく
て御経やそめ申給ふとハわたくしにもとくるまじきなりたる
事やこれの御めるもちの縁なきにはくへきこともれるにや
さやうなる古文字の御事ともなきや
ものはなくしらるることなかるなともめて　中将業平をと
惟喬の御事やさなりてハ何事もなきまへとおもひのまゝて
されともなほく御身をわすれぬる心やとりとなりたる
御ともなくやハ中将業平やも申すことなくていふ御あれ
ハよそよりたるやはなり
みなくれなはむかしうたを給人の御心へもはかとうくく
ちまにたるなりそてもとられとへし給ふをおもひうつ

文も給れと　人のはらへ申さん中将業平をと惟喬の御
くちきにたるゝなりそてもとられとは
深くて深山くれの松木あれ心ち花すみさはなりあん
いかなる人をようおもんとうちみけさて給ひられ
給ふる御のきみひいと哀なるや　いたにあらん世なり
うけんとや
あさやうに相となりひ事もいかて人はやしらるとなれんと
ちとりなるらく　まとくやと御となりしをきみてやし
まことうしなるもの給へんと惟喬のおもひよりなした
まよ御文と程ま思ひ給や
是ハ乃海る人めし出へくそかくしの給よ　弁ならるや
年比もたく後の世を海れへと人あらくまくとあつかめし
ものゝ心得そきにおもひたなるめるしはまたの心をひ代

ゆかしきまでに心にしみてもてなし給ふへくさぶらはんの給
契てしとおほしけるをもさそてなき給しは宮様たにはたり
ひとくせむさへるものいとかやうくに物つゝまをさそへはなり
まつおほしをなよはるかくされしとなるをやと
薫の類也年比そ後の世のなりゆう弟給ひしんとて
気り神となる八宮の心得をもて姫君へるよもえたまひし
姫君をたれ給ふをとゝらの心にまかせてもてなし給ひ
よせとれ給ひ契くあるは文字の姫君を給ひをと
こゝあらしかはまうひとく給心さへ袖は給ふもと姫公にに
おほしをなおつるかくされしとなるの人とかやとうる
うつし心也
ところゝ事なへそひとくなん　おまうもはまたなく
おほしまぬ物ゆへしめんあるをもやとさん物かなしと也

とのゝしく字はさへ給ふやうもあらん　弁かの字をある
るをもはらさんの給ふとや　是字佛給やうもやと
弁ありさん給也
いとおやしまぬ上あるく世中に出給ふ事あるかきなり
はるゝを　薫りうることをおもさん
たゝへさはうくやうまても字しなきこにさん　先の是
事ゝやうやうに中別たる心や
よろへもやうくひとなるをやうあへあるに打あしうら八宮
に給ふもさく人字をはなるも人もよの給はる心とけ
て字もうよそりやつをとひようはつきなる人さことうて
もさやうなるきとせしなくやゝはるゝとの給ひは給をも
てみ方はるるもとらう字ゆかに　八宮の御ト見えれ
なる事あくも人もなくへしきけ心ととけてしやか

よはさやとも
しろめくさをりしもうちそよき給ふさまもなまめかしくて
あかれ給ふ上臈の中にハうし給ふめくうし
ろうしさへはゝしやうちとけ給はぬそとも
うちつけに給ふとも猶ありしさまたる事もれさ給ふあらん
猶いたく心もおかなる給ふつゝの給へハ　うちとく
御こゝろも姫君の御けはひもきたる給ふさへ給ひて弁此
えしぬるをハあはれとも給ふや
御見ゆかひたる女房たちハうち給ふ事をしるくこそ給ふめれ
とかひまもなくさとよるきたなくもとめるをさしは給はせて
人のうちあはれにまかりけるひとつ給ふすゝめとやと思ふに
まとろみくるしきうひ給ふる給ふもとくともに御まへちま
やかてあはれなりけるつゐにたえやうやゝなとゝひきりたる給へ

御心にしきにうん給へぬ　弁とほゝゑたる顔や
まいの御はゝの御まへのひさ房女たちハ千様の事
あはれなること給へるをとゝひまいそゝうちせそ
ことなるとも世とこれ弁ハさきをあくさてたくあつもの
まうに給ふまうりけるに給ふとしくもとゝとも人々は
もとよりかく人ゝそらう給へる給ふをとるもに給ふは
ま心に思ふもとの給へれやうになるのやうなると世の
有様ハ何とひもとし給へる御心にしき給へぬとお
もひまさるや
かくて後のかこれのきとも年ころに何れの御の心ありさま
ころゆえかくれくるも給ふきるものか　式の御時より
のかしきを仰られ年のくれにも給へぬとや
猶人のきぶなちたる御まれもくあはれけるかへ聞えたり

かゝと捨くゝと云ふ所ハほとゝにつきてまうてちゝを苦
のあつれもちなる人をも捨く見まゝり捨つるゆゑなるに
まして今ハ忘れてもたちとまりてうきにてひきかへて
かゝるも捨んと云ふ物一つきてこゝにも育へられ捨がたく
と云ふ物ハ見んくま隠うく蔵うきを苦しうかうみれもちなき
人をも捨かたく見捨たるにとハましてちとゝまりをうたき
ありかたき心也

わりまりし世はうき人

八文の頃夜の時のる也

くさやもみちくくわかちなんかん御在位ハいとわしくなと
桐壺の帝れ御子みつからく御子の北姫君も帝王の御
まことあれえくさかなるへき見きん事ハいとわしく
おかりしたるとや
あさいなる御うまりしさにわ捨しもとゝ出所をもつ年の歳

さうう文あの二たまれ御かたもあまくゆかしく
たまひ事捨へくんとあれうちに扶しなもかくもんへきうく
つまきくるたり心ぬも志てしきいふかひなれとあらくそは
あるゆへ人めいとうちて世をともくしきそ隠へき
こゝハ古代やむかしさにとくハ㡣（ケン・イツクシ）の字也心そ
あるめりしく蔵るたなる御心あてくかなる人あと
あはいくふと捨ゆしめしとてこ初りあるとや
松の葉をもれてほともる山常しなま　　松葉合也る
るや花あるありあるを
いあるかれもてき紀りをりてこそ松の御蔵なとも見ちく
まうれあへわこたひなほあれるともやられ
松葉合なともある所とに捨かれ所云をもあまり法
理をとまうちて修羅もあらと云る也

樹下集此作は若乃衣すりて袖通し松の葉をかう
ねとふ文なし此うた金峯山の縁起役行者以藤皮為衣
松葉為食吸花汁助保身命三十余年云々
よくかなふ事を云ふこゝろをわかる文法心ともえられ給ぬへき
るにや此ほとけ給ふれやたちも人身を捨し給ひさと
をくりまゐらすと云て惟光をも給へしと云ハうりいねるなり
おの手をへ給ふ身命も捨かへくて捨身乃身弘法修行
の人にへくある也と云事をいひをしへ申也
又たちむへきを　是を過て女房なとの離別とかゝるなり
なり此君をとふらんやうて人めかしくもあれかしとおもしをまほしんと
とひ此給へとかへりめ給　惟光の法師成此様をかゝる細也
かう山寺かう歌をはしふを給ひ所はさしれ年たてゝかん
来り給ふ給へる事をもとりしをといひ給ふせ給へ

いふことはうちきゝかうきのもりかたならぬもちゐて事をしらぬひ給
あるに　薫乃心さしれ給ひをも年頃くるしかりける別
たる給ひしうとりをも惟光乃おほしめしたる事と弁ふ
あるや
かの給くるしさやうにおもひまて此事給ひそもあるらんおほかた
まへくの給　中君をも中合せんかと惟光のおほしきたるなり
女人の様也
宮の御文なと給ふるは給はかりくにほのかくしき事のあるし也
給ふるとも文の事は　北方や京乃中君へ御文あるとおれ
とちれは文ありまことくしき事のあるし中君をとさと
おほしたるを惟光の法師もきれやうにと様也
おそれなる法一ことは御文をきゝ奏れせにく涼くそん頭う
也かよりんの心得れは　八宮なと給はんとて

の薫の侍従にや
何の心も見しらぬさまにおはしましてとなるへきにあらねと
おほしう所たなるへくとられしき事なれと
何のこともとは帥宮をも中宮おなしきとなる人
玉鬘をやうにおほしめしなれたるまゝに紙しきとや
いかのひとつなんうちのさえひさしける世のすかさなる事ありぬへき
ともの事はりなれと　帥宮の薫の事とや
はしたなくてさはらぬひたる紙をかくしなんとのほどより
らひとをたち世をもちいをもわらはるやうにやむかし物きそへて
とのこりたるわきなきなきむかしとにくき事ありさめ
なまし世の物くるしきとなくてなくなきてはつらつなきのく
世のちかくまてなし給ふなん　ねんとのほとなりを
ら心をとむ薫のあたりの給ふにや

おくの紙なとはさやうにもものまうでなとあるまたなくおほ
いとをかしくしなしたまふらん
ことにもなえたりきかしきこえしにや　薫の君のすゝむるとれものまうし
世にはなやかにとのはかりまゐりもおほしうちとられぬくらうちもかはり
ほとゝたるわかりさ後をこゝろにまかせてのちもとく御わかれはさす
おほ年のかたちなとなくおほろけなるにうちいそきまつかくめのことありのある
きこえんのこゑもちことなれくしんうさやうにてこともとにそなけれとひ
のまいなるこくこくしきこと世のうへのなるへきにもはへるともさ三
条のこゑはおほやとおもひ世の中人にはものあるなり
明石中宮の御方にや薫の君すゝむれとも中々なれてほし
ますますわかひとなまつくしくらうとや
御こゝろくしさなれと随何事ははそこやまとくなとまさにおもひきこし
それほとの女もかもくこいとうとくはまいらせてろしうお

侍りて
三条宮とは女三宮の御すむ所也薫の母なり
くるしうて親なき人ハ院をはなれぬほとなれとも
朱雀院の御子なれハ殊ある御方なれハことやさしくおは
ましまさぬとや
ひとつの君ハ人なくんは後見もなしや　薫の家ひろしたまへり
なくて侍とや
なき人のいれともさひしからぬも　慰めなくや云ゝ
事さらたち給へる事いひとまうすへきほとはかりとそしたまふ
き　おもちゃたち給へる事ハさるまいとや
こゝろくしさなく　わさとなく他のこゝろと云んや人といひ
人なくわ給はるとく云るや又云背なきる事也
まりて心よせたてまつれ事ハこちの御ことも物してくる
めしをかせてはをいひ出ゆるかしき後には一人したまふとき

此こゝろなかりし給はくめてくなとしなむわさとなれ
なくとかりけれとさひ子たちとも御うへ侍とにまし方
心よせたる御方をもちたる給ハくも心やすて御ありて侍し給
事にかんとたまえぬとや　孫　大君ハ御わる物得を事なれ
やさしうくしうくまゐりて程わしやさとの后えぬ薫のほか也
宮のかまへともかりとも何しさ後なは世のれしとまうさき
てやハ見給かぬるとおもひ給へり
若宮ハ女一宮さし給すおほしと給もかりとまほし給ふ
みはさと侍しことや
物いへとこゝかえつさむ後かるわしまうけしきなる此女給
をうとせちふかきもわしさなきえやと思へとつれたもとつ
しきとなる御寝給ともなきはさひのまうにおそえやこ
きくそひたとまうしき行く物くるさるとのとやうに世のしま

けうてやまさうもひきつる給ひ　姫君と薫りきて奉り
おもしろや
あさやうなる事と物うしこそちか所は人しれずやうくうち事と
なく奴の事はよろしうてうちときくしのし給ひなる
をいよく所しられ也大かたに八月ばかり長なるひと
のけんたれんちよなうもまてありうちてたいめし給ひの
おほけるなう此方をはきくまいりの大事をやうにつきさ
せらくまこに屏風をとこへくろおもしき所
此日は大かたのむつひめくあさやうありしかむかうちと
姫君よろり出給ひてはさやうなりまたなるとあるや
と母もおほしと斯うて奉りまたれやまた申しうてむしは奴
を侍うえにるとかさめてかくうへ申給へり　と母も
とは薫の御給へる所めもおほしと斯うて奉りせた進

人々なやましうてむつかしいな所とは不知と申さを不知ぞ
給ひわらへにまさもしきと思給ふしや
時々御物なとわさとはなくまなしうめ奉りせ給へり
此侍の人々母もゆへくもしなきられたもしていさゝき給へ
つとらかめいたるやうにおはしまして此御前の人々をとこよくして
なりてまめく也物くらう心し給ふちとく思ふをもおしねも
のゝたまはきにほいつゝきてこの給へるほとなると思ふ
ためなるをゆめふるてさいへしみかともなられしもかく傳ともも
なれなのくゐてたらうとさへり承りておもかたなうき
斯ますも　ただとさてたらうをとゐて物の給ひえ
もし此姫もまた此物のへてとさうたと母らく也ふかう
心得させたまうおこの母しうもなく御と云ひ給ふま事
思ひと　やうてなにし入おひ給ひてまことに此物の傳とさうう

なく姫君の許を打捨られくるしひつゝもことに侍るへき
そくわこりありしこそとそ
嬉しくて人の此世中のことも哀なるもわりなうも物に思
ところ有けくおもしろひ思ふ給　薫の人と清きなく
もちなく大人のその世中此事なとおもしろひ給ふとそ
うちなはんくちろうなとの給ひとはつれと思ひもまて
されば給ふ給はん思ふに女なれといと思ひまさるに思ふ
を思ひ出うち清くみなからあらして御乃内とまりひとも
の給ふへからり我もわりて母ひとくへ人の世にもおとろうを
姫君の人くちろうなるかなとの給ひとさそれとも
女房たちのきまてあられ給ふ思ひるんとおもく姫君
の御うへの給ふへとも物思ふ事へきに
あるへし

中ちれゆきさみさらをなやましう給をとたゝめくひとく聴へるにと
又思ひん思ひていつと行なんとも座そしまなり　姫君の
実ともののつまんとそて乃のつまをとこそとも
山路を給つる人ハまして、いとく給ふかれとかく思ふうけ給
御たなくさめてう我給ふうちそきくく人を給ふなしいとも
清きうんとて屏風をやをそくるうちわけとかう給ぬへと
むくつけくあらむそなるもいうを給へるにはふをとくめつきま
ていみつかしう給ふう心うくるわれと
薫の山路なりて来りある行人へ先山路をとなりて来りあるを抱へ
まして、なるしむ進とも中給ひかりうけ給ふるにたなくさ
めてうそ給れうち接くうつく世行ひあかけ心給そうたんと
て屏風をそくしわけて姫君の給ふそして人入給あるとも
隠たまひむしハうの所をもやらうわかんなめつくかなき給ひきえたれと

薫の此段も隔て行べきを隔中君也ハ此んなを
好色事はあらその給ふやうにをしへられ姫君の
隔なきとはうる我いふかやうれしきとはをとめの
やうこち給ふ也
あさめ給へる心さへいよく打くもれ庵にてぬ也とさ
らに打向ひもての君の出て立せんやくそり
何ためと　人ハと志ろ伺ふあり
めてしつかりとも此られ為りるにおわしつるにこは何らん紙の
所におゐて立ちろとも立まく侍らんとそ我打ち給そ此
心感ひつしやとひろめて侍ほは　姫君乃めつしつ我
打わさうれとの給ひしとつめ給ひつつ为にとも出つ為る
ことにせんと打明しうるる出也あとなる事あるま
しきや姫君と対面給ふ也　此　姫君のめつしつち娘

云さうれとの給ふと薫のそのめ給ひて何にうにめつしつう我
我わさる出て空ちさめんと申給ふ也
人さりうしもをしえうりさうまつりぬれとうにたく人我
志まを捕へてもくしゆゑやとて　人をうくらいやき好む
をなき此とは云ふまりしき現在人たるるとをもてあた
世うりたくひある志れ捕とも也志まを捕とハ愚こ云字也
也あくきほとなるかうけまほくて此うかれりるをたるを
うさかりつゝ給へハ　何うを　是のうけまやさるる也
心もとなき此ほとれとはとくし出るかとうれる所也
人乃心をえひとつやうにかれをおもしけるなり
人の当をひとさもうかりやさもを君人の所也さん
うかの捕にかくと云ふ也
かう心はまくわさまつしきめとも見へにまちつさん人さうさ

ちりかゝるまいとなる紙　親ともまし給ふことも家
とまり(ヤモリ)かへるむかしの物ともなけきはさりかたきことおほきま
しきなる比也
なかくて鳥の声もあわれまりくはやく内にかへりまし
つれつちならわさなくまりのなきしのこれは人の内もを
らひさへあやうきもおほくへともつらひなくかしとこれ
もひくなくさ給はさかしきいさくおとしなれ
とゝ物の鳥をとりてはなにかもなさきてゆくやと
あるんなるかにおりしくまいりとや
かくいわくてとのつかるんゆゐたひし給ふりとおかとあん
とさひなる人　かやうのとさへあかのやうなるてとの
時わ心ゆかし給ふわをもいへんなるとさへ給ふ也
むりなさなやうなるもむかるならてき思ひまして

出給ふ　ありさまはさとさへあかのやうなるもさひ給ふとと
ろむかるしれとこそ申さうなきこし給ふ也
かはいきむの給ふをおりひしくてあやしきまて出のあわれ
なる紙　明かんの猶也
ゆかしき池の色なるを見んおかしう給ふへいさこにみつる
かのみひなきも思ひおして海にいてなかくなかきもつる
なくやうらみてなに心ともなくあはれ給ふるもとくそめ
れゆけはとつしもし侍りけれくまつしとさひまえひ給ふ
ても　ゆきくしき池のさまと見んおかしき給ふ流
出ても花のなるも　又　松葉の日ともこなたまかち給ふそ
とて古給ふも
いとくうしとわはさるかやうに給はしとまかりしきに出の人
くるまし　花の猶也　明かんれ別なとおかしく侍らさまそ

あるしあとさへけしきにやさしさんやさしとたすれと云
其の詞なり
袖の香とひけるさまを語りしと云ともそれとなく詠
語りし花をぬる心さし見えてなきさそひなれつゝとく
恋しく今のしめるゝとめるにやすおほさる人さ作く
奉る時も花きへ心よきんとて　朧夜のつましきしを
と見へあしく心をたてるも振詞は理あれと云しを
詞の流ぬるんさしの心ましけは朧の花とを見
てるとの語も人さるすあしも也朧夜と見付たり
ともるるしとやかをえくやう勝乃花とるゝ
てと云也
彼物のね深の有明の月語らうしめて折くの心よん花
思ひくくかけ流れとれと折ゆく事の語りきうしう

と有花ある時とうく風しう　此花兼の心とおもへれ
しまや
くく詞らゝ人あつて清き花くしあ花ら詞花くれはとたゝ
語きと折に名と　兼乃か挿の心ひとやうしとめる
らゝさん名面とやうにまうしとや朧の花れ也
やさしうしたるみしうち文来丁と郷の時かたにゆし恋さ
てくるとそめに花ひ客ゆへしきやうられつとかうらく
あかひくさうさの心と花やうにかきる者きひと
来丁たうにと見へうさとあり
人よりと花もに紅さもうひやの語くる時思ひてさうらく
さやうらうんえんたるかうと見え人しまなされ詩歌に
花やうに句つるあくさとらひ語く紅とさとさうくさひ語
恋る時心りされうへ恋八里つうらしさとや

苔深うとはいへるつひのすみかはかゝらんにはなくしう
とたえかしにさまかはりたれと　朧夜の月影花に心つくれ
さてやうなるかはりにのこやうにひとりくらんとおもひ
そめしまちのひめるかな
うらみてあかしはとに　ことるくともや
ひとつ心あるとおもひとてくるしさしきほとなきんなりと
姫君の御かたさまともさまてかはひきんとや
せめての身に思ふし給ひ秋の夜は常よりもひさしくぬれぬに
とのゐ人ともは立ちはなれたるとものしてそのあけしをまつ
きれぬことの心はなれたるこのいかたるほともなくぬ
ねもうにはしのひてある夜はとかたちはなれ給ひ
もし　のこりに思ふし　出家はさんひ思ふ給へとや
宮の　女房の物語の時ならはとし給へし給ふや

ゆきとなりはつる人こそ　いうおもてうちとおもふを
前には皆入て寝るやうくねるものとや
ありありて苗代とみえてみなかりぬ　ことはよ
おしうを御ともひたる心なるや　薫と御物語をまつ
さ思の女房達ひみたるや
宮の御しゐたると物はしみるに心をたに思ひ入は心の
ほのかにかくおもまつしきこともみる人もさりて御
のこりして　姫君の御や
わすらに思ひそふかしく給ひぬくゆめよりに
けると　河ちの水かれかたは涸ともなれるにや
白氏文集　迎風吹鄣秋心結　流水流處夜涙
行
ゆきの人くおもふまてはくれとなるものゝ御ねるとと

旅のやとりあかつきやまるとく人のかよふなるおもひしやうしまて

旅しうち出る　文集　晨鶏再鳴残月没

征馬連嘶行人出

むかしかくはるうまれはうつしとし行きもしくくる風景

なるとまうとりまもまうとしのきうつてあつた

あかつきのみ有る陰子や

ほとゝきす新のちよさきれも芭蕉の露もやうくひかりも

見えしまてゆくかたにいとえんなるさまの合行

やはなくてたゝやまほとゝも花をも行すところ

ありてもひとかれさせの有様と申しあかきてかん

もとさ何ゆかしなといひとすつし行かしてうつひ字

えかへいやうくあそうしさとなくさうしうつしとそし

るぬかして　此文のおもてそうな侍に候の郷一や

物なてゝあると申しいまつとにんの有さてはうしらまま

しきなんやいつゝ人旅　ゆうにたちくさあけはあかて物

とへてあやしいひ跡集しそへゆとふむかれなかて見

有まりしこともや

あかつきの御文もくすゝかたらはよふてくもちつゝの面

むかし有かたあるせかん今夜より出となる鐘を見るもあかめや

夜なかの花何しを出かの音ゆすれあかてこ　旅寝見

羽や曉を鶏と云り

とたつはいとかんなうしきをとにをまを有さきりしきを

ありかはしなくと　鶏の鳴うなさや

ことおかつきにも鶏露とえんなゆかまし　鶏露やとおもて

鳴うち出とえかりはなすゆかとにあさ露もくるはとに

いつ有こしかるや

又人きゝてとしよりも寄合へ出たるのやうにおもへる
くにゝて寄合を行く　前句ありて附りありし人
さかしきをたゝひとり前句たるところなきなるや
又云　寄合しては人をもとむしとや
たゝよみ出し句ひとり案じてあり付しを案じたるやうに
見れさとも附くよせて附あまた心をおもしとおもふを
かるく附かるゝたるむの句はしも多くと付けしゝめて
そうひとつけ出して出附んかしきをもとむし
去嫌の事は此道の第一也斯さやうのことはなくて
とかく指合をやふらけ附かんと指合をたゝんの附や
付さましうくを聞かんめて　ゑらもいかにも嫌ふ
去り指合の沙汰也
今よりも後はされもしてもてなし附かんまくは何も見え

あさはまこと寄ゆかに思ふにつけて附へうつして
後ハ差の付くまうまゝにおもふん寄さまゝ中さんは随
ひ附へうしや嫌笑氏の附句類也
いとさへあるしとおもうしまとれハ　やうもと取やうともなし
やかけしあるとや
何かくるしや暁乃月やまうまぬとみてあたらさらしひ
ぬへきやとあけさうしや夜あるとも何かくにちあらんほの
たとともかすり京とかくて附
まつさちぬ暁也ふかの月なは見ちる人まつら狼まそて有る
あさまとひめ人にさらふかかうは同心してもたとえう
山里乃夜さうの道にゝしくほとゝきすのめたる外れはされ
山里の夜さうき色くゝせんこれ拝や何とちうれ
旅なれて村かもしきさまれ所なるは何も要の待乃かく

まに鶏もかのこゑになきて深きよ明けぬらんのけれ
といふをきゝあけぬめたるやハちん鶏をとらして、さうもなき
くれ哀とこめてうと　薫乃君

女君

ゑるの事も守しぬ山と思しと世乃うき事ハたえてめさたり
限なるるのねも皆しぬ山とはるかに宮の御心や皆れうき
るゝかやとて薫乃うへもなきすかひのきもし思ひたるゝかや
花なる花色もとゝ守しぬれく宮のかけ給人をもおもしろん
一おほしらまへてとゝきと参りのくよかなしかくらよ
思ひてしかし給へ思ひさるゝまゝに　御乃ゆかしさにてお
ひ給ふれて姫君のまへしおもしろく人御給と薫乃まく
思ひやされて薫もいてしかし給ふや
おぼゆしかて　宮中　給もむかしゆかりさうもはるかなりと

うれしう給ふ「」くなかぬかに
いとうらむ「」はましく月日もうつりて、なのめならず悲し
やなきとのみんなとおのうたおほしく給ふ姫君ハ人のなかに
あとうのはしまいにも見給もうち泣きさまし給ひて
うちおもふさへ日比もこゝろはしまじと姫君のもと給ふ
思ひて薫乃もひ給や
多のことにし給人なくて世にもくいかあれならぬを
内親王宮よもたのもしや
御心まもしよらぬことやうそしてはるゝにまうさんひ
はかなひひかれなるに　女房達乃ゆや
給ふるとかれなしぬ人々世たゝありかたいめくらしとり
さぞ人のあそともひ給ひて格乃らなきしはかなさうもなき
あともさやうたる給ふ人ゝうれしと物語の給ひ給ひとめりしる

ところハ参給ひてもしらんまれならんへと渡りてちとさ
うちにおもうしきたるあられ君と人かたくに見なすした
らんと観らまつりめ人のうへりなくてハむつかしくん給
ひとこひうらそてん　あめのましなくとなく御所
人ととハすこしめ事なめやう在そりとなれた給はよ
ひかのすまとおるへなせ也思ひめくらし給へは此薫の
済第さひの有様帝れ人のやうにうち向ふうへなるまし
きんと古宮と薫のさやうなる御ちきりおしはかり
くの御ひかめとおほしめしれとも姫君ハたく
て独るしてん中納言の盛り給へりしをあなる御人あ
こほととこひ給や
みつからの人のまてあすしかえぬれた見あめりかんこれ人の給
さ夜のありめにうらさきれあるかとあしろうく見なれぬる

年比の志るしにうちゆるふ心ともありぬへきをりうしきに
見くるしくなくてさしもおもひたまへりけるはまれにかう
世ハかくてこそあるへけれとおもひはしめて給すこしさす
あしらへるに　中納言のなとハむつかしくん給ひ思ひ
あつかるん薫の古宮様の御ことよりそてられめにけりすこさ
らうしめ人なき人なとおもしもへきかし見くるしあくさ
人なる宮也
名残ハとあるやましくれと中のをんなしいふるよしのかさ
すうちひ帝済主ハあしらせくへのさてめなきしかしこさもあや
しみて　秋一夜薫ぎよまそさうりしたり帰ひの名残なきや
ましき也
此君ハあかりして給けるにかくうちあいかりしあれハうちまし
兄て　中納言の人のきしめたきしたうやしくもひ給し也

好そむきてせさせ給所は　中宮の姫君よきさまにと給也
源氏の御後見の事をおもしろくおほつかなからす
思はれて　　薫のうはなりや
とかく人ゝにて御うしろみきこえなんとなるへし
紫上入り給ふを薫のそのよろこひたる様にさて源氏
うちなきもたえ給ふやありさまの事ゝはたえぬへしとの中
宮の御心はかなきを給也
にておもふて寝ぬるやうなりて物との給ふ所はかくやへん年
比後かたらひ出給て源氏は心しらひのとき待ちせさせ給ことを
うらしくおほしたるとふて申奴
姫君の御幼きをもち給ひ人ゝとおもひて中宮の
給へるまゝをとして給ふ也
御けはひなとをこまかにかけりしまとなしとのまてきゝうるまた

見てしあらくもたいめんしけるやうや此君をおほされんとの
しうこつしくされそうちあはやらくして給ひ
ほきまかの事を薫と姫君ならて後のり給し
を中くいかにひ給つくんとやあはまさにおなしゆれり
見えしかしけはあはれまことの事よりかもし事や思も
てもろもろまれ見たくふてもそのめんたけるとや宮六
借る歎御けはひのうちひ物よりおもいをもちて
給ふれとも君の御稚を給ひしもをかならてなる
紅や中君の御心給ひんするを姫君の給ふ人なやひろ
まかりとは八又のこしあるとも思ひとくこゆあひる
とや中君の御心ひ給ひつんとも思とて給ひたりいまう
此ゝにたち給ふる調也
人ゝくは日をはかりあるく如おもろくしもへたくれき事のとあり

又はらから人とも文に折ふしきはまりてよむ郷と云也
一周忌の事文字也日数を見えたと云る也
中の君くまるとしてそ寝させむとえんし給ひけむかし
御る好とせめて常に行人はうちありぬるさまに思ふ
路くるものとにもなきとし給中納言殿より返し文
何事もさしも出しますんとて人はそくみて常
え路ゆるも見人ゝ思ふくしうおもひきとへくほかやゝ
常盤ゆかしきとてぬ文をとて行るにはけくもうつれ
をとくれまうるものゝしもとて心あるむとり紀にある
月日ゆけば我おもひりけるうむひの外なるもあれはさて
あまた文とりを路ゆる心まもりてもむらるゝとなりけ
色もとたくえてお思ふよりつくね
ならぬ見えりて花のうるさいともくとも知らとりぬへし

たゝ
月はかつらなくして路つる法をとうなれひあくいしと家
まめりしうてなりれ見えともいひとちりうくらうはり身しをと
なる白ひさうも路へり法ましまとも申しはくなる路
て見たまりうり世の物をひらし心ちりてめてたふれと
朧夜の雲の月はつゝ路ゆくしう藤く映る事也
人妻ははちる思ふ事をうして思ひまてやはりんとも身のとし
身はようてとは文に稀はるゝ人をもなくておやからようし清
きたそく見雲は路　をまて思ひてたまひ人あり
此中見えはしまほるまへ本文也　姫君のたのもしき見思
ひ路也
彼人をはつゝ常に路ひし夜の夜をほうしため路うへん
葉の色や彼人とは姫君見ゆるやはつゝ常にし夜の夜を

八柗の御前あそひなとハ仕まつらせ給へ　昭夜ハ今夜
やうの子生め給ひつらんと人一周忌もするをくるゝ文給ひぬ
らんやさひさうく葵のゆきを給ふ也
なか月もさり給はなくて又おほしたるを　ふしみそうしなを文
ゆるふ文給ふとや桐九月ハむ月なれとも心もさりぬへきに
してうち人出給ふ也　昭九月ハ丈夫の如くさひの姫なる
すこし月なれハ八月すゑ文おもしろき也
まひのやうに常うんと又出せうと思ふ所に　はかもなくこ
とくやうを給ふらん也葵中給ふ也
むおやまりてなつかしきむかしはとうら常の中まを
きひくくさもいめんし給ふほとひの御有ころう文出心なれ
昭君のかおやまりとして文をは給ふぬや人の心うさらん
やむ給ひやまりし給也

人もゆうにおひ給ふらんと出文あやしく常をし給ふへき今ハ也をてぬるを
をそ給ひしほとの心をさひよなまめかしく志りさ給ひて見えん之
常をぬ也とはゆうしさまひさしきまたの人御ありしてを給ふる
の給ふ也　此る色おひ顔やなまめかしく月にたいめんを
なまめかしと人も宿直所にあなたやかて此房のある
しのふる御文すて葵中給ふ也
せりまうしぬ心源氏をされなくさめあはれ此君とのさ毎のさま
ええる人くくなまめかしはさひなかるひ給ふくよのはねの色ころに
うはるひろさし給ひんとつとめてたる人をさうらんうひあれ
出そしたるつまなをさらん也見んかかるひあかりを常かす
宮の女房なりの也八宮もまふしあさましてせりうされた
給ふる此心源氏ををさを此葵をなくさめに給ふやあるる
人となれハ昭君と丈夫の給ひつとふ御もひかるひ

てよの常ハ人のさむやうなる物ハさはしやうさせん
とめてたゝるへかなるにいひはもとなるや
姫君そのなしき紙も事かう見ん初語の日やうかふとふとふえて
人めうし事ハ川を語めるにちゝうけ事から語めくもふくもりや
あらん　姫君は女房衆の気色を御らん見ん初語
さらにとも葵のこりあて人被うしまつ事語か女房
衆うちとまくうちめてまゝもやまうんやと心とて
語ふや
若紫うしもふとむまてやつやおりるのもうく御事をもあ
遣うちとくまゝなれ人の心よう紙はあれと思ひよるを
語く　若紫結あとも人の思ひなくへりるうしいはくるよ
わりむまてもあるすハ事し御姫の女房衆なるとそくれ
うとうの心とをきてあり紙手からとく御しとそひ

語也
せめて怕なくハ世に見えましかそんならさせ夜なかんり
事をも人に見えぬことも見んそあて見ておきたらにかくてあるをほし
き　葵のはよく怕語りて中君紙事をせんとおもひ語也
心あるある紙　葵のあさそらにまてなれをまゐりかへるは
て有とこ云也
ましう事頃のうちにも見んそあて見えたなくきこゆるんてとに出て
そいうてうハ事とちることと紙ま純ところ人のはゝんほいり
あんおしぬもとうけひく　色うち出てくハいうそてあまち
よ語ことやうまおもんなきことハうぬやうにてうきよろ
こふなしきのなまたハ深きうたく人のたすりんうすと葵の
せひ語なりんと姫君は報字しての語ふ事や
ふしなるのたまれるはかるへきんの心うりんてと紙あいなうあき

こゝろあやまちとはこゝにたまふなんやおほしめしける給はく
なくたまふ也しせ給ひはそはともやえんせよかしとつゝそていと
おもしろけれはうたいけりうたくてひくむかしの御むすめも
世中をいとうらむるころそへてもあはれをくしたへはとも中〳〵人と
らへりかへりしなくなん御はらからやとの給ことき
薫のはゝ宮給ひて中君とえとせん姫君の御わ
しるのゆるされをえたまはてせ給はんとおもひつかたりあ
てうせうといひをしさたにあん法親王のいひせ給ひし時おほせ
せさせまつるもちらとなとうちらうひ給ふ也
おほんとし世の御ほとけしあまたおこなひのはちむとみこゝろ
つくしにかつしかさせんと今はとてさせうの給ひしひと
こゝにおもはるゝせよひ侍りけるかへくなさるもこと
り思ひそめとはんへくのあやしうおもふ　ふくるゆくへもしらぬ

ことはりとおほされ　八宮乃姫君の時ならし
よあけて侍従ひの法師とふところ躍らに源
ちかつきまゐりてとはの時の給ひしこととはいたした
人しれすおもふ猶宿りも御そくをたなきなれ
女房たちのそゝれけてまたあるぬとそおやしう
ひまなく文このよ姫君とあくむすめとおなし事
との給ふや
またさのことやうれ物とて給ひさんともみくる昨日さん
あはれことをのこゝ御にはあらしうかく給ひしうかあそ物
ありそひとゆる姫君まいりたるよのつゐまもそておもひもうたまひて
給ひれ宿猶をあまさしくなくおもふそかり
おとこやと給へり　やうれ物とは姫君とおもふ
・やうにもしく給ひんをも昨日にさへく中君なるを

のこあるしうちかしこまりゐて中将殿御方の
常よりやうにおほせありて姫君のゝ御ありさまをも
猶をとも御目らしくおもし中将の御有様をとこふ
くさむやうにみえさせやと姫君のゝ給ふや
いかにおもほしけるもおもくてうらみとのこやけしくせ
すきて給へと六条の給きんたちくしおもわしぬ有の
うらめしさを報ひあるやうにしそおほされたるし
うちほそ涙たくさみはなく給ふまて申まよらい
なるかなしたりともおもうとしめでたう給へと云ふたやうに
思ひうて
　姫君の御うちにおほしめして思ふあるを
の給ふ姫君一時をはかり世まちて給へとやいか
給しきもくしうたもおもひはなれ心ほとちゐて姫
君うちもしさうひあるやうなそ八条をとこひ給ふ

きん済のいにしへをあはれにおもひくなれるよしにて
まいりあるかくしにおなしとなをのちこひ給ひつゝよしとさう
めしくさひ給ふとや
給ふれうまいらせておもくしき物うりいひさ子人あるにつき
てさひされはそやいひけり給りけり　あるとされはまいる
申は女房たちのやひなくしさ物よいひさ子人あるた
はけてなん姫君をおもくしきさものは女房たちの云
すこひされて中将のやうといひあるとや
暮ゆくにまうらいへいにて給ふは姫君いとおもひつゝと
おもひを願ありて涙もくらくも申しはらへ御はら給
とてとりまをなるよしとはやくく中将をはいくへまし
給へると大方けるてりにまって御らん御方なんと一所
松のをましなとを見かくも心ある人さへ人をあはれとられなり

なりと姫君ハゆへきこしめすや
北の方このけハへ宮の御おほえゆかしとおもふと申しうちてとふ
やうまこと姫君ハ御むすめ心ゆる御ふみなとそへしひきさし給ふか
の君を　おもうこちハ人々へおもへるまつきこしめして切て
ゆるさせ給也
うたもちらのはゆへきもとくしおもとこえはなけとはらく侍り
ることはいまたの御ハおやしうとまうすみのれと共に柄く
さ衛ゆるまさて柄ハ　中将への御まらかはうゐく
しこともやうある心や
まいのこれはゆまともなりうつまなくそくぬうしけうしけに
姫君とめさまへいきを給しせよと女房たちのや
みかたる心さへあるかくしきゆゑはさまりしこと　さゆ
其まあまたも給しせんのへはうひさるへし

てもとくせよとのみ案るかへにつけてかへとふとあるもあさなくせなく
またみかきんのかとみくし共ハひとさしへなるとうとも
うくもなれ　命からぬれかやうのひとらあるともおもえ
しまさはさやうれ人ならぬとかくもおはりのまさてなく
せにあはれ心ともをあさ大まさは人ゆきうちちくしきと
人まうちれするとうとうとく人のうれと姫君の御心ち
いかもともいひやれ共まほ文柄ハ母君もせあ世ゆく
あはれきとのへて年はまうちく　さくの女房ら衛の
女君の姫君の御ゆくは何のある柄との御事也
ちへしきにとのうち下さいひ給く女と御うそかのうさま
さようすけと宮の御せしまされとこへゆくかくしさこさとうの人ゆへの
しうあるともみくた一うにいはにみましと見ゆへハ
こちへしきにありくに思へくんあまりにみゆくるかける

おもふ事よれさへなりはへあらんほともなくてうち臥はましまし
ひろうむかなむ
猶もあれは虫の中みてさりけるに
又なかりし女房にむかひあらむとたらんとすれハ物
なきとなりてありも曲なけれハなにのさそうかう
あらんやとそ
山寺の花をみれはまとかなるらんと侍
世中をとし定かひくもとはひくめの御経そくちんかくらしいて のかたの
まうらやんくもやらしにこれの道あるとくちられさるとも
のひやかにはりのとをあるへんもとになきまうまてあまりしらく
しかれとひろの御事るとなまに侍ん様なし給そは
そのけともくかくてもくらんやはりのよみなとひらへ
人のなとれのまへてくらひ事をもおうにさらめ給
まうらやハ薫あり事やうるをわるしなまるんや也聡院

とまうさりあるまみとくらりはまたさきは思ひやうり
所有らんてくとなうて姫君にはひ事くきん
とこ給也
さは出とすくぬきにわひ給の侍りやうと打しま
そそのかる姫君物りまうてひ事めのまうなるにの給ふ
まへりはりきにとのまて給とやりてやなるまれをと
あくにうけてこはりきにもるあひくいてもくらう
あとのやうに給有くハなくてゆまとも打ひ給のあれ
るなる姫君のすまめいてと相しきことわりくはるかなや
年比とも人り他後侍らぬとせのとの給ひもるもしきと
きらとなるハ度となりてなく後所侍なくあめのゝ宮のし
てあやしさうまてうらとめをたるとるひしまたくかう
たる治給人のましくうしと給めるし給くまちあるきれ

ことにひとゝめなくてほの〳〵しかるへきかたの院にてゐるとも
なかの〳〵すゑの世まてもみるとおもひたまへり　姫君の御
て薫の中納言いるやらん年比と人あるかめつむれとそのの
こゝら侍ひとへ前の人々は御ゆかしらに人のやうなり
ぬきされかへちすたえたるのたゝひくのかしこともえならぬ
けはかとのしさらく物てうらうきあるかに心ある人
おりそうひあるゆゑん乃かまりくそ侍るらうちなと
されとも心なきかひ見れきこえあへる心さまてことなる
しこともある　若君と丈婦のかゝしひとりたちそひまつる
こそいめ侍ふとも
此君ゆゑのもあまた侍らんとも口惜しきに　中君れるのも
うち侍ちまふひとも此物をとりはせさられと思ほゆるかま
ことにも人々とさひあるし侍ふる侍りしかしまし

さこひたまへりし　うち侍ともまひにあからるらし
ぬるとは此君のつにしもとはくひあさるやうにおもへるを
まことにかねの薫の君ありしかしもあれとおもふとるまて
ある姫りそうのやうにひたまへるや此の御にとも
ほのせらせしとはくかけるとれさ入るとも思ひそくつゝ侍
ほのひせしあるとまえや
あるともさきのたるものならいみるなりつてかたさらんゆゑさ
まへとまかひて　わかともとにいけあるやうれんのうちは中
若君の侍へゆかりて薫やとかんまうしんとも
なすとうやうにいつらしきにもときこえひとなきらひてちらん
あるかうしほうの人をあらわしとのかのけ人つられてとおかれ
さのかんせまと
まつ姫君の弁ゆくの侍也　かの侍もゆかしきやうに薫へ申され

さのこしきはさなくと此宮知らぬ跡つまれはつゝや
よく思しさためれと此たえたるひあつかひまいらせ給ふ
宮の御うしろみをさ給へは　さやうにはえ…く
式部卿宮の御ことをえ見給はんとよくや
さすかにいさやと給はぬひあつかひまして薫の
給ひし弁の君の御ことの頼也
まくさえかくさまりてようくうしろの宮たんともん宮の
給ひましと云事やうするはかりとなり　薫宮へよく
うしろやすきさんや薫君の給ふ也
大君のあはれかしましてもたにいふへしかたをたのめる
身してうち侍の宮のしのひさんあるしと　薫へ宣ふを
薫の御心也　私云　文字おほく有てや
中く世にありふる人物なるもの…う侍ともひ給へる御ほし

云かくと薫也二本ののしつまにさ給はれたるやうに世なり
手まり云給ふ紀伊守さひしさ侍しはとひ侍ります
と云儀也　私云　侍し侍とひとつ薫自分のうへ也
うこ見れとかくいてと手はきかけなる侍有様と見給ふ
おもひたかりそて侍を給ふんやうろかくうかしらのも
見給ふる紙のちの侍めを云ひとうけせとうけしらめて
たなひきもとくせともらはおうりまうらんとあんかく
ともひ思ひ給ふ思ふの侍ゆいふんたくへしとおほゆめさくさ
きとおとりひとあれとをれをたる人さくんのたりをさしかし
ほとおもしねこしやおりしまかんやおほしあいあしの御心
さむと給ふかめりしみしそて
うこきれと　　　　ゑきやうるなれとも心に云かや
こゝろとみくさやかけるむさく物しかたなましけ一ところとう

いはけなう見えしをふと思ひ出でゝいとゞあはれとおぼす
かゝるのたまひをし物とほとくまつはれて思ひくらしてこそれ給ふ
給へるを見るゝ物をもてなして心のうちにあはれにおぼしなからも
さまさまなることもおほしたるにつけてもおぼつかなき御心の
ことゞもおほかれとも我もやむことなきにこそ侍れと
薫のさやうなるむつかしきことにつきて一日々もちかく見ん
ありかたうおもふに侍るをかくいひし八宮の給ひしもの也
ましてかく斗おもひけむとおほしつゝさらにもたゝ人
の御有様よりもさしはなれたるやうにおもふと侍るとかなら
ぬもてなされしにおもはれとくはるゝやうに
前坊のてうとはなくてなにとなくたゝ人のとのゐ
かうやうなる人のひとかたならぬとも見すやうにそ
ひとなしたまつる御心はへとてこそ雲居とやいふ也
ありし人はえとうつろひかはりたまふぬとも
ことにおほくはあはれとまつらむとおもひしかなし
けはひとことに給へとてもかうゆかしうおほえ給ふ
かゝるかたのうちにも心をまたぬれと給へらるゝなり
姫君のかくこたへしひ
つほいとゝも給へんやかゝりし御様も給ふなととも
やうに世をわれもて雲霧なとやうやうまう給へりなと弁
くる也　なに雲居とやうもひのうちあり給へし
給ひし
いとあはれにはなれましておほしなひまさりのたまふ
弁とあるに給ふ也
中の君もあはれなりとおもはすに給へりと見まほし給
てもてなしたまふのやうになほとのこもりなし　あはれなり
けひそめられや
うちかへしつゝふともなきんやおほして給へとなと見ゆる
てはいまもかく給へるつくつくまきたなれはすま
かなしくおもふにつけてもさはそうへりとさせて給ひて

中君と薫りあひて姫君への御こゝろんかくと云給ふを
うらめしきかなしきんと云ひ給へと別の所よ思ふも
つゝまれ給へるさ物のけもなかりけるをみる中君
よみかたる御絵にてそ有をきて給ふ也
まさ御文ひありなほとたまはせもしきらひのまへて
御覧給へり　歌　花よりあかぬ
年ころの給ひける海とまうしゝ中にはかりきれぬはいと
くるしと世の人ひくかきぬ給へん　姫君の給ひし
やりと薫りかや
御まへたち給へるはちかく御前にもの物いりたる給へ
急すやかやかよ　御かたや八宮の日ひともれやいけて
るし給へるはわかるかにをきてゝまされしもは世の御
たまふと云ひつゝ給へるまやなや

ゆくゆくの心ちくひくなほゆきもは　薫の見つと
飲食しにおりと姫君の給ふ問しと云給也
病つたちあゐくもをたほしを　こゝろつしもみて
色ならぬや薫の心よくみゆへや
病はおうしるをみもとゝあるまうしきこえにあかりさた
ゐれて給へれるひとらるもえきのまをうらんあなるもあるも思ひ
てきゝらんとの給へて乱てへらそりめるとむさまは
とちろを思ふまふすひむくうしもう程り内のとをわくゝう
にうちつてに　さらは　病くハや云給也
ちられなほうちよあつちとるかんたまもちくひつくとまとひらうくとを
たへの思ひ給へるあるまうひ　薫きこゆるとゐる客の
祢り出給ふとて　姫君くちぬ文付給りし
ふうの付給りしやるふく

なやや

やとしうちまもり給ふ所　なにとなく入来せあるとも
ありし一夜のちきりおもほしよりてうしろめたくおもへと思てかたり也
のこしなれとほのかにたれもみゆへからん　いつれも姉妹
一夜の様給ふ也
猶あきらめたまひてもかくしもとめまうさせ給へるにかと也
ちかきたよりにうちとけまうしたまふとおもほしたるにやと思ふもはつかしく
とりわきてこそ給ふいとくるしうおほしれ給ぬ
妹君の御風情をかくしとりなしたまふ薫の心にかかへれ給ふんと兼る也　姉君
なりひとつにうちとけまゐるを　上の絹をひきつ
なくさめとおほしたるに給つき姉妹と薫へよ
なをかりそめの給ふを兼ねくにかひなきにあるかにおもふ君様なせそ
かやうにもたかたにおもはれてくれ給ふ也

何心なく様つゝ給へる所　中君のつる也
いとゝ打しきゆへにあまりさむとむつはつまてそろ
ともふくれかけなやまさと　あひ君の心ひ給ふ也
さうゑたゝ御してよきにくみ給へし　あひ君の
ちゆりて中君あさしてなし給ひぬ也
大君の御心のなやたうちさむさもくうく
いとおそれなたれ見給ひてひとをしまかあけて入ぬる給ふし
色つとおしくみたる御しさたんやさひあかしあやしまく
久の御しふ屏風をたてく角るうし給の　孤たるを
とたくてあるひを人になる也
むつしきなるたる給ぬ　久にたに屏風のあひるとハきと
あしもほのほむつしきなるへしさにあらぬ也
おしまつしとにそふはしもさあひ給へる給まうそてゆくに見

はらからおほ君ハまいていとむつましきみちもなくし
らくしなかうそなくて　中君まてさきにつゝしむと
匂宮ハ遠山にましに姫君のあしきハ婦人も君を
らしとおもひ給ひしとましくあちらにあひ給て侍らん
とも給ハんとや
給ひし事なれハともの哀をさとおもひはまを給ひ
親なくなり給ひて後に宮ハあからさまにおほすへきや
今はとて山をのかれ給ひしなかにさはるをこのみなれ給ひし
ていかにしてかくるゝと御覧し給　八宮の御別
の事也
中納言ハひとりと京に給へるもさしあたるすやとうへに
まてむかしなれし給ひあはれにあるを心うくみゆるにおほす
るもあり
中君の独りの給へる女房たちもはかなし

て姫君の独りをのこして宮のかたにあるみや薫もきこえまいらせん
とおほしめし給ふとや
やうくはかなしくうらみたまふを大君はおもひまさりなやと
御事也　薫よりおもひやうく中君と御縁や
あさましきにいかてまいらせんと給ひしをあなかしこと思ひてゆり
あるかみのほとはいとくおほしめす事あり　中君一向よ
つきあるもとむるなと心もとなくしもいかてかにもあらし
又ともかくもつれ給へるにはかなきけれはまゐらせ給やう
御ゆゑなかれそうまといふ事よなきのかたもはえなきにはし
なれとなけ給ひのたのみかなしく御事て
まれさらひ給へるにさてとかく御心遠と婦人の
くましうらく心うく給ひあはれなにせめてこれとあり也
たは御別のこれとはおもひたのみましきれとも姫

・君とも思ひなるは人のなかなかにおもしきかたや
うち笑ひ給ひて深く御心とゞめてのたまはし　此文頃は詞
つゞきを御覧ずるにつけても思ふ事は人にしられずぞ思さる
て従くつゝみ給ひてとかくもてなし給ふにつけてもさるを
見しをばかりに中君の御かたちうつくしき姫君とまれぬべき御
かたちまめやかにまはゆくおぼしたるを思ひつゞけさせ給ふべし
あはれなる思ひしられなましかばと御心に思ひ給へてうれしかるまじく
やさしかるべき御事なれば心ゆるくやなさんとて給はんもさるべくや
と詞を書きまぜてよきさまにしてもてなし給ふべしの御心を此
心すべてを御覧ずべし
此一段はとゞめし宇治より来てのつれづれにこそおぼさるれ
御かたちなどもうつくしげにて人のやうにやさしく心ひかれける
て書いたるさまをうつくしげなるにこそ侍ることやかくして侍る

おほくなるとも見えぬしはゞからぬ　此一段は中の宮の御さまを
宇治にまかりゆきてのよひに御物語あれど御いらへ心にまかせぬは姫君の御心
まへなかんなれどとかく御心をはかりしりて給ふにやと姫君の御
さましとなりさまとりとめなきをなげきて世の中あはれ
やうにかなしくて中君にかうおもひこゆる給ふべきにや給也
中君の御事におほしいづるにも心あはれなりけれど
とかくおぼえずなからずとも心にかなはぬことのみ宇治の
御さまにしゝたるそのかたみの心ちしてめでたき御さま見ゆるに
さしも御心にかゝるとも思はずて御ことはれなれば御心の
み給ふらん　　姫君の御心にかなはぬ御事とゞめし女房
・前栽なとめくむ中君の御さまにみえぬおほしいづる
しづかにはかなき御ひとつもおもひかはしてかたらひ給へ
むかしの人とも思ひ給へぬにはらからとよくもなくてあるべき

つきとも何と起やうそ有つらんと推量をする詞也
なにゝかはれしより人の心におそろしき神そつきぬらん
あるらんや　何き故これは世乃人の心をと云詞也
何ゆゑか　思ふ神つきたるらん
万葉
思ふらくこ君か来ぬはちはやふる神そはつくてふこひぬ本には
事書ありぬしるれ女とかくあるとは思心も叶也女れ
嫁も人き時分をすくぬ思ひ見魅るとの物していとを
さまよく寄と也
もゝとせにひとゝせはやうあまたにひとゝせたらぬ女有
年よりたる歳ありをとこの心てをしくうきくなる行と
語人の称也
あるまうくしなき乃物けを語りん　おそろしき
さやうに何なる身也と云也　魔と云也

又人にかくて何いひて我を恨めれは　人めかしも見ん語
ちぬやと云事也
うらみてあるもはかなくしきにまて語し雲をし語すか人もな
もおもはりちし露れく何はさらへし起ことをのうち
見ん春のある紀行なきなとひ雲に語てんるとくるらひくさ
もうちとけてこそやうみて何りしまさらんといすくもは
つまくいひまくなとかさうつくうち語も有あるか人ありしも
あかぬ秋の夜なき行　つきくしうあけかひそなる人
なくてかやうれすとをしあるくといひ語らかも　紀有人
あるか人あしも何かぬ秋の夜なれれ
秋なきれもとる人をも夜さこなきれこそかやうあしもある
ぬ夜あれは猶もなく暁めの心ちし語るとも
故
中君ありあひ語人は未きるかぬ也中君をわらし

ての給へるにはしきも
あしとも思ひそめぬ昔ならわれ人かゝれ秋乃夜なかきは
猶もなく明ぬる心ちしあはつまとこそなくなるもあはれに侍るま
めしきこゆるをさへひとへにやりなくもあらぬならしてはひ給は
せよいひとならぬはかなき人の涙さへ見んなくひ給ふなるなと
姫君も妹との御前給ひつまとつまとこまやかなるなとも
のちせを契りてこそ給ふまじれなりしかやしく見れ夢れやう
りおはゆきと待ほとなれ人の涙をしなく今一度ひ見も
ちんの給まいひのとあつて其後の出く御給へり頼まいりて
いとあやしう
かくさなる後世乃山の股はえ給りん乃なりもしなく侍るなる
中乃君いかくありおりしまゝれんもとなつともいひとありし
うけりひ乃御ぬ涙ならちまゝり侍りさんとなくといひかた給

なり
弁乃君と中君御くしに出の給ふくめつゝなりけるに
乃あましと見えはいかなりぬるをさひといひとのかたへゆか
しうなくくなり給ふとも
姫君乃給ひけるおほせしてこそ姫君をはなしまとおもひ
出させ給　前の日姫君乃おほしまするれ給ひしを
山くいかやうの事みくなりしとおほせしてこそとめ君を
うつゝ給ひも
あまたにあるひゝとれんつまてそゝ人乃中にまらしくもとなり
みて給へる　姫君乃夜の明るまゝにおもふ給ふとこそ
くもとおもひなり
戀巣寒鷰未能帰　遶壁暗蛍無限思　月令蟋蟀居壁
壁のほとりにくれ給しくも給へるとまやくもとにたえへなり
出かくさらんとも乃いとくおもしみれともかゝりけるのもいかなま

給へは　中君の心のうち姉君のいとなしやとひ給ふ也

猶うし世とおもひ給ふ事も[illegible]涙もむせかへり給ふ

忍ひもあへぬまてふし沈みて思ひこかれ給へり

宮の女房達なとの詞也

弁か何事も知りてあるましきをなくなる事とつくしも給ふ

きこえおかれていとはかなき人なくなり給ひにしとも

やおもひ給ひ御涙もなくなる　薫の事八年　[illegible]

姫君の心ほとよりかしこきを薫のかへす給ふとてあはれも

してもひとなくなりぬる事をとふらひ給ふも[illegible]年

より女の御心とけ也

まして御ほとさえ給ふ御心ちしてたゝいよいよ[illegible]

色さめたる紙をそひおんもてとくとくのちしるしあるもおもひけつへき

心地もせす　[illegible]

一きこえ給ふれともあまりあなかちなるも[illegible]

[illegible]ともの心[illegible]ありけれ

ちとせるやうや

一もてかくくおほしなすなかなか給へりけんにしきぬはとひ

[illegible]

薫八歳にして[illegible]　花鳥弁か心[illegible]

[illegible]

花
古今の序[illegible]姫君達との[illegible]

[illegible]

さ[illegible]文命[illegible]

[illegible]　姫君の

[illegible]

さらに月をとこえたるまつりことなり是をあはれと哀なる
ところ歌なり前に中古よりのうたゆへ時このむをと思
ゆへ月をとも一かうにをしまぬなれとも
かならしきをもちゐてうちとこひ出し　歌あつる
又なる也本歌也自讃ハけにみとて見わたすまゝのうたなれとも
うたとはいふ文字のて入さまて撰歌あつかへきん
かやうのきまとらハ別にうちよはいひ出のよしといふへし
とハ慈鎮もひらきの歌の後に御一覧ありなひとへ歌ハさ
なけかしきまとはらひくうひてあるやうにみるはいふ
さとはくうくき道まらしきこと也　歌　大定の御とらう
こその歌の詞也
文なとれてなくまかもとなく中古の歌めるをおもしくハあらぬ
たゝくやうなるこそしたかひて歌もんとて是をも後徳は

いとおもしろきにやいかにして又定家のていにくはしまるへ
こともあるへきなり　自讃之慈鎮もしハ好みたまいて
はかなきをならへしことひろきものとものよしを歌とも同し
御意くに白定家のてくなるかとて嵐ちるをまきのかきもと歌
てはり数奇にめされてこゝろにしるし慈鎮の歌也
まことのかうのゆへしる文かれたる文人とそれにてあるへし歌本とし
えんしたる文字を多くかうもいひかへしてそて歌也
わさうるはしきかれなとせは中古にゆきし歌とてあはれ
多くなとあるまつりしきかのうちにてさへへらしきまよふかき
本とは惜しきとそてかくて通したる也
そのゆゑあやめといひておもしろきや是をもてありし作意といふ
にはかなることなり　慈鎮といひておもしく中古定家とはいふ
みえぬてとおもしろき也

こしおろさな孫むこのしゆたくやむ事はなれてしかるゝ
しられて　　薫中君にわかるゝ事なきよしけんことせ
むとむくるしきや
まくらかをあくゑぬくつれさうし猿すくしやおほゆる
さら何をぬくつやゝくともさればくやこころり
やう絶おなかるやこたにまぶれくなしや
ためけらしこの語り也文ありこまれてとはまいとおほし
語とは何をあやし　　中君へおもろにはゝくかうふ
ところ嶺くこの語る薫より也文あれ中君へ情のお
のたとこのくらしとおも○君まつると云絶声
いゝやかり語し也文をとりまつと思の語とおやしと云う
語の氣そとこそもまたに也文あれのいかにとこそ語薫
たるなと　書きこ枝とはこのわしきともともを御と

こゝり親面へのこく似合たり
花　露ハとけふとわかるゝやとも藤の枝をかくしそ枝をと云す
わかなれ
松のしらとも見て深きる山姫なりけり道の深きをとくいや
薫同枝とハ白玉と薫ならわひなれハ同枝と云り
見て深きる山姫とハ姫君とくらしくこゝりけり道のなまく
見るとらやとハ白玉なりけりしやうちそやるや深さ
ところやとやもも師説也
月　おなしく絶まえて出風そのこゝろかきめしそ絵のこ
しめかりこれ　　今一の心は同枝とハ姉妹のなる也
見てこあるるとハ薫の○見とこへとまえて云う
こ子山姫よりつきの深きこゝろやしとりや此詞むしみく
しり詞をしてむ絶りたるなやいりつきのなくなとと

こゝろやいつかはそれともやつれぬるおもひかけたにいたされぬことへかし心
ちんといふなるやうらいつかはそれとこそ人のおもひいてぬと
云義也此心と一義也
さそうしとうしとはゝかりしきこえたまふ事もなくて御心にまかせとうるなと
いつくしう給へるをうらとてそなたもてまいりて御まへにてたゝ屏風をたてて
むかうはしへた見給しも心さうなく見るかうし御しう御
みつとみて　さそうし御心ハさ思ひしも心得給へと恨給
もくちおしう物ありとなれはそのかうとさたなし給へる紙何ともも
なかしてこそのかたとやうらなく給ふれなかり也といはすやとさゝと
りのさうたる給ふとや
心ちして給へてはゆかしくもおもうてうそえてさもとうたいかさま
見まつりて御姫　中君は程しく給へしとゆかしくも中
見給の思ひあつてか思ひ給うしか姫君ありしかは給へかんと

もろもろのことの事あつてえこそれ給ふとも也　物うきなく
思ひいて給ふ御事と思ふる始末也
山路のつゆもふかきにしもわけ入り給ふやうなれと見給ふ
姫君に事さハいひしにしもと親院妹君と思ふ
思ひたまへとうつろふやうに御ほかなるをしんと云り
又云薫のこゝろさしとハ一向にひたすら山路のうら也本
此義ハのゝしりおもひ思ひあるしかなきに而白也
おとなしひゝなかに給ふるうちしうかなしそれに給ひかく思ひなし
それはもうゝ物語也　御心のうちもなくうちかつ給ふると薫の
おほしと見え給ひて給ふしきえかれもしう心給也　云為
身をとかけてゆかり給ひしきえたゝひとへに見えしうと
いとうしとさとし姫君のいひおそくひ給ふる也
うち思ひいてりしもく給ふる事あるしそれのひたすらかく

はかなきこともいとおもしう情なきこゝろのやうにひとへまて
あさましきたる中君をとたにひとくの給しらて薫大将
にけしひ給ひぬとまてくちをしみつけて秘まゐらせて
中君は何のきも給へるひまつへ給つるとや
いかゝしなんのおひろかなるひらくやかん　姉君の
己くし給ひて薫の中君へうけ渡しまゐらんと姉
君情なき物かなとひとくいふらくめるやうむつ宗
とうもひくやかんとや
とうかひはかへるをも何た人のおもとてん河とも給へし
うとふく此御代てめゐるんことにくやしう　清らひまゐる
女房の御ゆるん所とも何くしさやうなる人しと思
初あもゝとゆやしなとや
かくるゝ此世中ことひことあるんの御身はみえうとうあるも

河りあさきとんま給をひきてたりとんきしてかくあへ
あるる　ヶ様りゆうかまうあるをぬ世中をとさひ様んとさふ
るむれをまうかれなぬをとへかまるくさひしららうかも
きれものくまひよゆあしかくるとさ紀めくらんいとひとくまう
庵なりそきれあしいと舟めなよまる人へしなと行もとをりしさひ
あるし給くまくとも所乃寄もゆりしさ猶り
御りあろれて河りさ人へ給くゆりひとくとちるを
ましてそくしあへたるもを紀物の清らふ婦よ妹ことを
あしゆらうくまめくらん人をりれ御へしとぞや
きさあしも舟　中君は此世一人りゆくたひもらふ
家の宮下に入る心も見出れ姫君ほこゝろあさい
ひようんゐるとてひまき給や
姉江く此あしも舟給くへゆあしへやや意にかなうん

さて又この御かたより参り給ふ三条院にやまさりし後ハ六条院
にも戻りまゐらひ給へ共は　薫の心に中宮とのん宮には
ゆづりまして帰り光れの御進めさうらん時分なさるとを
せんとて先白河院ともまくめやなさるや
ちかうて常に参り給ふ宮をも御月をもやうなるなむちかし給ふ
まうまうきらくらされ色もあしさ月しなくなもきし升に御まへ
のせんさんかうれ母はかたをおしかうきさ花のちかくをも母かまへ
のたちさし給ひをもとにえるされて庭の月もなかめる月
れかけさへ給ひさたるやうなるに　三条のあるかたの女
三条の御所焼て女三宮六条院に渡り給ふへき薫
をもひとつ月まして南殿や白河の御事をも二条院なるを
六条院母をも御方にありし薫をも同院中にまうし候
をもなりかうて常に参り給ふとそり　二条院白河

乃中将殿下なれとも六条院とハあひさえうにゐさ
たりぬ其ハちかうてやハひさしとや又薫ハ姫宮
宮の御子なれやうにそてやさし其たれハ三条宮焼て
此母女三宮をは六条院へ渡しやさし其薫ハ冷泉院
ありか給ふ折ハ二条院へ参るをちかうて常に参給ふ
めしきうらんをされハちかうて少も後けへり奉も
冷泉院なとの世給へり又其所乃宮をも御らしくし給ひ
さて宮ハ是れ御かたに参り給とは其は六条院乃うち
かくれしもく宮のしたる
おりひ待るをもこゝろく御心又御かしまいりけるを御まへさて
常に白河ひのつとこゝろおもひ待るにかとこそれとうち
御とゝかれて此御渡しなまりかて其折御かさに御心のひ
かかんて給　白河の月をと御覧せんと薫乃思ひ給ふ

ことに出して打かへしまたといふにや
ちゝとの物うきもまて汲はへの露へまはぬらへよ草とも
の露かてかうらんはうるものの露く世中にの絶かうら常も
あさし露かのまくうるしれたとまとも地のはなてあはお月し
鳴くうる露何月うちる露ともまるもなしや　階の中秋
あしたにの露ふはあしきの物かやおあしるくやかて
消くえひ露へる姻ぐし
こゝろれ色よふめにかなひくるにまとふかく
姫瓜乃な乱に露あかくけや
さとおもんせんおんおとふひあるやうは是は楼へのうきもえ
まめやかにあるへしるさるとし露　内とあまうし
とさふやうれはるやとるすや思ふやうとも中瓜とも白
家うくるひはけらる姫瓜よ治えせんとや

あきられの月くはやあくにさかりまくうちくとれ草くむひ
やうかに月を霧り居てくらまそしふ本れえてもくうちあま
めし文たり　媚　こやしやあるげ也
山里の家なる有様とりて露えはころれ待とにうあしきを
宇治の事也
どくうし露るとかくしひ露を　もくし露あと云るや
移もうしうれし　薫乃宇治へ白瓜れ清出とふひ
まうしひ露也
女房むさきを法大殿を紙面をまつむせえくやえあを移かうん
白瓜お蕎なしふをくへくと満てあせくやえあはふ
らんとは志めをくもや色うさ聲まさけるにとふる人し
とむせえくへとかをまて系志めとくとや　花　大聖
為治て未勘系　花古　花ありあつて何くへるらん女房もむれ

ほうの聖人有り郡なまりと申を　女郎花おほかる野辺
に宿りせはあやなくあたの名をやたちなん
又云大野はくしと越中にありとあり家におへるは誤り
廣き野也
やどりせは宿り給
蘭亭中の女郎花の野にとまりなんしと縁をたかへるおほかる
薫藤袴かうれ縁の香とも野のあしたの神也むなよ
せて見る人をみなへしにおなしとおなし人をみるむなしと
ましきをとも也
此人の見郡事やくうしれ女郎花もあまた当はのさちくうこん
あへくやむ　むなしきたなれ人にとくしなへくやさあるへき
と云義也
三　此のうへ大野あるとの縁ともなれやなきれ
なや
なとし給ふものゝ中にて此度はりやしく白菊をと給ふ
まきをふしと也給ふましいねをうたるもの也
あるかりの歌ゆゑそく見えたる花紀給女
地の内のやなる也
此　秋の野になまめきたてる女郎花もあはれの風になひき花も一時
うつろふとなる
年ふれは人のあたの給へと　白菊のうつろ給ふと云ふ事をさ薫れ通
人の此度摂ふとうろあまたかそひはあかちるとも見給ひて
志給ましうをしえかる紀しむなきれちかけとうひとる事
やなとはあやうきなひかりしをなれ事しをに隣うも
しかましうかさとをへえうれてとおしうちくゆりるひみ
まうき給ひ摂をたくかやうかりんをたなきけるれやうか

歌に　うれしくとゆしうけへおしき元乃心にてとゆしとや
うちたえ〳〵り歌首様ともうへ也と中元とそちえりつも歌とや
たゝふやうなんとは中元を薫ふて婦元乃こひあ
てりひ歌もたゝふやうなんとや
ありあてさえくことえこひわらるむまりし物作ゆまは
婦元のこひあてりひ歌をたゝふやうなれとこそあ
とて給て又将ひわら〳〵あてお元とハゆりひそれ
まして薫乃こ歌也
ゆつり営くてゆ何まれうらえもとも給けるとえ人思ひ
くまのふすもとも志り給ゆて
て白家の招ともも婦元の招紙を給けるとも　白家り中元をとまつを
むせえうこ日にり紙を給しくれと　花乃寄まれこ薫
つあてりひ歌るとは白家ゆ歌ゆてこうろせこくやこ

めいつんとの歌とゆしもとこひゆるや
もえの歌ゟ年限はむほかるを地とてせんしてむるし
るく〳〵れたると　白家のへしやりてこひとし歌とも
いのるるうちな所と云り
彼白家おさくしくれハ中元り物志なるるんとや
たやうにおりて営こ歌　眺元たちれおやく〳〵れや
り薫のく歌や
よしこ歌人々そろも心まとるまのる事おんなりけるるとい
まおやうにの歌人を　薫の例乃れしうな所法也や
められあるに田谷してよし心めるしうれるり将とこ見
歌人仏のとまつるあてて心乃物作さる事ともあまとうより
人乃こまのるるまりてな言あや
彼苦心ともふけ　眺元中元乃る事也

心もやすからぬひまなく人さわかしくなとて見えさせ給はんかはかり
まつりあくさき文ほとへり也ゆらやうてありしまゝ人
さやうなるところに御まうでも給ふ
宇治へはもとゝしるすゑありおぼしめし給ふ也
廿六日の御むかへとておほしよりむかへとも人しまたはてころ
ほりひして　彼岸とかいふにて吉日とて思ふ也
いかにしう思ひくわてなきれ　宇治へ人やりはしめあるや也
きさらきの末なとこそうらめしけれはけてさらに思ひあるさまゝに
しうせらし宮給へんいとよろしきをせらるゝ物ほし
あるまじくなれしのうをなるやもてありけるとものかなく
あん　何ともなき人を宮は御をもやさしれあるや也
舟かろもおもひやられしもいとくるしきこゝろやとうらもあるも
くらきはいはるれにまうでとちうとききうんさまれ人の家にりいと

思ひくらしてあかほるまうてありしぬ
宇治へこなたさりすゑに宮をかうもなくはしのむらとり
浮舟をもそへとこも舟きるゝともかすれれはそれおほく
まうす薫の君の給ひあれ高くか思ひなかり給ひて宮
家まうの給ひても　其　白家御供まうてのけふも舟まさ
しめ給くたちれ給し　給ふは中やうもうとうるし給ひく
しとそまてもしうくしはらくれハ様なるさに薫なる
給ふりあるとやうしなまり給也
見ところあるまる人さくもあはけまて　宮は人の稀なる也
匂宮人ともまゐりにいそくわらかとあまるときこしや
なるへし　見ところある人もなけれと宮は人々と
ときまいりにいそくあるくに家の思ひれあしまひしさし
とて家とハ家にて所の家りありてあまうて薫まいり

語也

ましハ中納言とのゆかりまいらせて走いかゞしあつり
花やかなるは継宮腹とかきたるむしやとみえしと薫れぬさ
つま語つる紙ありかひやうろよりあらく祢也
君のつまさよしつりし見せぬ語へと　姫君のつまや
一人なとも君たち中の女房なとみえとあまさはしねと云也
はかなきことになかりしとさきてしかる也　中君すと
母のかくしとよぶたるかとハのためと姫君ハ三の語也
えりやまゝれなるんとよひしまれ絹みてよ
見ゆるくたり
姫君なるゆゑをも中比君をもとくこゝにてありしをはかりと
ちゃなるひたかうゐのみちとはかりしやうにあり見君
とふもなひ中君の語ハ也ともそ語し語　中君に

又薫姫君之むかとも語へしはかりとも物かたりかあるは
あらしやと思ひなかしおかれんたゝ人をはかなきし後ハあ
ねみるもあ有しやうになりけりしとや　作物かたりし
のち中君一段つゝの姫君とうしとる語也
なるやう色とかくて絶とこれを字てもうひとへのなるへさる
ひるとくへいとも他のにかかる見へとは馬すてゝふさま
こまゝにかりしまゝを語く　姫君と薫と中比す
なりんはうさとを作語は又の事けりひとへのよ
はかなきゆかしあるはいかりのなへさ事也女房なハ思ひ
無なるや
頭めしやそれからはしめてたゝひとことなにかさまへさ事
ありんふりも　姉君は一云々ふるあ語との語つや
物まことの中納言殿かうまてしにてはかゝりぬれと云々や

こゝろよわくハみえしとおもひつゝしてあかしてをはし
ちかきほとハみちもひさしく給ひてんやすくともかよひ給
てしハかく仰もおほしけれはこそきこえまいらせ給ひぬさ
れんと申させ給ハ　姉君のおもひしらぬ心さまをとみ給ひ
おもハるゝまれとはかなき説を色々すくハやむかしのをれ
ものかほとめしてハいかやれやうにたひゝのまて行へと
薫はの給ひつゝ色ゝおほしけるに心ほそくハらのひとつ車
てあらんハ姉君も中君もおもしろくてあはれなるを
中君に御ものかたりひとく見てきこえんと申給へは
ハかなきおもひさへあるとや思ふらむ姉君のにも一言申へき
ともおほしとおほしけての給ひし也
宮もはなれひうつりかほしうまうしけて色おほしめて
姉君も心さまよは中君ハあひうつりかはらぬまゝに

色になりしや姫君れ心ちもわろき物たちのをかしきに物や
彼の御くさもなかはおしはかりまいらせられけるとそいと心くるし
斯ほとハおもハしき給へり　中君へ入給ひさみたれて有
さむさのけにゆかしとうちあけて姫君薫にあられける也
一夜のことさすへ心ひとつ侍へとかくうちのみたるゝハおもひあかれ
をいさゝかあさまさま給へ　薫の姫君はつかしくおほしめし
とそのこゝろもとゝまりけり
いとはやなる心地して給へとかくいひなほさむとせむとやし
ひそかにこそ給へ　たゝちとはかなかりけれ
ゝ給也
今ハらけらひかんそすくなかるへき
薫中君ふれはかなとしくはかなくうちはらん色さ
もくれてとりもしらへきかやうの姫君の相見也

なにくれとなくなめけなるいかんすもわしきも人〳〵よくかへして
てあそひなとしたしと思ひてかたらひもおほくてまいりつゝ
かりも斜なるであるすなくもはしまし人〳〵よりくへも
てらしあそひにつきてもおきにわけはとにひさかしきと
もしてまいりしたるやうかりけるや
にしたのよりて池ともしてくこゝろへあるてかたらへ
うちまさはいとうらてもあるまさかの御行よりかゝれつゝ
せとくみしうもありけれと　にしけれはさ本なと
まいとや　紀にもしのちかとさして心さしてかなを
なせてこゝのとの御事や
あしへみのくるしさんかと思ひて　薫と西のいふ
てかさきんと姫君のおほせ也
あとへかなひまいらまいらしきにゝもめて心さとい

あひつゝもさへるといふ義也　姉君ハ先すてて申す
と云也　紀中君とよ我人なにいひなりのそゝ也
かくさとし人〳〵にとつかしくひとよりのとくとくしより扇と
おもしわへし扇もちてみちかなかゝか御　ひともの思
薫の御はひしとらち也
されくも孤てあるちかれたる人ゆりしゝを思ひしに
いり御はかりともひかる君のたり御ひて　前ニ薫の
ゆめひ御のしてと弁ちかやうふしそなとさるへきうろんと
ゆりしきもおもひしめしめるや
ちらしへいれてんと思ひしたるを　紀姫君ハ様すたん
つるを八字御ちて薫と夜の事もなかりまり中君の
まへおしへいまんとさる也
ゆりうとつとすいうと思ひそて　姫君の御もと薫

つゆしくも新給ぬといひしもおほし給也
うちくれむもたしけるる恨みまんとはこさ上布
なれはさらにくれなゐのにくまんも
恨みはもとをの給んハわれまたり沢あけまハ姫君よ
給り給也
宮れたてらひ給へれハえ中のしらすひてこゝにわかりつゝと
とせてしおもまさま給ぬ事　いやとしもたへひし
さて恨度給しとも
此ちりまゐめるへやかしてくれぬらん
給給也　萱乃翔也
女房ゑま
中ゑ人かりへまくへ母もあり給ぬ事まかれとの給ふ
中将の文かやうにせさせ給姫君は難面けるに出け
天下人まくへ母も姫めへこしとの給ふ也
ともこしたひよしぬことのめもおやりむつきたてう給う
てかうよ給けりめてうれるかり給給んのかしもたして
物ことたひまむまへぬとおやめもたしぬと云ひこし
思ひとけるれるまと云むやともこしかゝれ文一ゝさん
たのしぬともや
いふかひるまむもゆされさともかへしなうに弟る伊ゝたりに
おほしおもはれにしてこそいかんかされるとたひ行へう
むゆさとるの心ともとけて物語りし給への様さんと
おもふつり給まこ物とと接ち給ふ也
今ハいふかひなしとりのまそをしくゆかしきせてともはま
のとおもてもはことも心のしせ給へ　萱乃翔也
やんことちかれくらにおほしかれめうをともくてるとりふめう
物ちしく給よう給ちぬ物かり給めれと　白河人姫君

のゆかりの紙とりつかハゆかりなりけるや　かた人ハ
文とともにかはしへうれしともや薫としての紙の返し
彼御心さしありさまに給ふらんと　姫君ハ白君へとかゝ
しられも文の御心さしハ中君へとさひ給ふとや
いとをしうもひ給ひつるにられをめす男のいとをしく思ふ
色給ふれなるとのらるせんはかけしようられこれ給ふしれ
ろこめてをうむもいとはりあるもまうしに物さくうとし
うら安ゆるさんへとゆるし　白君の御もてなすと薫のうり
さるへとなさなるひ給ひつる人の御心のもまうさにいうむ尽ぬ
たかりてあらもさんとはかけしあんやとてさうしをと
心きさやなりけ思ふなくしさるまてはなんろうれく思ひつき
なけまてと　白君の御心ももうやうに思ひつれとんお
かりしめさしやとや

あしつんとそひさ川めてこゝの紙かきとくせとくかりしを
めてはめるもかしとぬるかゝくらふもくとひかすとしまれ
昇花のあるも薫をゐゑうりてのうまんと姫君の
御ゆるとや
さらぬなとくれをきうやしてうれ思ひしてあんこんはいつり
もてなし給そをゆめのやうにはうまうきに給世のうき
思ひまいらひつ給人へとあらてもひて物語なさにてゆるに
ゆくされとさらぬ海つのみはたゝ月ね前にある　けやうてや
行とめささてはくるふてたうものゝのみとひとかてさくあらめへ
あれ　御とり海しらく人の昔語あもうさことかてと
かんとりむ紙つりや
うらかゝしりまりかうんのはるかしとりかすくる御とらへとうらとき
ふさ給らん　かうかゝしりまりの紙とく薫れかはし

まするは姫君いつまでかくてあるべきと打ながめ給ひしを
云詞也 此君をしたひ給ふらんと云詞 姫君たちはあまりに
くるしき事をもなどかくはと云詞也 姫君とふかく給ふ
文いつになりともおもひてやと也
花のちるをみて心ぼそくおもひ給ふらんとかやうにのたまひて
給ひしもいまはふかくなげきまして ひとのおもひつくるも
えんなる事をたのしみてかひなく思ひたまふやうに
きよらにうつくしき人をまてとどめ給へ
つきせぬにあはれなるのみとなりけるもいかで給ふ
たち給ひて
らんの心也　かくて紅葉とちりまさりてものうき給へ
後の君
薫の姫君とかの君との給ふや
涙のおちてとどめがたきのみいひあはせて見るまでかなし

うすき給ふ　姫君とおもふ心ざしひまなくみゆべく所也
とやかんとうちつけにかくれなきをとひかくるなり
うせたまふと
心ざしをふかくかたまりしかば猶姫君はいとをしめれば也
えんなるとおもしろきもあはれにおぼえんさまに給へるを
入るとてみしもゆかしきまんまとおもひたる心地を
て給ふてやがて物の心あらん給へるはなくさずまた也
もとき給へぬとりて哀と思ひ　有心なる所也
むつまじきおもひ給へとなどか薫をもろもろともさえぬ
内の事とに哀なるさま也
かくるのはあらひとなく心あるくはしくぞいはん
此句とおもひやらん也かと云心也
ゆかしくと心のそらにもとまらぬ給はんしらぬ風をとて

に聞もさめて歎かれおもしに　極めぬくかゝるとさへ
たゝる御あくはしらしとや
山ふかれ沈思してわりなき御事へのなけゆく世をひとり
うきよの中にすゑもよしなき
是則の山ふかき庵にこもりてものゝけのかくし居とひらうしたれん
花　記をはなちて人の御やれく山ふかき見給へる時そ言はたのまれなり
日　更にかうたきと山ふかき御いつもあつかしきをば世になして程なきの
おもすへをとふかきかもともなきあかりてと思ひたりし洋へうける
いさゝかなく京みて語へまなくしきことたなれまし給ひけり
うちははく中語と　自良の御けしきかはりて
て出語りぬと云也
まに物あらしけれさまうり　薫姫君にあひ語りてと
もにあらとゆかしきうちへ行ひとりもしかくおもし語

ふる京をとうたはくもてわらし語京あそかしあいし
こゝさいま也
まう人やし京やへりてまことの人まひとゆかぬあきを言れ候
薫人のまう人へとして語る京をまもひさうありそうや
なともふすれ給書れ道にまうひつへきま也
花　時られの給ふ挿我へきとひぬるとまひのゆかぬまたく　絵道
くく語字なめしきせりなくうんやとの語へそ
なくくにくゝもとらしと思やまし人やうとたらしあみらぬまゝよるく
姫君人やうあるゝめ給にまゝよろしめを我心へくたるもには
まよひ語るく中君れ思ひなとも京歌なとも云ひやう語
へなもくくおとは中君と姫君の心也京心まてへと
もこひ中直とも　花吉人やれ給京くたくにの京れ心
とも

空はのこりの給ふを　どうかすら侍つてと云は薫の心也
いとかぬこゝ地もこれは心のこちのあはれなりて給ふれたいと
よろしきまつて聞ゆるとよ給りまうしたへ　給ふるの細也
陽子なとそて御車也はよくいんとてしのこちよりの給ふ
はのくやゆゆくあとにかんのてまりや出給也　白文
力出給将也
いとやりてこれ有るまゝひまし給へる白ひゐるとえんたな侍
涛白事まうあけんひたてゝと
云ともえんたするけんしけさうや云も白文の将也
志め給き　有るまゝひまし給へとく
志めり給へるも　志行まつと給へるや云るや
給ひ人ともいひておやしう心にかくと云ひまとこれ有連
也　宴の女房衣白文の思て出給ふをおやしう云ひ設や
けりとも有しさ極まするけんあくんや人まとあくさめたと給
けりとも薫あしけさめは志給ふしやと云ひ給くさ
先有るや
くるさきいとちまけうあは心やとくとえゆま
かよたけんとのよいてとく侍しさと
さ秋かれて人さけんの事あしあ之八後さまたは八ゐもとこへ
おやとやゐきてんとこひるや給るあふしまて人さもりしう
らね何し面の枝をあらしつさぬらしに御車にもちてあり
給ふともなる女車也さまりしてく給へりう給り
おなく　　めうあふ　わすの
あ事の秋の枝をよまて給てたとやへてそんかしくらゝよ
みかうとひ給ひのくたろうなしぬ文つへのけむさしてちん
こひ給へるまと　白文と薫の同車して思ひ給く
　あのりて思ひあわれさとつしひ給也
中給　白下り薫の中給也

しるへのおとこゑしきこと称するてうまへこともはかなく給ひは家六
いつしかはしや文なり給ふ山里みは出れもくに清くれなゐし
給ふれは人ひとられ行へのちかくくに世給はまへ常の紙文
あもいつし給ふはりそふらむとにしきつゝうあへ見せ
も思ひ出し給へふめもみなおもをなさり給ふは
我おりひとゝあらへんとて白氏文集まて此さたりひ思ふ
やそのりもひとをもあこととゝもへやたゝれるもとる
をとりてあそむるし見くてり白氏文集中大将は
ひ給ふされもおもひも称へて右へやとちらり
やされぬや　於大君我れもかゝるもにもあやし
志つはりもちとまさこくしはえあるしめ給ふて
やとちるもの心うるしう思ひ出し給へくもいふに待し
ことふかれと清家しなく見えまれと　われ見えつ給ふる

ことあれとしきしぬさぬとも清くやさしとあらしう給ん
給ふぬや
世のしる上ぬるやかつそのさしへのわりの心はあや
しめ文かさう姉とさひおへり清文とむかしよく見せなき
つ給ひてこおかもさはるる給ひてこもさしうあり
ぬと清けりひまむつり　婦見るやされ女房は
とゆへにある女しと世と御前もあやうりくれらう
もれとも御まいるやうあて此りしまうとも中君
とうしゆへくられ女房姫君を称へにあまへ鳴も
しんとかいふり
世の常に思ひやるとらん露深き文みの藤原ありくくゝるも
白氏文集よし後拾遺の清香也
くさかすれ行へるもこと清まさるとれしとはしのえんなる也と

ぬきされ人すてゝうきさつまをはへるやうなり
たうたはまくかんはしへはなりしうしと申はしとらし
はなすうをれはなりうて　きく人たうたに侍る文のか
よりう時もさやしやなる侍る文とかんはしと申なる人
に柴有くうしろのさう侍る文とかるもあそうしことゝや
られ侍りし人みて宮さんといてとはしまりしされしともみやう
りあり人ちやうと心しうせめてうをなりはる
姫君よりもこさうしはしに侍るやを申はしまりされ
ちは侍り人あしやうとなりしへて中にみようをはや
ちとんとうはそ有りうたさねる　被りゝ出物や女の
装束也　表ハ蘇芳　裏ハ萌黄
え人うさねりうち色しておはす　又こうとなりめわかうし秘云や
かはりあり　又中宮をあるや

侍りけるひゝうしをたにひされハうくまきてとをかへ人にまさん
さうしを侍ふとなくしなけはりひめもわくゝとまいなれ侍
ぬうへにしまも　侍くとに人くとゝもなれ人まとしるを
侍るや　花薄とてことゝものや
ちとたうたにんりや文ましさしやは侍りされハ人のさう
しうしまむ人のまきさあかりけをと抑してさんまくし
めしなる　ことはゝふ人をえるさしやをひ侍りつり
引出物てきされあるくしよ人の女ハ人にものたまさやにむ
りあそ侍りやまるや
そう紙を被きる人さまひ侍りんと冷泉院りうゝまうをゆ
ら姫君まてる御たましとこてとまうと侍る　葵と次の紋も
まそひ侍ひしや
まいのまたに申まてをき御しまたに出仕まてたんとあくき

むはを
よし河のよるはいやもときまいりをしにわかひたまひ
中将きみ 蕙を 振袖
いくらせん 作者のはな也
ほいなくなりしをとてみちのかやいやもひようりとなく
又かくまいりまいれるそくにちかいてせんとをひようう
このはまのうけるをとてよせたるや
なたつしひるをとうちあかぬもとうれさなれと みこれ
かはるよし仙合ぬもとうれなきめてあるとゑるや
さればかたにおりしうたあしてようちてるとたろうなり
なかにをとりてくさくわりしまうしたるあるをとうまてしさけさか
かくそくけてわやしさくなてしはさきれめもあしぬなまそて
ほくろかれなきりけるにお米くはなれ袖のいとりてぬるき
し かへし 中将のなりや

なかへとうちさかぬ行て わか君れるや
世中にえしもをとほとゆれぬはなをられのなりめたにとた
けこともちのこあんむらうしうこひせむかたにいくくともよる
ものかはまれるとむかしさまてみひとしをかれはやく
あるむかしにそまりしもせつとかりとをあしんを
ろくしうともわしぬこなひとりとたてく
いへく これ女房のなりや
めそしのこややの見まゝんとおひたるやしもえうしりとたくと
うち思ひもあつもそうしさこてことにそられやまてうと
かくにおひかけゆしかりしに 宮の女房のもとにて
いへしうりかり 老人の見まゝんとめてはなれはたに
わかやされせつきたるもとまやとおひあるやうにかくりと
やそてみさうちおりしきみされのあしんとはありひけ

給ひしとや
こまや御ふくのいみのそれに給まゐり御ともなんいとゞ
おぼさるれ　宿世かなや
もとより御はうふくさまかんにまゐらせしさ渡ともかなしさ
もとより中宮のうされ給とも思ひまゐらせておもひなさ
こ給ひんとる時に我こそ給ひしやうともかさんとや
みくしおろし御はうかなしそはじめ給ひ給ひてあはれしと
なれてたけくらひつゝ中のしほりつゝいつ人すし給ひともとさすかに
かゝる御はうしの給ひいとたゞし給めぐりはしかれともわかり
とゞめてしと　むかしされおもひわらくそ悪さ給
とがハ罪とそ給ちんとや　これおもひ気ど仰給ちく
罪ふかくこそとや
人すゝ人すみ見くら給ひもなしとて見くみあはれたれなきんう

いみしき後よろこびまゐらせし給へ力なくあはれ給ひ
色もひとへたひまつくなかしもてかへしるとし　いかやうれ
見くるしさなともしてきこく人にこく人かなすらんはゞそ
婦君もあはれ給ちんとおもひ給はさ給ひけるとや
給　白妙のあさ人あれハゆくもむいかやおもひとや
まいてもとつしのはしめたまひ給へる思ひちかみさしも
きさ給ひにやまとをかくかんひ給ハたまん山々のきみけさ
ともひめいつれまてもおもひしゝ給かかまたかしひたのみ給へ
やま哀ともいひにとも思ひくさ給ひ　前に何心とな
たちあはれ給へりしさ渡たかすへくなしもおほすめし
しにましてよのつゝりたまひ給へるを御給へし給
ハ給出さしともさる人しとや
みひとゝもとつし清くわの姫君ともなしのつゝのつひとさち

かりゆやせうやるとみひけく人のそうくすまひともし天狗行
ゐるはこのくもりきもなのめすやけしん家よわろゝ宮
ゆれひとし其みけまうくやさゆうまゝ流けあらさなれハ人よ
とまくりのうちくてみひ給つるこて地よありハの越あわさ海のつまうらえつう
あすゆるもせの人よふもあやしうめるひたんうしとあるさされいへよ
てもひそんなれくて給へり　いひ志てつまうしつ
はうしうくやる云也もよると次の羽とあやすそは
れ先背うくなをといひくく人のたゝもとまのひともとく
ちうる天紙行つるく其物のちうしさもおそろしさ
うも太まりあ道は姫君たちに家よわりしけくへ
其家けもし山すゆよ文けもとまのひすて物ちうちともおおち
あとも志給ふとならや　行　家にありやりれ番まく人も
人のふひくあるたし其とや

けるけは君そうちうくしもかとわれらされ白ひハさけるも
行つり　婦君よをしは君上臈しくへうとお気にま
さるし給ふや
三月ありあさ給よはまちるなん気るやく人く宮の思は
こうとしも也
あともけしふさる人よふゆくとひのことにそそるやおりしてお
まへうそてさもとも給ぬも　婦君のけ前あてさ給ふ
番くやや
うまとくしう　わ下まともちうきや
人けを婦とふにたりて　秋のさゆまに枝のるのま
ゝものひ給也
さとさての給ふこも人乃見るらん車まちうしまそおりて
ふちおりえてかうとなさ海りとわうしきあり

三日の夜餅のことさせ給ふとや
こゝにはやのうちにもさうなき文わかしくたのたの夜よ時く
しう思ひおりし給ふ　上かたよこれをまうしもそれも中
光とは思ふ文惟光とはこのことなるといふ事なり
中納言と度もうらん事ならんとて給へしうと文侍るのち
うたてもおほしめしけ不承せうりなきに給へ惟光きん
八文むかしのことを宮仕申せしうるもそれをしると
なく惟光ハ心はかりまし申さてと惟光也
こよひさきやうとまやとこひ給ふてと　雑役なるや
事ありて御こうとも申たまひれとも一日文の御使
て高麗申たる石のあまるをしるし女あやうしこうら
こゝちやもとうてやもとうひ事あれと也高麗一石とも
惟光のはしたなくましくて祝をあらしたる也

とのゐ所のつしみあるまゝに御前へまうし紀伊守にもとから
ふみやもとられ給ふをみられくにかやうにといひつかうまつる給ふ
て　ちらしりさみくおもなくてそくろくもみよ事の
あれなるこのやうに書たる事也　祝文のよひとしく
まうたる紙也
まうちられむともこのやうにぬひなともにせさせおりけるを
くさしもおもふなるとして　三日夜の御衣裳なると
のまや
みそぢりあまうちをこにいまそおはい人のもとやみへくれ
まうにらて給へり　内裏ひのりと云なり　御衣
桂懐子也
夜の御ゆるしのひ事なしにきこえいとおほくはもとえ
とりありめ給ハ何か給ふやあしんたるなるよめあやな

とあるを思はいれかくしつゝ待まつかひをおほしきさゆるくるをも
いとをかしにあてなる故　女三宮の御ふはこゝにあはたるを
めしよせてはしに待ち出るあるなる也
紫の上の消息の御返し　ひとへの御そにをさめ給
女君へし
あるいの事なりけれと　此方わかなしれたてまつれたりと云也
なるも　古代　代　意至極ちかくやと云也
されは家さして説文にやはゆるゆるもかはとならをこもしを返
薫　されは家さして説ける事は何なれと婦人の名け
もあれは此かとに説をなるをかしせん心はいのくるに給う
此やと此事花鳥に中に見えのるすとあり不可説也
此いともくもとをきもあしもあらしとみはまるまかせは
ましきはよくることたんとよあり

やとおもしろき御ふはへり　中将は猶く姫君をおもし給也
こなたにもめてゆるしをなれ侍るをとをりしつゝ見給
二宮御かへりをもいつくと思ひんとおほしなる物なと
女宮はうつきて度々ををそれとするや　二宮の紀乃
は袋来たしとまて薫しるきとくらんれてあるをとゆるし
きるされけるやうにと云り
中宮はいひろくへちあきらくれなけてあやしきしとへと
むくつく花侍るつる給ふ　弄花にあり　紀　紀伊とをそて
なし給を諱道しあるの称也
隔たるれむかしのいる子をもなにも思しこゝに思
姫君をも薫り隔たるくかのふもと紀たるやうにいはれ
しや也
むかしたくしをも思ゐられけるのみ給はは　白氏の

云有れ給へるうらしとらはらてしらをとこうる乃給よ
とはなりやと云心也
ひとつにとしきを此物ほしあるまじや給ふ人々をくく
哀りおもひなされ給ふ事ハこれ給ふちに真乃給ふてえ
まうて給ふしあかなる此人々ノ様をなむ心もちりてほど
しなけれなくあるに　なからしさやはらくもち給ふ事也
随なれの方に給ひしらむともやけしあるまじや心
りとひ給ふのともさつまし讃給ふと云ふも給ふ乃給人
ハなく哀りおもひなされ給とハ董の心也比方にれなる
人のこしるに昇花よ心とはけ給ふへり　比なんとるも
乃あし給ふてなれと董ハよしやと乃給也
中将給ふくひとりさおもりしまして世中に　ゆ右乃
中将也むらうのはしまうしあるとハ夕霧れ云の気色

今ハまんとせられたる道ともおはしけるもいはまなむ
まうりさとくほのめしうさあり
もいなるはれぬと　給ふ方なるや
やうく中文御袖衣はいとあしなとも申ふるとも物これま
しうなくあるむすはるひ給ふそうへもうろあさまにおや
しの給ふて　昇也りありの中将のは洞也何るをとも
こゝまし見なてあるはむすつくひ給ふや、給ふこのあさ
をはおもひいの給ふそてうくいひ給ふ幽玄や御方の何事
もなきてくこのむハしるをなるや若りうまふ哉也
里もなんうちにおもしまうもてとのさめやすし行人ていとるう
やおはしてはとの御法りのて給ふ　二条院乃相を
しまうすると云ふや白衣れたくらしのは所也
御文うちて方給ふつる方さとしいてくうち心なめておもりま

すた中納言定家卿の歌なりこのうたをとおほせられし時は
よりもすぐれてよみたる人なしとくらくらふかなるめでたき
と思ひ給へれてうらんとおもひけるにおほしたり
宇治入道殿つかはされけるや
よくしらしめ給ふまじきんとおほしてりくらくらまくり
給へるとおもひけんつかはされ給ひぬるまでに給はん
やまゐりぬることなかやおほしめしさる給はん
白河の院の御歌おほしめしさるなたれぞとさくりつんとて
ゑくれ事薫中さうしや
たいらんけのうたくら為家の中に人しるもとかく
しき家はなんのうらしにあいたるらんぬやゆらんとか
つきまひひゐつかて中給へて　年まいらん
女房の方へあるへき事

けふ宵あくるとそおほしめしの給や　白河院の御事也
おほく人々のよみたもとなるべくしくたにもめおもしろき
まれなることなたにまてをたくはうつらん京まかれ給ひて中
くなる御ワざあつかれとてまことにいとくらう人おほし
しかりと　源かれやむらとかなとひとも給ふや
てとおほしかんまかり給ひくおほかれはさこれまで八おもと
あれらひのつとみはかうを思はさめてある候もいつつ
りかし御あんをし　こうひたる事もに京の
とてもけふ事かれおほしめしても京へと思ひたる
てとおほしるすなくしそあしめとや
ひさしや一度はふみたてあつる人なるや　御なかまた
とうくるおもしとらへうちかれそや
こゝろの事は馬ひかく給へるいひしかのはすしやさうらへとぞ

うんと宮へ行へしたくるまたられてよもまたくあれ給ふ
是はおほしまいらせてはむかしてありて給ふ
山城の木幡の里に馬はあれとかちよりそくる君を思へは
業平の歌と見たる也是はおるみて出るを行へとや給ん也
於 おなしかちよりまいりてとは馬にてはあるへしといふ
詞也はるまてもおもへとも也ことさら馬の様にも也歌也
いとうれしくしさはれんともやうまいらんとも也は車なとにて
ゆきくおもはしてはるかなるとも思ひまいらんやとれ給也
いとし給の宮やさりにおほしんとはるかなるにてはなくて
久あくしきやうにやとも
はとまたいは中々くはるまへしはうしろへそとそて
業平の返歌也
此君くちにさふらひ給中将のはなさりまいり給へる所

宮に出給ぬ也　　中将のはけ詞也
おさまりつついとらしはせらきは御たちにくみまいらせまいらせん
うへさらもかしあはいさかの宮とぬらいいひかれとおほし
のもそこうさとおもかれとの給をはりまいらせたちられやくお
とたちひとへのひ行へとたちまへいへくわりくゆかしきを
たちひおんまいらせ給ふる　　ゆくへの中将の給ふる也
女一ふたりもろともにおもひまいらせ給への所にもまいらせんれ給ふあらは
つまかくともおもひいたまいらせたいと申たまいらせんとはるまた
おほせもとへあるへの事はまいらせんとも申へから
はおもひのさもたにもとらしてありたらてまいられ
ともありれるまいらせしわりんのやうにおもくしまいられ
あるひやとまたにわへのあ所　　ひつとたる所とにおり
しやも此とされ給へる女の中まてくるとつめれあさる

もなきことひとことなるものとなりけるとや
うまてにかくとしもまてそめるわするらくはえこし老をひたく
ねられと思ひわびけり　かくそのみちもおさめなくなる
心もうれひとたるものこゝろひわたりてうられ老め
年をへあはれのわかりいでぬ心地しとや
さてかくふみもあれ女房のかきにさきたかきりとなくこゝろひ
たるなくめやもとらくまいかしさ文あるにありてすりもく
まとくめとまた給われとらふくみて尾をあへし入れ給ふまくい
ときもくりまてあり給へり　さかく給へられ
めんけ中納言のおほせられるとや
あとなふみ尺と申しまへもまゝ　弁花よあり
初降のさとかくはしきたにて右川めけくるわさらもなれと
うちへて参り給ふらりまて右川めされ　中納言のせい

しけるやうし人の家風ともいはゆるもあれし中納言
のはまれ人くもいかく給ふへきこそや
心くなる世中あかりられいものしをたもとたるたき
つらく侍りてみなるもわかれ候らくいかしきも哀よ
もけるか郡と　よろ人の心くまかりられたるともいほ
らしうれしき事のまゝは
あらくもみてもたえ声すれも有様ともひありなけれ
世上の御所女ともれんくかれ有様と見給はまつけ
有るも文居りまたまつせ候給はぬをとたんのころ
のありしとや
うしこにて中納言とれてもくしきたいひるし給へりは
敵と伝ふくれまて申さしさて件文のおろんとさまで
よくもひつてまでてまかりたまはあかりちるりまるそては

らうしき風のおとにひゞきゝしもなつかしうきこえ侍り
てかのひたちの宮にもやがてあまたにほひきこえさせん
くしこ　宇治の姫君のことなりとも しるしてたいひなし
給へりつるをとへ匂宮の御けしきをとかくいさめ給ひ
なし給へりしを御まへにておもはしからぬさまなりし
なりや
心うしとも思ひきこえ給はむとも又ゐなかびたる給ふ事
まさへし　心うしと　中君の事也
心うしとおもひしをかへりみてもそのひさしはくれひ給へ
御さまをましてなくひおほしらるゝやとおぼす也
さらぬとて見えて　匂宮なる也　中君なるを
きこゆる人を思はぬ御けしきのかたにおもひたまふにうへ
わりなきことかなしくおぼしやられてきこゆるを

つまじかはさられなく　夕ぐれ
うき世にはとゞまりなれとぞきこえん　佐也字やあやし
山里のさびしきたよりにはいはでおもかげにうちそへつく
あはれさはありきし御事を　これ女房ことばなる也
身のあたりさきなくへいとなかなか給ひてくるしきに
くしまいらやうなる御けしきせときこえつ姫君のこころ
とはやかうとおもひしてさまに給はぬとそやかましくらむ
そこまでやかへりもとれなるさまとまに　大君なるらん
いとゞ給てはかなくすて宮へまた宮ありかくおもひたり
給ひと悦也
あさやかけぬ花の色くちかりしつきぬと　一線
衣のはなやかにうつろひまさるも又梅山吹とぞある衣
其色也

ちかひつる事はさる事にてひとへにあるをとこをとの
はとゆるされぬ事もなきなと見えて侍し　終る也
絶ぬるなりと思ひて此人八か年あり
作者の心にもやうく思ふもあはれかりしうらみを云なり尺
やもくまみちそゆくへともつまにをしへんとも秋をし
とや八思つらうしろは八方にもなうかに　うしろの見るは
くれはさとへ家に帰りてねとさるゝや其人のもとへくれ
事也
もさいふ心はゝ女のもとをはなれたらうあるかはなれさるとよ
めしてからまうたるとわかれたくはまさにわかるとおもへり御徴
めはゆくとそ　其たる女は前の髪もたれたらに髪を
もさうけなくてとやられ祢也　又仲文集中宮内
侍のおもとを宣旨なりとおきたにありけるあまうにかまへ

てゆくとおもはる心をもしらでと云也親思
ひやりつゝうらみぬらんとおもひてよりくとたにたえて
むえんきとうちにとしそこを之く
かもとれとみとしてもなれけ　世のためなる翔也
ちくろすしまやあれんとゝ終めさうて見へかつして第
終つ　我心のそうともなしと也
ちうもをみん人まつ人とんるすいはつくかさりそくうい
ま一首を二とうわれむはまらん人はあるともりもそれたをみ
毎に此ありき雨とゝをはてりされはそやたかまくあれ
たるはゆしみくるも世中とおひつきを終
うつらをみん人　意とおもそくの終すや
宮八　きみならて白雲のはつるまや
ありめさうつるけに雨のふるを人のいかにしてくらさんとに

沙弥の歌ゝききてもろ人興しおもしろかりけるをうつすとた
はしめくらむや
作者をも問まほしきことにいはゝいとよしやさかりて
おほしめよ大宰の帥と侍しをかゝるをかへしと帥と
て　中義より　女房説より
ことひとりしてさしおかんとおもはれたるにもとおほしをかゆへよ
てもゆるかなしよりてもあるまじきかと思ひ
はしやかのみしかるひくこゝひさるれ給ひんの心くらしさた
めとももてくはんはゝゆりかえしこえまさひあはりしめ
るゝはさみくちこそわたしまかんとつゝ帥を思へ
て　京へいりてきこえんとや
あまし波おのへて物はさらんなどとにおもしろきのかと
わえるゝのやうたしとかれ給　白の給ふこれへ命く

ゆくところはりやさしなとおもしろしとおもふれと中義
のうひ給へるや
わか清府横なるき波くおもはけりしかとそこらん府ある
中義のいふや　うきよふうちのいふや
ゆゆくはとうちにはなにとやしおもしろくこそおもひゐたに
さたひおもくなん給へてさりかゝるも所にさ下かられ哀た
はくそひくまへハの末つひきゝのえのまとたにかゝるあはれ
もくは波めかれもとも府もゝさるの波の部と
世中を何にたとへん朝ぼらけ漕ゆく舟の跡の白波
ゆゑのかへの雲よりまさるよ心あるをともきこえあり
さたる沙弥にてかくしもおほしめしける　月花の哀
よろしも思わハ哀なる心や
山のはにかゝるもやらくみゆるに　ゆゑむかしもあはれ

ふくをたゝし

女君の御やうにもおなしくはらからたまはい

清さしへきこえ給ふ宮をもかたきこえしも八ちらちかりけれ

明石中宮の一品の宮れとのたまひてをかしう

そひきしれハかくたまふれハいとうしろめたうおほえてやう

なる句ひるとこちをまて見たまへしゆかしくなき心

地をと

明石此一品の宮ハ家なさ給ひのたまひて

けるしくれに通ハなしとまをさせたるやと云也

れの君なとひたけかしうかも　此かうかしきれ也

宇治橋のはとぬかりて見よりきさおくるとまうさとられゆ

をはいとくわしうきこえむとく給ふとくおもかり

てやしろ給へんるところなまこくといへるをにとも

うしとのたまふ　花香けらうしきあり

帝王系図曰孝徳天皇二年道登法師造宇治橋

と云々道昭和尚同人也

ちゝやなる宇治の橋をなかれとも此家とは云ひ一年たちて流れ

橋とこれ此さかりきこえさすとなくなむなれのかうなきをうかへてこの

よのことなるをもきうの御さのおもひ給へるとはいひよりけれはこの

ちかうはひなきしはくなれめあれなたりし中納言へやうなれ

をこえよるをのてと御いほも給　中納言の心ひなうしてはへる也

うちとらちやまさまをたまへつゝ中なるひなけるく中納言の御そ

はましはかくなほとのたまふ也

此道はやうかさるとおもくいくつしきとあるさしなむなくてとも

おくれてかつしかもかりしり　かれとて薫はてとも

思ふこともおほくやはた君の御けしきをひをなるとや

頭

薫ハ姉君とも御心をよむ也

よそにさへひ出もし〳〵ましてこれらに頼みは一ふくろをとか
きゝそ頼みかけ色を手に津まうし御ほし〳〵をむさしう
せめし頼みんをむほそかうんとさへひ事を母をまもれ母う
うるそせとさひし申頼み人ゝくつゝきはくらをあまつ
常夜あ世は京にゆうしまさんほとそうし母あらく御称号と
いとむあそくしきを母あくむうらほうあらん契られしと思れ
〳〵のはか　よはまさひし咄ゝて世よまちして打ちとさ頼う
みく一夢まうきそ頼みうちいろちるかと津まもしくましう
ときくへしうきそし頼みうたほそうんとさへよも
詞 よ越く〳〵あて白菊をむくさへのしめはちくひたうとも
中絶ん物あく本くに橋姫のうくし〳〵袖や衣くにぬうさん
白菊と我と絶あうましこさ我身我のさうりにとうさし
ともわくも中将かさしく袖を衣も母やぬし頼

さんと橋姫ようあくくよあう　さむしろまころを
かくしおもうひまや翁をとまつらん宇治のうし姫
花吉 立しきく身我ら橋の中絶く人をよみ人年くつまけり
いそうあ母にたらうつきくやまいしひ頼み
絶せしれやう物まや宇治橋の色ありけお中を絶ま心に色き
中将さましやし此人のあとを見そうりと我物まうてきうう姫
中をとまう〳〵やせんもしんとも
さうあはいそねて　中将の詞まはいそねとあけうし
きを衣にとも
物あけうしお浮舟うひくまう夜まう御ほうさ迄えうりうき
人の浮身まあへく　光ようと白菊の弟をとるまよう
うきて中将の心をとさ〳〵れなうめてそう
衣く〳〵ひをくあけたるはうきをれをくうるとかとくつまてお

いつくしき御ゆへにこそ人めあつめてかく成たるはさ
まてる絵はむかしの事をかきたる物のあやめもみゆるほとなく人
人のうゐてゐみたまふなり

以前白氏文集八絵あつめてよ
よろこひ見しはかなし事さけ物のさけのよく見分るゝと也
中納言殿の御絵ともにて人をよみはへらんさそらんと思ひ給へり
かゝる心あはれと一ことはいやしき事ハいとゝ心にまとめて
ましけれ　西御方の絵のおもしろくかきたるはまことにおもしろし

あや一きハあるとも也

あゝそこもむかしのことは物語にしるしそめたり
ちともかきあつめし中にもすきて物語をかきよせ
世の中のをかしきいとをかしき絵なとに　中の君の心くるしきを
かつらもしと白き紙のやうさしはさみてもかくて見えしひつて絵也
え絵もやさしくもよまれさを語りて　あやしき也

許文八あるく冊目とにかゝせたまへりてかきたる世路
毎月の終也家に事也
おもかけはみちのくにや帝とひめりかゝりの源氏の君かよくしかそれ
はなかしてかきけれは見えし物語めておまさを
てかく絵合ありしたるおもしろき物を見えし物語
と　其後絵合ともおもしろき事ともかきて帝の御前にさしてなれ
かくしたるを見しとたひ物をかしきなとて
すまのうらにて中宮の御あそひの事むかしのさまに也
宮の心也　此見しと物語ひかれとてしくとも見し
やうなる心也
いとゝ此宮の思ひ給ひて絵合ありしはいかにしてかたくもそれなして
姫宮絵ともを見侍りはいとく中宮の御ひとつを給て
ん御のりむかはらしとそておもしろきとも也

ふかき谷にたる事をいふ也よくよく宇治
まで中納言の君もまちどほにおぼさるらんと也
やがてかのおやまちにいと物しうて文など宮もしおぼさるゝ
しつくまゝに物思ひしをと見る給ひけりとて物ありけりし い
過ぬる比のたびはからをもやしろのをとなりかなし九月
十月のなどのあはれは物也山の家にさとやうなく河面めき
てうれしくつくづくあはれなる雲霧まろうしきをたちめぐらし給へはいと
よく見わたされ侍るなるをかしく心のふせんと申けるのひと
りをみて右の給ふにもおもしろくて春になりにけり

薫来りの給ふ也

あるは山里の名なんと申さるゝしまうし給　大和国
かの山里をも宇治の里人なりといひなしたまり　頌　かゝる
山里は大和国也上まり河内めなどてまあ庭物河内なる

の山里ははるちの里人なり云なり給也此物語の作
やうかくのことおなじ也
物河内なるは山里のあらん侍人さへ風神なりなとを
いとうつしとおほし宮まつりをみやさなすも侍人は過にし
ひとれは車みくまのはこをいつはしまうにそまかりてあるあ
あらん心のうちいとをしくなりける給　秋の末つる
年ありてあるはさしさき祈也
みちのほとりもなくはとりのひとつなしてふ代わりして宮うし給
まさそうれとなきの心うらしう山ほとをたるに面ひやうにう
ちをしくて秋なうの夜ありきれともきのうちこゝめりぬ
給ひつる月ひとはのかよの物うりせんとすてうちはれ給へる
さと山のとも見てうとひとせりん女房はちくの
女ともなり

自たちはしやむとはる事もなくて侍る人つて物まうし
といひくろひるとは京りさる人をはなしにゆきちらうたる
むかしもめてたけれ人二三人ばかりてしのびてまゐりせたり
そのまみ房たちのむかしもめ光へあると京にゆきちらうとある
と題しまをてかしつきたれたり
年はあまたはりのかたしつつむかし歳なく人くるつくれ給まうり
やと云ひ捨ころ出なり　年はくいとあれつりや
あるん歳まさ女房たちともいたつきかたまうりやく白
藤なりとは云ひ捨ころ出なりや
昨夜も給りうまうし出ひ物の給りけりしらん人のさひ
給つうともろしうともありぬへうあさまうりし給へと
むかし人のむかしに物かうちのよし給をと　けりし人とん
藤の花ものはひくをう給と婦見あるまへうくも

しるさひ給也
三　まに人をうらん物のをはりの出やさ刀んかしやすや給かにあやと
かりしと云ひ末し給　むかし人の給とらに物忠に不白も
藤は人不紀と刀んありをて有くしと云ひ書き
給あり見るとありけるとし給ハいくさう
定と不よつきてハいつと云とにうしはなよいまとなりてはさ見と
まあるしうらに物思ひくさをて有し給なのうしまいまゐらう
やあるとをあ有るかうにをしもあらう給へまはいとうら
しと云給へり
藤とし給ひさしまをてうらく　まらうとざねの客人のあ給うた
うらゝ給とさもうにいつと打しまて物うしにあいめんし給
晦花をうれあくとうもあるう那かをてのとやとありかしう旧
さかのし給　藤の花也

宵ゐやと思ふそらあれハみなハずかハれぬすてをまふしき
やうく思ひとゝまる給りたれと人のはらへあそてをおもとい
見しらるひしつゝ給ふいとくちをしかりてをものおもひ
まそく行給ひさまあたにかりてかうちらきん
さてとまるも給ふとハやうく御給ふれと中君もくる
みるも心やうしうれしいとくらしく給へとうきおもり思ひ
なそくうらうさましやさ思ひ給ふも
夜と思ふ人のおもひもうちもそはしうやさ思ひぬ人にさゝるさた
こまさまかれ給ふも人も見かしさもて心あるそてやさにしう
那と思ふ人はうひかくし給ふ　薫と夜と思ふ給は
やとも心はうしとさふうれしあるへきれハあるも人も見捨と
さしはむもたりてやとちらんとも
宮のはは宵給なまとも思ひかなし給ふ人ハうたすめつきされましうて

あはしての給ふハいとわしも　　弁花ゐあり
わほしあるはさ彼くしまとゝ見ん宮のもやうなとゝ思と
中ゝ給　　匂の中君をとおもろうめやおほとらんと
はさまもしあらとく見ん給ふやうるとかくら給へ
まことよるとハもさうからとひとくもてのさひとくもなる
ほとまたくしこうらとものまりて中さんせの給ふへ人かて
もとさらせくハまてとあれ此物ゝしはらもあいとは
ようしおもくやかうんとえはしらのかうんとおほし
られなおほさるやうまもハあしきえ
雅君の思ひと薫のもてもまる給ふ也
うれしくしうさと思ひきにおもとおもふきとききにほしも
雅君のことかくへさまうひとき給ふしとも
ひのうちあるんをを　　薫のをうも

さやうにもよくこそおもひけれ給ふ　さやうにやらん意のゆゑ
はらからしをとこやうにて入つきほと切なるへしとこそ
さやうにこそありける道理と切り思へとよろしかめ給ふと也
たかひとおもひけるにくちをしうてあるなりしるあるかな心をと
なる新中納言やうかくうせんとてかゝ給へと
おもひおもひ給しやうにそやうしとおほしけるくおもひのくう
せんとや
おほかたとかくの両親りをうちつゝみ給はされて
長者たちみなとひかたにしめたくまう両親りうつる男なれは
も八年あまり流行ありしかうひとく読みなる者也
うとましやとおもひ給ひてんもさるとうたかふにもしさはやうなるに
みとりのうたにうちのほとおもひ給へるをもさひるとのやしらぬ
うちあひにけり　わか新も見給みゆうやまとしられ

みさんとよるしきほとにおもひ給はんをとりて大将殿
ありつるの給ふるやうもなしひ給へるともあるしさとや
のち新中納言かたにめしつれたまてはまかりてに女へこさ勢なう
やなけにさうちかく　帥殿の中納言のはらにおほなる道
給へるや
給ふのほとゝ心なるみてしめ給　御とは心の御もと独寝にて有
しけひとりよ給ひてある家と云なり也
思ひのあるにと心なる新中納言も有としてはほかつねらん
文をまうし給ふ（たかひさま）めるしんとも思ほさて　白ハ薫のまゝ
帰り見たりおもひ給さぬと心のほか給はは中納言也
中納言の殿は知るしかるにんのうちに御心しきしこそうらまし
みれとの給へとも女君おやしもしうこう給ふ　帰り見よくらも
とけ給ひてさこともまうけさせのとこそ白えみの給ふと

宗祇也
まことにさしてかくしましてよをはなれうくへの給ふなるを
ものゝあはれに　冷泉院へさし給ふもたまふとなるなく
おりまし　あやうくて御給ふもあるかするしくなひ
給ふかや白氏文集也
宮も物とりかくうお所しありはんのうちともつ給ふの
八宮うしにさしりかへんこへかやしとさるけとう給へ八宮に
ものはつくしまゐるしさかなるわさら所ともの京所もとう給
為てわたらせ給へこそこゝうもさもそうにあるし　おなし
あるの天下と此冷泉のあるへし
六条院かけたちの御所八とも　夕霧の事也
かくはつくしにもと給ふくさとろうもうにとお所しある六
のさん此所るらとおはしてねまあるさそらあしやとの宗祇

つかひし　六の君　夕霧の六君也　白氏文集とも給
つとめの御所しうしぬる也
もとれくるしさ冷泉院と桜のしたくもとる世の給ふてう
ちまるりとみえとうまに人のゆゑにて給へるかれて
あるあるとこの内裏たまとあてとも夕霧の中されたる帝
王ともそうしてうまに人御所しめさるとも也　御とももなき
のうへ御所とあくあやうしもへ給へんとたちうけるか
いと御かたりて　中君の御所へ給ふ文也内親王中立
ともなりまたに内裏へまいりまに人給へはふるへ御所く
たまへやかへらり
あつくにかなしく人のとそて文あはれ人のちうまてけふく
かゝるもとしさやうれたちくまはおほされも　よし
あつまつれ人あて八文あつく人御もいうしてけふくかゝる

あまたもおほくこそとこそのなさこにもあらしぬとや
宇治の宮は君子なれはなれぬとや
とし世中うつりてみれとこゝろもまれおほしとれつるまゝ
あまたもありしまうさんよりうたゝまたさ後すまそてあさあなたと
匂宮と住りつきをなりしんとおもりしめさそてるなりやまし
さもありなし中君へと后ともなさんと匂宮まれお
はし波かしあるとや
たゝとえはりと花やかにはらむようてもも給へつゝまてたまてかさん
かさたまくる所しうち宮中納言は三条の宮はらくて
てくゆる人はこの所なるそて　心のおさまくしきれは給
大君はまさしも只とたうくおほしもとやまてあらさん
かられくやまこひのいたともしうるれ仙や
まゐらしなまんとおもはゝ　薫は三条の宮はくら

ゑてく婦君をしらる人こそしらさまてやさしらなまんと
おほしさとやとや
まにたくく人をもやまとりけるもかくいそとるまゝしなく御
くらこそありしやまとりけは思ひ給ひくるまゝかこえにたえひなす
やま給ふ人かあるもとるまゝしをそて　くにとも給ふ
やまとりて思ひ給物くしたゝひりたちひるやま給ふと
ん所ゝこそ薫のこしたゝり給や匂宮と中君
の事状に給ふや
思ひ給ふうかりこひ給ふし中宮たまこるもありしまゝ
めさきそてたまかれあさたるゝはと打しくなるとも女ゝさ
の御たかなはうりもはかし　たまりあはりのひさえりま
給はんと匂宮も中君もいと捨しまさるも渡りなまよ
うらしんとしに女のくされ御たかなはとりもおもしなとや

いとく程とをしにおほしたて給ひぬるしきさまにいとし
うちそへてあはせなとやとおほしく
中宮の御かたは心かへしをもて有して人さま〳〵なる
せさせやとや
あまたちかきもかゝる人をも心のへるとなかくしう思されつ
ほかかゝんなとおほし宮の内にのみとゝまりてしつまるを
三条宮はさもとそてまかり給ひしむまうきとまいとゝせ
給へる程なれはまへさとのうちなんなるもいかと思ひなく此世に給
てさもあり給ふ　女三宮へ申給へり
さびしくなる女房なともやしく御かれとなとんの給ひ
つかさともせさせ給へり　薫の御かたへ給はくや
十月はつかころの給ひもおもしろくはとあらんとて
のかしこく給へ歌集をも御らんなんかはりて御給ふ

宇治山の歌集とは此は七月ひとつもさかしそて（おもしろく）
白河院藻保乃大井川行幸に舟を歌集まてあさ
かとおほしたり
さるしなる人々も殿上人のせつまいりかほをまうけさせい
と思ひしくやおほせとあるものはつかひおほれなとの御
かく事なともうちそて右の御かたへの宰相中将なと参り
給ひそて此中納言なともまいりまいりつかまつり給ひ
人々おほくかうしたかうり中やとうし給ひんなとも
みなおほしたに御仰せさせのまゝも花見人よ給ひ参りし
これかたへのゆかしきにそとありしをもつて御覧なりきこえてたて
なりあはれなりやうに御心ありしなりともこそありけるこそしかへり
ろなり　編する所もなく宴と白き中やとうもせ
薫のせて居る人さく度月にひ給ふ去年此春も花

ある人の歌よみたりけるをもかたはらにありける人のきゝて
てふらんと葦つきやり給ひしや
みをとくけふこそかくなるらひ思ひくれりけるを袖に
葉のうちちんもうしてふけやうとおもふはこへてうたを
よとし給　やりと句とまりてよむへし
よしある給ひしとこのさうれるとてある人さん筆ともたてま
はせし給へりうかやゆかしきをおもひけれとかくはせんこれをもさ
ある人きゝにし我こゝろと思ひまうしてきかまつりけりし給へり
葉ヨリノ書付し
かくうこともあるもまことにゆかしきをたゞさるなるものも
いふせんなもさある人をきゝうけるしてありうる絶
と給ひなくさえてきかまうけし給とや
舟そのありともうり給ひしろうあそひ給もとをさゝめ
ほのくわうさ波みゆるをそらさりたゝちゆくうきる

人々見んまる　うあかりにちわて見へるとや
さうし見侍者様へそれとも見わすると　白妙なる也
みちをふふたる舟のさるもふしさや見ゆるにうしろく
あさからうる池の葉ともも風り侍さて越えろくしさまて
あ住ものせん人の事ときうつらふなあるさ海うう恋ひ給へるに
舟をもいとまとにゆくへき代見給ふもまたにそれなるさえ
うりあくうの彦星れえそこそまちゐてめとあはし
たり　きょは七夕のやうにまれなりともうくれやすれは
人とこ我まちゐてめくや　白妙をとひし侍しまゝせ
てなり　年まてそて一夜いもにあふ彦星をもあつり
きゝりて思ふんやを
文はくしせ給ふ人をきかまうきにたるかなるとも侍かうひけ
ア・そとも我うれとえかりし侍舟さしうけをてあそひつゝ文つく

旦語　平常陸へくせあるも
おほ氣色とうちとくあそびして海仙楽といふものをふきすさ
て各心ゆきたる事しきなるに　むなしくさるたる
やと云事也
文字あるさま海のへ絶して
以外乱れはあふされ海の方へてふく人もみるあれ後く生とな
おちくる人のうしろ見以外にとのミ済むろしや叶りつきたり
語りうさして我らあれとも何へり
七夕のあまの川わたるなをやまくく人のはまもあかるらん
人のまつをひまくまし云つめて物せせんと中納言も物思
してさる人こそやうに申さし語種り　人のまさされ云つ
めて寝也
とらかみも中納言の給ひけるて　内裏よりめと云るや

明石中納言也
雲井のよるの濡つのうきもとくくきもへ云んとさ
まつくう語りうち文なさしてまいり語つりうくや云れ御
河りきは思ひ語ともなれとのつうきとなろうりて
わたりしあるもたるるさあるなと物もしさ人うなと
まるもなくて本はうかおりしまいるつ絶さこうし
おもろふ字あ度云人おまさるして来りあるに
さいわ　夕霧の子や此人の見れ給つのうきや云御
紙乃り来り語ありこと夕霧れ息媚子や
たしあたくありぬ文ともも中納言ともくるしやと物思
て物のなるとたすくありぬ　白文ともに薫とも流おりあいも
流れのうちとはさしてもとひさくれあさひ後りしつるに
かくてこそ物思もこれ文字乃大事　中文ありあしは

一 つゝく総大事也
たしぬ所よ人々とおもひてなかり給へり心あてぬしう
口おしうてかへり給たんなるうしろにも御文なきを
給 宇治へは御文気りあるや
おりしやうなる給ふとも御なくいとまめなりて物かりし笛る
るすとすとこ海くとくさつき給へ御まてと人しきうさん
かしかんやりとて御ゝかゝすし 姫君の御心をきや
数ならぬ有様にてめてたき御あたりにましらはん
かひなきわさかなと物ほし古り給ふ紀をあく
為さゝある人さ日え 宮なるを姫君乃宮を問給え
ぬるしとこそとや
物かゝり御方さとも古とうり御ゝりともるとなくしさあ給を
くまゝ文ほとにのゝくえり物りしてつまなくもさ給なん

はらからも口おしうもおもひこれ給 よそにて忍ても
さもある時節の御心ゆかしき物かはりもおもはせ給ふも
わりて御ゆるしもなくさめも何かとちくさ御ほと
ありて物ほさぬへはらから口おしうとや
文をまいらせてけふまてとあるしと物ほさるゝ限なし
宮は御心もあらぬや
網代のひをも心よせたてまつりていろいろの木の葉にかきませ
てもてあそふを 網代の氷魚をとゝへもちて気
つきく興をもよほすとや
いろくは何かる氷ひをとふことくらん何まゝりてかゝるとゝね
水原抄云庖丁謡り物奥あは君気とあとこと
なとも人あるといひつと物りしきらとにさへまはへりなてくうひ
洗く心ゆく御かゝりきにみつかし御心ちくむるもの御いと嫁

たくりてうらとのこたなくめ給り　こゝもとへとハんりこ
あるひたることなれハわし給の御心をたまえに慰めきこえ
有とや
此あう文のこと也たゞいとこゝにおりしろうとの記に来り
ちひろ給ふはこゝにも本よりもおもひつけゝ見えてと紙絵ん
さんときこえをかるゝと中納言の君も中く身のめてたくこし
あるへうきりしなやかさう那しとお仰也　ろうあうに
中やとりのくらわらんと中納言こうらんへあるのめにゆしるを
くらしまたる事也けもなけましうれりしきとや
こ我れ春也ともあまりし君たちハ花のちりと思ひおそくを
くまてちんにたちかゝ給らん心仰せさうとらふ
姫君たちのうへや
ほう出ひくゝまかうひ給と仰のこゝたるもあるへしこゝろ

さくねともおもひやりて御目の心にたちやとりやと人のゆくへハ心
山のくれなゐをたとのつりうせ給ひけるのあはれと
姫君たちの心ゆくへたりし給山のくれなゐをとくれるも有紀也
いとおりし事ふてそこの給ふあれ　是よりほか也御詞也
はかりことゝをみてあをの御心をわきこひあかくりし給ふを
まはなとくちくらん　宰相中将
いりみやもも花の盛りしめ見し事ハまきくや枕をさらしき
宰相中将　夕霧の息二男也
へやともを八文なく御給し跡のあすとこれをとくいうり
枕をさらしなとはちくにのこり給へる姫君たちさひし
く給らんとや
はるしめこゝをこひくらへて中納言
とこひらく宰相中将のこゝろけるや　薫とはるしるさ

さくらこそおもひしらすれ咲匂ふ花も紅葉もつねならぬ世を

中納言　八宮なくなり給へるをこめて無常

を花によせて人たり花にこそおもひしられとよめる也紅葉落

葉は世の常なれども理をしるも涙中也又桜は散ても

又春もさく紅葉も秋の涙をおもはれて又涙ありといふに

めでたき歌也

濱の錦

いつこよりも秋はゆきけん山里の紅葉のかけはすきうき物を

濱の錦の紅葉のかけは見すてかたきより秋はゆき

つらんともゆきさらんといふも下句は八宮のむかり

宮の大夫

見し人もなき山里の岩かきに心なかくもはへる葛かな

宮乃大夫は八宮をもまうしゆきしとも葛はむかしなつかしき也

中にわひしくうちなき給ひ宮のかくおほしあはれ　宮大夫は此中に

よみたまひとおほひ出家なとありし人なれはこそ

むかしのなくて八宮のおほすてかくなりしと見え人家

らをなけきおもひてよめる也

秋はてゝさひしさまさる木のもとを吹なすくしそ峯の松風

匂宮　秋はてゝさひしさまさるとは八宮なくなり給

へる木のもとと云也や吹なすくしそと云は心も

とめ給へるにたよりてはらからなるをと松風にと

りたる詞也

とていたうなき給へるを相の君に

つゝましけれともなりけるをまつのたよりなきをいたうなき給へる

しきや見給はるへきとおほしくらしてえなん

つゝましうもはつかしけなるけはひにさまをかくしうち

もしやさしきこそ思ひにつけてくおほゆれとやう心ちひつま
さまにまして大将くしききとはらんやうなかくさうしつれとく
めでたきに見ゆらむ程はなんとにさもそれ給ぬる事ちひ
をとこうかなる海まさて申ける　うこ　宇治の大君なるまや
かるるの思ひくたくなりをも按察し給ふ心まうけしつる人
くちもいとくちをしと思へり　随身清さ紀をとおほせ
えるすありて思ひなとひまさておほやとえやちあり
姫宮きまして程もとしにさく月華めでたなるにも有りけれ
里
人のみのうへりやも紀行しけるへるを
いてん人々ことの趣も紀指華せらし出たことおとにしも
出るうはうらひやまうて絹たりかうて出た給ふにや
もしなとやいそて人ともひ出をもやうの大将の絹や
ほのたく人のうつとまをはおとこせんの物まうてしとみて

そのころをあはれなりぬ人とも思ふ心ちにこそなきこと藁
おほかる物とは人数ならぬ女をのむかし物語りいふを
作るなとくしき中にこそ古くまうね色あるもまた語
らぬ御事もなけれとなるさまにありぬへけれは人のいふを
るは浮まりしはせうる人なき物あひしきをかしこともはへるまし
きことなりけると　世の人の物語りしをかしさけれ男
と云物はいとかくゆるゆるしき物まうてなりぬるをもたふかし
りとりなれとこそ人々もならぬ女房の営み紙
まうかとつして事もなき事にそさやうのことも思ひ
らぬもちかことなる御心ともなくさらにその人々のさゝみかる
ましきをとも思ひしけりすらもいふ事にをかし語とこれ
白河のおほむかてもて思ひまた給ふとも
わさめかて給へるやうにまたもまた清少納言入給へるやうにあら

く此猶まてハ姫君しらぬ心ありしものを　白氏のことゝ
いひおきたまへるやうに八文字をかき給ひしまゝやうやうかへり
きちりなまてさ姫君しもいらぬしとや
おやしきまてむすめきにの給ひさるとふひのおやにみなま
見につきて人わかれうさとふひそふやわちなくくとも有所
くり見ん姫とりきる所をと　白氏の所へと姫君の給
あり耕もり別よありし説可然也　師説ハ文字とや
中君をと見ん姫とはきるによりて白氏のきへしくはめらひ
給と薫のいひ給ふんとや　姫君此也
匂宮彼中納言もいつふいひ給ふんこの宮にとにかく
しきなれ人なうちまかしうねとさのくいふかんかく
色りわこの御しきてとくいひまくさ給へり心地をたつひて
中納言をもいつふくしといひ給ふんとや　花師説也

耕もの説ハ中君をと見ん姫とりしてといひさまありん
匂宮も見えまほしかるまや白氏をと見ん姫とりする所を
八つされわくし次乃詞り中納言をといつにいひ給ふんと
云と中納言をといつにいひあはりひ給ふんとや宮
おとをつしきなる人をあけまてとものくいふかん
人まく人なき給と此まは中君乃ことかく可然也
いとやまい姫はも給ふ　姫君乃ことや
乃しうは　中君乃ことや
さきちに夫しいかんし給とも文院なくもかれてとゝ其との宛
契り給へれと所りとものよたゝへ姫ほしかりしや姫君の
うれしきとゝもとおもふさるをて姫給しあと心ちち
有らひなくさめ給ふるあり　こゝと同給たね姫君のう
子のさと切りなくさる給ふてそおもひらんと中君ハ

白氏か文集をよみ侍るをかたはらいたくきこえて宮家をなす
きこゆや
ほとゝきに夢のやうにていまはれぬるをとおもひぬるに中くあらて
すゝめ給ひける代はかりかたにはかりさたしにはやうにいひあきれ物
夜なり　はゝへくともひ給ふるとこひわれぬるをと何か思
かりの文の給ひてそのかなしさに中くあきてかうるを給ぬか
とはかうと口情きと思ひ給ふとや
丑ひとつはかりしき文のかの代人なかにとくにはとてあらしてまいる
の人めをしたゝるも侍ぬ事はかなきやうにとて侍し給ふこと代
たきとあて君をいとくしう何のまたと思ひまゐり給ふ事とも世は
あらく人もうやうなかりそ見る人へさはにてそおもれ中納言
のとき侍るも給ひにむかひかゝり給ふと人の心をも見んとあり
あるも　中君の丑ひとつはかりにと姫君の事とおもひ給ふと

心ひとつにこそてらはれまいらせよとて　婦君はわかこゝろ
ひとつのなさけこそてらされぬ事なともし人のうさしきや
あしく人やおはりぬらむとこそあるを　ゑく葉をとなりけりぬく
うちとほとこ私を何事もさのことはたえかりやよまうしとや
あはれ人のこゝろほさしにう家をとちのちよ代のことにつけてと思ひ
きこえ給ふかたには伴弁すまて事をきゝぬ人のあるを
あはれ人をそこにいかれ人の中君わかすのをとこうをもつ
にしもしてせつきなるかにはたえなきやとこゝろとや
光てそなきもかくほかのもゝしてうれしさもせとの給ひとことし
世のかくはてとありやあらんの心さめなりけるを　ひるかくて
さはあし事世をとゝくせとくるしく親ゝの給ひ至
しめさかあれとくや
ほとこし給はうらむまくもあてたる人こさへをもとゝきくれたまふ

わやうれ物と人はよく人本意てとそこの所ありさまてまうれ
清くけせとは人の中まし侍れは心のしぬ事をあたらさるゝ
物なひりなけまもを　十程ま方てそうれ方とさなく
志うる人さへさうかもちそくとめ中君と思ひ
やうれ物とはいられしとも色をやうれ物とうけつ也
罪なきとうかうぬさんりいとそなく思ひまんとおほしなう
むまこう絶もまうとにくきしかれなりのも露ちうりなき
を　先坊の御方にも罪なき事ゆへまつなさきてりいへ
ことなきんせや也
たくありしんのちれなりしまいをくとの善さうてき給り物
心まてく方あ小君とたりまう給をいてしもくるしう思り
人いとうれ給くいふいみしうなくもむくさありしんわさ
ちしうおりしと人の善の見物まそいてて人へくれよう
と見えすあらんとなひありのうちそて人くし見ゆるゆくさきれ
のあのとかはなひつま　中君をの善見てくなくさ
も給しとや姫君の心也
給りなる人はゆかし給ともかそうり人まく人本意のめをみて
むし人の世中にま絶まして　白氏より心さしいりて
中君の見て中ゆるこそとうりくくく人本意めをいえん
人のとお中君のなるや此頃はさてとりもなくうらしや也
まへの人さ悪すてつ給くんもたくひをくなくむうくんかと
おほしけくるにつうひとなくこれをすまハ世にくうさいひお
なれむかとなくくとさねなるに方ともあめりせこゝろ
ゆくうおもに　中君白宮り三つま行くしきき
れさ悪すてとらし給ひくしとや
見るたちくるまへのやうに世ひとくとらてうれ給るへきう

ちかうなるほとひとへにより山里のけはひをゆかしうおほしつゝ
におはしけるを　内裏より御使を事々しう
は思ひつゝすりて宇治へわたりたまひしもおなしほと
しきりにもなりゆくにきこえ給ふことを世の人も知りぬへき
志りやとの給ふもゆかしうおほさすとなりおなしきを
の宮も此御ひとつにより白宮の御ことも宇治の山里へと
わりなき給ふの御心なり
なくてきこえありけるを世にもきこえつゝ中納言も
侍りけるにかくしつらひ給ふれは中宮もきこしめし
あはれなることいふかひなくゆかしさをなくさめて心のまゝ
なき給ふて御里へとおほしつゝきこえ給ふ　此里住
出させて侍らはいとゝさかりなる御かたちなきはかりなるを
と大二条院より御うつりのさせてきこえ給ふへき事ともを

と有りてうちにはいとゝ事々しくせられたるなり
大の御井その大君とうけひきたまはぬをおほしける
也
大君はその代白宮をきこえをひかれ給ふをおほしけるなり
とかくて今は世給ふへくもあらねはとなる　さる人
宮さへも世給ひてとかく中にきこえ通ひたりける也
中納言とれはいかにもおはしつ我身のとも思はれ給はれぬは
まなひとつかやうなる事や御ゆるしや有らんなと思はれ
ろなるなとおほしていしきをも哀をも宇治へこの大君
うちの御有様なとひとしをなる事なく世になきさま
ちんすの御しうと御いそかしき御なりにひとくしうとも
てなさるやとていたくきこえ給てもてなしけるなり
みこ　八宮の姫君也
宮とおやまくりよりちりなるせあ給ふしるへ　白宮の君

なるや

我思ふ人はてと高きにゆつる類くわりなき事をおもひたまふらく

わりなき事はたかき高きにとも姉宮を薫心かけ給ひをあはれ

是りつの事ありにせんとる中宮を薫まゆつる由をわかはし

くて薫のいるしきしてと給自らひとせしめかくとし

こさるり薫の心也

かくありてなりてしもと思へたく御中うちも有る所の卯いつと

ことなきの御なく見捨まんりうるもへまたへも有りうしとり

くもと物あるねと於とはりしうもひとりのかたるき給ふ

宮へまして御四よりしぬわりなくもひらうくろ見さ

しもとおほもと

死人に物みをうつるや世中をと有るあるかれなるかと思ふらん

御心よつきて物はるも人わらるそこに気しせてまたのさ後

まめ人とやくにたててなし給へ　御后の大宮は心也　白き

うす物の御心よこ宣旨にせおはし人おとへ家まいりける時

ありし女御更衣なるとに気しせてのこりにまてなし給へと

御后中宮は心也

をちかたにしらし宮のしらせ給へるにうるさあるやしにくのことゆへ

あつもいとさん口わしきとも大宮なとおもきくれ宮の給

まゐらすりるなし気しさせんと帝なとも御后中宮とれ

ほしめし由るにう給くしさやうに人のまさんかくち

わしきと大宮の御しる事也

たて進らるし宮のとやうあるに女一宮れはるに気しう給へ

またはわりまへりし人むはくともさかうるは志めやうに給ふなと

御らんとる徒也　女一宮　白き物の姉宮也

浮九様たるとあさて御物ちら宮をは給ふはなくおそ

はきさくれさのしるきのひかに　中ゝしくれぬる也
おもしろき文清書ひとゝしころ河内大臣物の思ひ宇治の御
こゝ文この八宮様の御事を思ふ人々にたけうすんや冷泉院の
姫宮たちをもてそへおはしましけるほとにうち八宮をとひ
心ありて宇治山とうちへそんしなと右大臣おはしまするに
給出させんやうとおほされとも
うち山里に人に語りたまはにおきて右大臣おはしますと宇治の宮
まいりそうしたまへと思ひつたへにくき事しみてなく
さめに御経たれあまたちりあるけ見給へとしたまひける
女三宮もれいひとも御ゆかりとのを思ひあまりてさまもと山里の
おかしき文家あるたまとかくおほせ有かたうれしきるそもと思
つる事御心にしみ御ためとおほし給へも
山里あるとの御女御との男君心をも聞すまひたまと

宇治十帖のこと
もとは宇治の給ふかくしこ人々なりけると思はを　小説と
中川まし給ふ宇治人は八の宮の御おほししるも
さいふうち物語あさて　さいふは業平也伊勢物語也
いまうちにきんむかし人ありける一巻乃　此かり伊勢物語に用し
大和物語ありとも何せとも三条西殿は御物あそは見へし
もとは何それたり伊勢物語をよみえて何ある也
紹る源氏と見る人及ひなともかの所詮此書也
人のむかしそれんやしのひける伊勢ひとつゝおかしきとそれんもとし
あまりとすへく
うしかくし給ふ書をかくも事とも人のむかしをうんとのとしてそ字
かめし人の人ともちる人々文様をそて書をうしそのかれ
さあるへきたゝひとさてなうしてそも給ふるれと

いとあつしや
いとうちくつろぎの心にて御さしを給ひ候と思ひしく中宮の給
ふ心かれる也りかと御ほどにいとしまむらもそて御まへには
はしいま給ふとも八月の御方へんとなる人にはへしけち
なすと申して給はりて書たるかと思ひたるをほのくに見えま
いと給たりとめてたりもとも心の人にてあるへしとこひ
こともしまいしくせをおなしにみえひかくて
もとしも物いゝてたる人　此他人おほえ此白文の
女一宮り今をと分け給也
わか君れ給へん物をはらひてとひをはしれあるいらしそとれ
白文此方へいわかに給はぬにみゆる御前にといふと
而て御君れ給へん物ともと思ひて候とくわめてもおやま
らちゃとせんとはおめて候ともも何とやらん心うしとそ

ましてもやうたいなしとも
わまへおりつるへくいきをはらしたくちなうしてかのう
しろはかられたるとまいらせとしそおまへ　人のいるこ
そ給ひまさりやれるすの紙など云詞也
うちそおやしまて御ほせし物との給をほとゆくに
白文の御也　女一宮の物と宮し給をおもひ給ふ
あやしや
ものたまふ物をとりひき取り給ひ色にまいて申てわかれ給ひ
物まれたるとめつしもとものへいさうかへ物といひたるに
此方にたいるいとう宮と申て白文の御方にとも
女一宮此まいて申て給ひて白宮への色にものまき
あへし　給ひて色御ほさる此女一宮此也
むらさきのうへのかうよりにこれ色々にいとめうしうと

ことなしく　女一宮と匂宮とハ紫上のかく生たてさ
せ給へるも
あまたの御中にもとりわきてかしつき給ひし紫上の
しつらひ給ひし所に住給ひて母君の御こともおもほし出
られ給ふ御事なるへし
源氏の御仕給ひし二条院を　匂の宮の住給ふ所
になりぬれハ住給ふ所の御方々に紫のゆかりの人もある
ハ御なし給ひし御物語なともなき事なるへし
源氏の君ハ紫の御事をなと思ひ出給ひて
よろつの心にくきなとも見給ひさためつゝことにむつまし
かりしかハ只とあはれに御心をよせ給ひ
なつかしうおほして住給ふとも思ひ出給ひて
とてもハよき御方にて有ける
なつ給ふ也　　　白の宮の人の御為に
世の中の人のいはれぬ人の心ちのおもひやりもいとをしみて有ける

かうやうの御仕給ひて住給はむと思ひて
住給ひし所に御かたの御方に中納言に　宇治の宮の
かくおほしめしたるにやと思ひたまふるも思ひ出るかな
あはれなるわさもなし給ひて住給ひし所かな
こと給ふ事をかしけれハ住給へるもよしと事にけれハ大
いかし給ふ院にてよろしかるへし御仕給ふに
住給ふにさるやうのかたも御心にかなはすおほしつゝ
かうやうの御仕人にてかうもちいてもまいられまいて
へたてなくかたらひてとかくのやうにてもいとあつかひ
と定めかたくて住らむやとかはらすなとそれハ人ゝを定
た給　　　住たまふ事もこれもかくたまふ人ゝの所に
もとの所にかく給ふ也
兄の御心もゆかしくておもしろく有様なとかくうちなとも定

給てのちに物をいらへしてかへ給ふるとも
色めき給ふ人も　白氏文集の一日の歓楽は九婦のさかり流也
をもなくあさて家をもたちしゆくなるとかやきこえ給ふ也
こまちなともかくも世のつねはさめうき　家とは中君
なとの御のやうなもなくもよからぬ也たすれ人の御
いさめをは八の宮の御事也
たすれ人の御心をさめはくれさとに見し御のまうさん
いとおしうもうとて見れ給ひもしき也
御いさめたてまつり給ふ御気色中君を見るもいとおし　たすれ人の君
こまちて姫君のたすさ給ふ也
いと心ぐるしう思ふ人々の心ちしてあの世中にとまりても
かくみなもひとつさまかくもなく後とるてあらん御あるを
いつれたるかくとも御心しづめぬ御心ちはひとへに

らかしきとおほしてともおもへとこなくおほしのかため
よくしうめくらうちすへはあらしともあんせひ給ふるとも
世間なとてもかくうきも思すゝみとゝ宮をもやゝやとを
てしるけ給はむ　世の人は不定也
人の御心々とさ人おりのうちとつれなやしう思ほゆ
我をしらずして人のうへとなん人なつかしうとりちうするは
やしきことにそある也
一 よろつのこまかにてうとくなるまゝにし給ひれたうとき人の
いけるひのちりさをも中君のくすしきあはれにおほしけれは
たすさまいのあるさりせんく宮の御出家を
うらみ人とさ薫といふ中君のそうち給ふ也
まして かくうつし給ふほとの物あはれさといふひのました
おり気のこてうしを見ちゝ給はゝいとこゝろをえたらまし

かく契りの深かりけるひとをさへくらべ給へくまつる
あると翁の思ひとりけるにや行てみれは清らにうつくしうさへ
おとゞの給ふとみえたりしとはさうしかりとうつしかはりき
わか宮の給へと
見とをもみかきなれしかと　姫君の心也　ときゝわたしけるに
おひく成たまの給ふらんとおもふにてあまりはさまさま
よともひ給へる心をしへも義也
またはひとつの事見えけるに　姫君の心給へや
しまうちたる心さしをおもひつゝなりけるやうなる人にや
ともすてゆかるゝれはさらにも義りかたの姫は
思ひく成たまても年頃の御らむ給ひつるも秋の夜の月
おもひやれとも人のこゝろ給ふ思ひをなにとおもひまいらせたと
ことなりき

又のあしたのきくしともまかる思ほさるやう
あらぬにやとまかんとおほせは日ころかれはまかるや
くるしうをんなとおもふこともひとつにはゝ給へ
うちあまうし給へるにうちあけてかくあはれ
清かにさたてもしひは思ひやるにあはれなり
さりたきをよ給へるかうちにもうなつれそ
めらかんかもにとていとくすかにかなれたるをとう
こゝちたまへむかうしてかけ給ひしさましたれは
つきとかくてありしかけまはてとこしなかたなれとも
給ひし心清らに成ぬるへ給ひくらしかちなり
かく契りもかなたのまめぬるとおもひ
ありたへやさしやまいなと
思さるゝ給ひおもへとにきて

錦木イ
冠蔵の時

みかはをとりける事ありさやうなるにつきて宮へやさ
しやうれんと御使をとられたり
かくへ文ありし時ろうしきまゐらせんかなと思ひしよくさせて所望就
なとも御返事のりはしらるへきの様ひきさせて大将殿此兄宮の
作者詠人乃　薫の御作りの時も来る人也
はしかとさゐかるワかなへとかくてひかうきたるさけ也
宇治へ御作り来ゐたる時ゆてにて被見むる女房字よ
かくてひかるきゐる也
その志て物かたりに　薫の作り人とかく女房を二人
物語也
彼宮の御思ひありさせへおくるを給て　匂宮也
さらはのちにとも御ゆりしもくたる我御頂にとの事をと
かくをなかく給へかあると女へる文　女房ねくさ海の

事也
かしこの法師へまゐれと申しさして御ふみとたまひてや
これから心にぬへかなるところやかせてかへりそれ申ち
かくりかもたへりもかへの御事しき事に御返事とりまいてみ
と后乃御かへしめに志ちまりていかくさめてけ
内裏るをかくもれくしき事をかくへあると也
かくその心や　薫のる也
作者やうく人々給ひてはまりまめにわりしまして人
みはしてすやまれ給へるにかくへるを給のところんめと
はやりあかろきわかる事をへ人かへるをかへりてある紙
さうそのひつきちと人への中にて入ゐるとき給り
いとくむかへかりて　かともおやに　弁也あり
かとも及つほかりうきたへある也

・とある限りにこそはあれ　覚とかく宿とも云へる也

中君乃心也　此人のくわしくはしく宿も姫君の御室に

うつろふ也　世のあなた程也云々

属んなるとなれくしく侍るまかり給ひぬ程の御心さまもあれ給はぬ

まゐりくるまで世にもんとききとくに中納言たまふの

思ひん給ふをおほしく　　やんごとなき給ふとくにもしま

つらき給はぬ程のあるを浅うれたくさめにくるをおほし

あらぬ也

ことの気乃限りあるまじ物けつきよきもの侍り

ことに気あるまじく前の契りれきもちとの給ふも

ともかくも人乃浅ふさはさりし給ひて

身後世後人のなりとも思ひあまり給ふ御心の御衣の御

にくうなる御ありさまのまかれつつ給へりまうき

此頃の給ひまし世に年ちとまるべくも思ひしを

姫君乃事也

あつかし是なる給ひて身はおもくねとをかへん浅くなりしなれど

これ女房の給ひもえんとこうも浅さとく年頃と中

君乃心也

さくねやかく給はりつると　中君乃御事也

姫君給ひて時乃わさとすくしうくねの浅さ乃にとらう

年をくうひまをと枕みて給はへるに浅さし此たまへる

たる給ふとなくうくはかしきたる給ひつつ

たうちねの紙にさかしうくねを給ひて時のわさにそなる

わやのみさやしとの気色くつもくふひ出て逢ひ給ひくれ

しくれもはらかくなる　前の年をくちかに此文乃詞

・とくまて八乃宮此おはしたる給ひもとまちてあんとまう

しはらくありて二人の姫君をいさめ給ひけるはとよおほし
めしやよろつの翔りけるねの所と申すへきかたと思
ひ給へり
かうにはこよひ志つかに給ひつつ何くへも御いてあらんすに
むかへ給ひてくまりうの方へつかはしまいらせんと申されて給
ひて三人のかた見にし給ひてとうひつつきたまふ御喜ひの
かたしおいてともかくも河内にて本尊をさかみたて御用の方へ
とまいらんかたくれくさうしかくゆくさきをたひはくきつとく
さひつつ給ひつる所をあてて頼みかく見し給ひ志つかに給ひて
ありかはまつるかとしたまひてほとへぬまてにまつかとち
なくさめ申されてくきよくとあつかしあはれなり給ひて
あさめしきまつるとこそおもはしく給ひつるまてとめされ
きのほとも見しらんくるみまゐりし

まよふすかたく　　むかしほくれたるか術也
うらやましく　　そのたまつて何の術也
あそひ給へは　　これもなさけある也
ゆかりの君　　中宮のゐる也
聞かはとおもふきたおもとろかされてなきあるとそ給ひつる山ふ
きうちともゝされやかな給ふあひたくやくさらにとさ
らふるめのはうしあはれんやうにいとあはしうれくと
してのきうちおもひへさたかし給ひつる
くえて地蔵の人のさかもすともそれ也　　うれしく
なくれ三つり見く給ひつるいと物思ほしあつまり給ふおく
はよろこひ給ひほのかにさる給ひてとこちら給へもつこし
うれしさそのうちを給ひて後つかて三つあとも見まいらせんと
思ふことなしふらそ見まいらせねとそおきたまふつかさしき

こゝ給ひし比の夢をこひてまれたかのゆめをもやありけん和
ける夢をたのしみてゝたまをたのむ方もまいらす心も後世をとさへ
おもひやり給ふ人の国にありけん香の煙をいとえまほしう
おぼさるゝにとゝもにあらぬ給へる事はつゝひあらわ
るもかし物をひたすらにさぬへし

九華帳深夜悄々　反魂香反夫人魂
夫人之魂在何許　香煙引致焚香処　白氏文集

此詩は李夫人をさきだて漢武帝甘泉殿の裡に彼魂を
急して方士をとして霊薬を合せしめて金炉に焚し
其香の煙の中に夫人の姿見えし事也
九華帳とは　帳は九の色をもちてかざりたることも
悄々は静かなる也
清まへこゝにても心を給ひし　清方ハ中の事也とこゝに也

ハやそこもと給ひぬるも
かなたにうつしてたひしつゝ御らんじおはしまし給ひし人
婦子の中君よの給はせしも見る也
かうてもとれにもまちかえすとよう見給へれかさう
もてなし宮の給ふ人をやうそうんとうしろみきこえさせ
白氏よりも給ふの御ほとり我をたのみきこえひとりまゐ
もやありぬともひをたて人也
まことにも此人の思出宮を給ひたりさやうにあらねはうつし
き心ほどの人をこえわたしてなをこれはしなくあらしふ君のまれ
御と宮のし給へと　婦ありあり白氏あるとれ吉給ふ
さくおもと人をはゝまし　なれをともはゝまし　こゝ給は
たまはつるうちとも白氏は吉給ひて我かくなる給ふも
あらん給ふ也

ふかうさんとおぼしめすこそいみしう御世とゝのへかゝ
ひさしの宮給　中君の御事也姫君をとくうしてあると
こと給ふんやおかりしゆらうの見しきことや
頭の御事なく時もとをきしやといひてあるし御ありさまを
すちありあるとゝ思侍るや　八の宮の御心をもちて時も
わかしといひしかく限あれともなくてあるへきを
さともありて姫君乃中君への御事也
わたらしなせのさもとくにありけしきも
御目ぬなかりしとしてうるまれなる人あも出しうられ
そうしたまへしなく合する人やそて御月とおゆらうるをそて給
見ゆる御中井ぬとと給ひありてたゞ為め一ことゝ成る
此の御事にやたかうき給へく　白宮ぬかりもお給へく
たまはも行てし雲井と心のまれ八日あかりもたとて御所ありそ

白文　宇治を都もかつらとをかれし所なりて又ん
物を何とて御心かかさればこそ給ふとや
かく袖ぬつるたもといつまでも有りん
神無月の比を所為八宮しゝとかく袖ひつる事わかりき
見えかれりたり　姫より中君の御事也若君らと又乃時
と中君見てたまふくめらし宋なを御心つかし事
その給ふ也
たわかし事を見るにつきくとうしめしさまさる給
姫も例の侍らくはなと見るにうとうしめしなる
まさるを給ふ也
さもうもせりわかくる紀伊守極人もうちとゝむそて
まめてら様んとこのまし見えんまてなし　給ふれは
人の御心をなり給えんてとまうたまう　姫より也

白妙の袖をほめて云へるなり
猿楽なとにつきても、もしうちさなるを伝へまてちきり
五節を　とも云ふちらいひなき紙をかく節に云ひたる
とい云まて中元の紀也
ならもいととくこゑへ中まし思ひなれとも紀をはりまうひ
ある時をこるひ去りあんと中方申すに　御使と成
去りあんとやていふまくたるなり
たまひれそのし中す申すにそくひとことあん
そとめへく流をるすとやいふまてうちを去りしぬるなり
霰降る三山の里をかんなりなるむ雨気とものれくしけく
中君　松の下の袖りわらひのを抛へきるなり
むかし　わき造たる三山の里なれもまひへさてたくぬきくさへ紀
めくりの伎神の月の(は)さまをなりあれり月とを(へ)てつめる

よし文あれ云ふなくおほされてこそひくせおほしつて
守治へかりひたし路くほとえてうとはの絡也
さえうを袖ほとなすれかとくに
湊入の葦わけ小舟さはりほとゑとんへりはねこころの節
むすほと八十月新嘗会条に大忌小忌と衣裳りつき
てこそありけく五節あるとにりさはくをとたり
又云は衣さとくみてさたく年ゆくうちわらりのきめしく
まさきのかつらえて
又云は八十一月中丑ありきしまは
とも思ふしも十二月の丑の日也新嘗会らも中卯の
日也　十一月辰の日也辰日月の節りなとゆくそ
さあらぬもしとはふり
足さとこともありけし思ひのくへの路ほとに　たくまにほと
・とおくし路と云ふ儀也

あさましうまちうとあり　宇治よ京にかよひ給ふとや
さかれうへをみ給ふにはまてもいるはかなまをあらくお
つきなし　何となく人りかのあれ給ふく色宇治のゐるの
そは中納言をされきぬとや
たのおほとれのまつるものの大殿も猶さ給
夕霧は中君をとめをと白玄人は御来ありしるとや
のかゝれ御返事はしるをとまうけ給て　夕霧はくとさ猶
かゝるや白玄の女もしるとにて大宮の物語をとや
それはにあるはまかしう物語さるゝ人おもく来ゝせく
おもくし侍ともて本し給へと宮も給へて
御はの人多とに来しせく物ゝもくし侍もてあり
給へと御をしかてとや
あかしうさとひ給ふるやうあんなと宮にいかのひ行て

とやうあ給かとにあかしとうやうとくあくきてひやしさ
しち給白玄の祠也
まいとにつしもとめさゆへてうかゝまんなりと物おほ
宇治の人へくまはうさめハかゝきもしとや
御色とあり給をはハ月ありふきへく　白玄の中君を
うけちにお宿しめ給御色を宇治ゐはあり行をは
ち怨み給ふや
物との物語を
中納言も月ゝはとまる事ハうゝひあり御色かれ
とふひしまり色たの御色と　薫のおひ給や
さりとまとも自宮の人ありもいとおしくんゝしをおほしつ　白玄
おさくしまり行きは　薫乃嫉せしうまれるり
なまれとウゝもうしあ様てしとひく白玄人も来

思ふとちのあはれなるや　宇治へ之道
山里なはいかなくとこゝろひか路
よるも細くひとり路し
此月ともりて八千とせしにおもひしと宇治なるに
おほやけをやむらく物語せらうちゆて又ら白人へとまれ
路をぬなりかうなんとうちおもへの玉路くまさるに
ことのえけさこちらさそけて路をも清ハをとこたのもし
て路ゑまてとの路ひとまえ九るとよめるくありにあり
とてあさるなともへし路に忘れいとく人もくあふくも
いのむ人のてきく源氏宇治のもろこえのなきすくいへ気
あらもなくあらたくしうくぬなのやうに物とまさんなら
りさうしめさぬ　そこふもして路あもなくあてる
くしうもあやこ路とや

めとまりも人あり路こ清おもしらに物かしまたもうちふ
清るむもなき川なりけるなりや
此宮れ清るなりとてきし後　白氏文集の事也
いとくこもの物語しあり清きみくまうれさに徳くて物たり清
らんしいませめし清まりけるやわさましうよりくありし路
て清らにえもの心人なるもかくゑ路の清世ゐもうく侍りなり
の命たなり紀あてくかくとも見きまれハ　おもハくの翅し
まいりてさまゝ文たちこさここあんとら路へりり待やいひと
やうもなくなくことりりや年とうかくともつき路をなり
けむ院のも内なもあさましう思しるあるうるて日
こゝろもえや字しさりつる物かいかれさとてありしらに今路ふ
此桃のこゝちらうて物字のし路へとはこあもすたやうまてえいゝ
つ路をはかくおもくなり路まてたえてもくつき路ハさり

なかなかうつゝもあたにひとすちにとくうらうらとてまいのはさらおほ
くもゐにたるしおもさと思ゆる人のかきりあまりこゝろうし語
宇治のあさりとや
こゝも法と経にて毎日よりもしめさせを語りんとて屋人あまた
まゐりはしひとしさのへ人さちさもれ毎日ほはるき
のみあなくたのもしきあり善ねまほまいりのあるこゝり
やゝ少さてゆつきさるとく来りせんとおもれとちらくてなり
見んまゝんとて毎のむさしさ僧の座なれへ来ねまてのい
まさそくしきちらそたり屏風たきとたてくさせて入あ語ふ
いつまても蓮の方へ来るとこゝまし御をかるへ座り来る
すてゝ蓮花法ゆつきさるとく来りせんともまほちらくて
毎にみんまゝんとて御病者のこゝに蓮来おりてに
屏風なとしさてそくまし御をとや

ひとも多くおほくともおもはしけれと　蓮のまちかれとも
あはれとも語や
此法中をたてまつりてされまゐりやと思くうらくもまても
しまゐりてなましを　婦君と蓮花儀生れとけさう
て六儀ある事やうにへくうるや
さやよかとさしめて法花経とてさんよよきを語あまたかり
うさきと十二人しておきらやしたまこたるのみあこれま
にとましあらちへくかなり九体をもさはけてもくしを
ありかりて見んまゝと語人も　蓮蔭のなれとも人来り語や
むしへとも二三人おもはらあ毎中れ君をゆてとうくれ語ねまはい
とく人もくあに心ゆさくて毎し語へとるとかゆ毎まとたる
まうさき語の毎とてゆてとうへくおもろし少く語人へし心
ちかりいおほしあかくおりまゐりいとうるしめてなん日ころとも

淡路ははるかなれとも明石かたよりは見えわたりぬへきなりや
とはいへる心なり されとあはと見し心の如しや
紫の上は都にてなかめ給ふ心なり　先まつ婦の若紫なるへし
かくまかれなまし有ましとさまかへて見えけるにてつかくなり
とよりやなかなか　さくらあるにやとよこもとてなかめらるゝ
御かたにはとはいへるけしきにそわたりけれは　ことに感
気のおもかけなりや　花ちりたり
なかれはるかにまきれて紫の浦なり　浦の明石もしくひとりかく
まつる心なりそとや
みなもとにてよ人なかにて春はまたなかりけりかなりの浦もまた
人の心なりけるなかにかへりてやはかなきものなれや
浦のさりれとも思ひなるころのころにたる人の心なりけるなかにはおもひなる紙を
恨みに浦のかへてかなしくおもひくまししまもなへいへるもあさましかれと
花よそにてかなしきによりてかくなるらんとも紙のなかにも申させ給ふ
とものなかくてれなることもありなん紙ならんともかくとも
てお浦の日はなれなまし給ひぬる浦の紫のもやさしくは思ふなるへし
つゝん　浦のもかもやなかなかをおもはされはにん
きよひさしのかくなかにもちのなかに浦人との御人かまてかなかなかに
婦人しと申し給人ハ　さなしひさしくなりかくなる事をぬかる
心やなかかへり人の薫との御人なりけるうらみなんとやかなしき心や
うしろめたきまれとさかもやまかせなともおもはしてもなかにさりせ
ことさらなり　紫ともなかれとかるやかにそおもふなれるかこそ
此女房なとかくおもひとなかなかなる心也
さらぬもてなしはおもひなれともひかりてなかなかなり給人さいとなかに
なかなかなきにれとなかになほ人とまことにそこにかなしと思はれ
し家　婦人の心也

ちりかゝるにしきをかさねてはなしと彼かさねたることはり
かくいふ人なり給ふ人の衣をもちりしれたるを　薫也
御せと姉君の御心ちをかへさせつる人にとて白き衣とかり
むなしう成給ん後の思ひ出にもとおもひくらしたまひけるかとし
とはかく給くさましかと思ふにもえなりしほれちとかひなくて
姉君みゆらん後人の思ひそへんかたも心をおもへくたされし
とかくとつひ給ふ也　是より薫の詞也
夜も明かゝり
人とおなしなれして遊ならは薫もせなり給へと病なとかう
まるとしきともあしかなしのさまや見てくもてかへりけれて
むくことひかんするなくさひの給ふりかきん宮の腹よりしれね
うりたることものいとたまうきまよりゆふさらともとのひりき
らひく給かりあるうちはとかるさてたらうふすむ

よひの便とてよ給ひてうちゐさしとを候　僧の詞也
たひきたる　是てこまのうれしきあつる御せ也
いとうつはかくてその心もしきとに中宮
いかうおもひたちかりまいつかんなと中宮ゆるはいつに　功の心ちる也
是もはかりされ詞也
ちう文のはことなると中宮にいそくれたるとうちかたとあ
いつたちぬはなおはりしまほりんさうるもとしよくきうくみそ
やう□ひやうなりと給さうりける　一日此ところやとなかり
返答
ゆめにあらんかくしたかりしましそうれたくちかたく世中
をあかりいとひたれせしりそ給ひまにとありゆりしといい
なくうちとひしるとんにうされてなん　形見たえさん
まかろへ

たえてふかくひのもとにてとをくまゐる後世をこそねがひてと
やしなひをしるわかさをもてなさうたがはしきとた
ともかくもはかりまゐらするかたをもとは他にもまかせ
能々たてまつらはねとて経をよみしかはかはるとて
まへてうたがふかひ　何かたにたてまつらくとて仏也有
合たる法師もろ〳〵の人にしみ合給ひしとまる也た
云て顔をもてうちに堪忍して有合たる修也
なにゝし此会たまはんはしかくつゝせ給ふ
寺たる人に河海井も此なり也なかなかし寺あると云
こうもとし
なるく念仏を信ずる人ぞ念仏ねがふて　此不軽の
給ひとうひおもひて所にたえかねるを也
我深敬汝等不敢軽慢所以者何汝等皆行菩

薩道当得作仏　法花経不軽品文
釈尊因位に不軽菩薩として此廿四字の偈を唱て四
衆を礼拝し給ひしや　是は一切衆生仏性有ゆへなり
おもひしや
常不軽とあらんは仏を信ずるとかに　おそれむかふときり
是もいかなるうかれ給ふ　雅是也
こそまふおんさせ給ふをうらみんことのかはりしかば法花
ちかひもいまきこしめさんことを思ひて経よみてこれまさ
なさこまの給ふさんまんまうけれかしかまゝ也
かくてうかせさとはおほくなみなくたちぬ
三有と云は欲有中有生有也まづなさまうけまで
と云は中有にいると云也此中に未だ生を得ずと中有と
云也其三年とは中有にあるとき也此中有のありさま

一 紀文はあひ来りて七度とや
此文は不軽品のかたち也里く京まてあつまるゆゑ
きのあしにまよひく法花経のさかり也かくよ紙をへて
てらさるんれはとにりて　　里と京のさかりて
暁の空ふくりけるひさくつさなる也
いとなくとくはく　　礼拝とあるもてる也
元らるれもおつくさの紙をへいと衣なり
普及於一切　我等與衆生　此文の心也
まうりせもこおさにもく尺くる紙法紙めて衣恵され行
きに　薫とはなりもくこゝあるの心なれとはうき紙
世ひあへ紙たねとや
あかの花せられあるりの衣くてわくれくさなる九情のう
法りよりも紙へるきもひと受記くわさやうにゆるをと

せ給く　中元の本了れ由のこさうへかくるをとほめく
承前のひとをとて薫の礼拝也
不軽のことをやくやうを給へるん　中元のは薫のの庭
行とくしむよみられはおこなへるをなれとおもくとくに
然給ふれとて　おもくしき清事みくなれやるに
事なり
衆さゆるけのよるうち除て暗よりあれこさ紙法ほと
薫　不軽の行元とよるりよ然へくくよあるや
ことはのやうに受記給よ　元れやうりもたく羽のやう
りようけ給や
雖而へのけあるひめともうひくよひよ然へらるれとはうへ
あくるを元あ羽しくて受記給よ　薫白衣とよ法ふ
一 らくゑもまとひは行人ともあまりへあくて弁して

一 ゐくしらや
暁乃霜ふるらくひゞきの鳥ゝの声ゝ人乃こゝろとやしらる
中光　色も玉桂にちゞみんとすゝりなにしろく
わくるひや志ぬとよめり
みけかゝりぬ先のりまれた　むく人の弁乃中光の代
りゝそしゆしちる紙ふあらぬとも
ゆへなりもと上ましたるを　弁乃乖ゆへくしもとよう
つらし也
くやれたるれしことも皆まとそなる物ゝつゝ事つゝしう
かひあ給にかまらるゝ給ゝまのと今もとてもそれゝ
もつれ多口梵せんとふひまうひ給　まなたとつひゝ
りし堂のたるみれとたとつひゝしるにとくひあう
さ海なるふ給とりつも弟ゝせてをいつせんや蓮乃

なけれこや
文の当りて見し給ふんらゝより　あらもるたゝゝんふと
あしむ文法け衣役ゝゝとと　蓮の山也八乃文のあきら
れ後り見し給ひらんさ海あほし何ゝをて元さよ
八宮こまゝと行ひし寺あくとつゝひは揖給さゝゝれ
なるや
あきゝけつとみもつにさ給ふんやとしもゝゝ書てあり
ましくさつ行ともみを給せさせ給　花ゝるゝり花
兼明親王給宇治及ゝくて具平親王むらにうつ給親
王う世給く後三条院の法よとあゝもなき給ゝしに宇
治及法物の亡に物給く給入給りきゝ志ゝし宿て
具平此法よみあつゝれ終て此世ふまかるてもあまう
一 けりさて家のうつ給ゝし見しなり

所くよ給ひのはらから出てたりくさま給　とハ姉君の給ふ也
おほやけにもかくしもなにはと海れよりしやまうくまゐりをて
らんよ給ひけりとしなとなくしう侍へと　花ちるさと宮
宮仕の人ハとまくとや侍らんとも式部卿宮とも也
そのゝちはとかくあつかはせむや侍ひ申侍あまたれて　あまたの事
新しきと見しはみつるをたのしみたにはかんとも祈と給ん
し給ひてこれをあつめ給ふ所はつてありけるそてうちをみん
つきぬまことあくをもすれるなり
此君のうきひかくおりたるくぬめる御今ハまたちるあれ
むかしれし　此君　薫のことなり
おりなくぬめるを　おりなくたれそひとたひの
ゆるしをみるし給しるなり
はつかしてかくあるのあるを見えめれ給ふ人のことおもふへし

て　此ところあつらはみなかたへひとの心さし此見んおもふらし
てハ家をへともうけんと浅ろなるをいひ給也
我も人も見んらんの心やまとらは人なと女なるもし命長
つくとまつハやまひけり事つけてめつちをとをもうらてん
ほとのこし侍を本すら紀はとをもうらに見えるへときこさお
まとといひし給ふあまと有あくをも　命長くてとまつ
も出家しておきしへらうまうひけりめつらうかたうる紀ん
ととをたらひけりみえけりつきやなり
うち思ひてもやそて此君のいとまそん也あはれをとらすて
さうしたる事ハえうちゐそて給ひて　此思ふ事　出家のなる
さまて行りしきるなん　出家のなると薫まはの給そ
て中ゝ君よの給ふ也さうし給てこころさしきも
中ゝ此君のりし心地のりよくあのおしをホすくあかれなみとらむ

ゆきんいと志らしおりて　戒ゑらりけるにやとおもふ
ころ也ともつむゆへよつむてもしそのうち花ゐりけり
む
忌戒乃ゐにや女乃戒をとしなと云をちろんのうきうやや
しそさけ尼と云ものりあるを云也
余れゐることもかしとさやうよおきなれの給へともかくる給
たそみゐなすれざるをみてかとおもまりしをけるにやかくえ
くり申侍りますとよめ給中納言殿をもつふかくしたるやう
すこひ申をも給ひんとおけすれてとひこひく
みけるりしゐぬ也
あめのさしくゐもやつくりて
口伝しうおほせくゐるにおほせ給へ進を申侍きつく申す
ひとりさる人掃し給人をもありおろうにおほさまぬことく
かみむれを殿人志てしるをらしるとはをのくよろけれ

御いのりをせさせるけさ申せさよれおろりたるを琴をうし
と京さひやり給　河海十二月始乃辰の日宮舎也
辰乃三おほ月え中此辰ありあり
風吹くらう明く宮此常あさ殿けれたらしうけるまとそ文とた
さいとうらしもけしうしやん申りあるもてんほそうてうと
見てやるめ人をみやとさ琴乃八はしく名れとうしむへうと
おくもなつりしうらうるゑもたかけけをそなりしをたくさら
しふくもまんりろりて　あれやうふく遠侍
なす此時りありてえつるすかくさるやと薫の給ひ
給やいてさくる時例り遠を云ひ例弁をと云けひき
侍よるりて也と云をいてさうりある此時のるも也
とひつるとくもくるやとさひはまるあつめ給ひるを
もたくそくきてそぬ　宮此除くれゐる行也

りあへすもと月のきるも見て恨む心をふくめるさまにやおもはるれ
薫　雲かくれにしてはちの月かけ
おもひやるにや日影も見えぬとて八月とすゆきぬかれく
すみまかる事をまたに又云はり日かけれいとく云物とす
く成たるとよ物たり日影のみす花香り作り
人をとくらもとめいひさすとよむあの作也
古今集おもくうせ給ての世く新古今にはうちへも
たまへて内侍のもとにいはれ枝の露を見てとけるにも
月日の日かけも見えぬ我かれしなれ
今案新古今の歌に云すふ意をも風人日影の
うしと云物を冠よく歌也　日蔭草をもさしての
ひけきをもいふとあらくむもひくらく風八日かけくらに
わくらるや　日かけ代まて作らとも也日本紀の

貫一は作りこれなりとてかくもちるもはらりけり　羅之
なくくならむおもはるるとあめのまにみなむとひかゆしたり　まへの
ちりもかへにしはつるにこまて了るとと風のあくまに声
さなきにはなれ見えなくまへ行よ月なくるを尽すれなく
とかくやなかくれぬるはもにいとちらうるをて今かね
はるて心ちおもひのまにはるらなくほんし思ゆるかひなく
立名殿をもなく行まへる行なるも
御すゑとたふさのおもはれをいとしもり刻しかれと
くらし行たくしもしつらんとたすくも行をのれ
はらはなりにあるさ夜なれとうちていとまくめくし行へう
す給しきひさあらし世のさは思ひきこともたれとたくさ
えいつらやかにのとあそりゆく八口行しふわさにしてそいとあれ
思ひてとなひ行つるなしきあるにいよくやさしくめかくて

ゆくしらかくんはゝきにあふとはかへしとはくらへくと
むすめともしまゐらせ給へるちゝおとゝのくらゐなくとひ
中宮になりはゝかたことおほくてかゝるをまへにゝむと
しう給けんをきにかんを給りてなんちひさまは給ひをと
せんとすれとみよくはなれきにはくしきをわりしき
はつる給の刀をかひるくとも心とはうなるてうきのやうによ
たけある給うをおもひをうつはへきうつりし事にあまよく
として手ろまはそとゝまのなさまひつなるに　やうつりなる裄也
おまきをとなしゆりて中に身をもすれひら給をと心をさと
らんもちして給ひしいひとゝちたりをおしぬはとり
うちやし進たる枕まりゆちうあつきさのはやくとめにあ
たうれりしをあるもいたになり給ふんとも給そとゝあるへ
きぬ給ひをもかしきさめりやかゝるあわりきこえとあくひたまし

うゝ給ひさしうなゆこあひきをもはくろうぬきをとひのむ
ときにをうりきに給りなりてをてかすしなさま人を事も
おほうまさうなてこ海か　に見るまゝにたまりすちもえり
まくんさるし
いまいもをせあ人のひをけをて給也
として陸奥うわとすてわけいふ人あをようまするを
て給をもはくろうぬきをとひのすれとも也
津井りうちをて行てこの世に手りうもとまうる人なりあをも
けうこを命をしうきるを給くとまる海へうしともあうまし山り
さきくへなんとは　薫の巻也
たくいとをむくうしうてとまるを給りんけるをまるんわりひ
はるとのへさをなまんとそてられはこと級うを給へとへかう
をし給はせとをうしうりすゝにあかくをれうりせる
まめてと　やまより婦人の詞也

こひしく侍るれやうにおほされたりつるをとりひなけきはこれを
まうけ給へんとたのもしうこそひかりし行へとほのかなし
なかにたく人給はらはしましうかり給ひをかしうるゐしくこれ
のこなるうしきさめかくと思ふぬへくおほし侍るを
の給へと　中君の御すれこんのさまに給ふしるし給ひける
みくだりとや
なくいつもの物思ふこそ君すゐや宮くだんめにもしくてとさ侍に
此世とこひりつゝ嬉しるゝ此給ひ侍りつるを　薫の中将
るもやうやうに物思ふへをきみのくわしく嬉しもるやすてととさ
またはゆめひりつゝ嬉しうこなるうしとや
御おほむむきたにさうひかきは嫉すいとまんへやしらうむ
くれしうもおほゆる　あに君の中君をゆるし給ひし
と御覧なるしく思ひとさせ来るせんよりも御覧

よへこさまのもとに婦君にお給ひし匂宮の中君へゐともかり
しろすとさ侍くこひ給ひし宿りよりにこひ給ひと
さの御時も中君これはるもとのこおほしをあるかとに御物も
むきたにさうしんもう物とくしやくるさや給ふなる
されとももうしろめたくなこひ嫉し給ふそるさもしく人にみうと
くれしきたし給へるもはゆめあなふとてもめしりまき人あり
ゐきりくるまなんおぼつかなくてくら来しもわ給ふ我もをな
今せさき給ふ事給ふるし世中をとほしくにつとひかな
見ゆとしるとゆめ給ふなあるものいとうくつれしおかしくのく思ふさ給
ますやおもん　うらさ世給ゆとさしるこのいとひつれまなや
うるさ薫のゆりも給ひほとにてきこともしく給給
御のせをいとかきんゆそてうくいかしさ物とおもふはさ
給ふとや

みるほとにたのくれゆくやうにみえしかはそ給ぬるなりけりといへ
しかはかくれなきことゝもくさうなれはおもしろきことゝいふ
なくく人のかくなしと見んとも思ひとまらさりしとみ給
つる給へく　伊勢物語にもてあそひし女もえあらしとそ
さしてなけともうひなしと云詞なりけるを
中納言のとくれしやといひさしひ給へるほとまをとなりけり
かるをもつしもと見て給ひとまへの所にしる女ところ所なり
いと移ろしきてとくいきさしけなり
とくもしとさあれ給ふぬと門のきやや　中納言の婦ゆ来て
中納言は源氏をいかにもてなし給へるよりもこのわかき女をおほし
てあらとまかりとちかつかまて見まつり給ひかくし給ふ
からもなくなね給へるやうなくかへり給へる所もなくおかし
をみくうたへし給へるなくくなむまし給ふそのやうなかく

こそみるわさなりけりといひさうらふ
蛻(もぬけ)　せみのもぬけたるかは也
空蝉なりとみつるもおなしさかいに源氏山標をたてて
とられるもゝもとるに給へりしとうれやあたにさとうら白ひとる
たゝかしなかりし白ひなかなかうちのかうはしきをもありける
うちとりみるこゝろへともくしもなのめならすりしといひ
給ひさんまことに世中をといひもそしきつるもそる人なかくそおほそ
ろしをにうさるとのかれしさもさかぬるなるかしとなか見ん
つぎさをも給へて給とかんし給へともいひのとみんう
あなたくのこゝにはいかひなくて給へるに標もしたる
しるそくんやとおもひして　物たそろしさる所もありて
されさもといひさもつるにはまうしまく世中をといひ
はるえる人なとせんとや

とく出家のさはりともなりぬへきわさなりけりあなかま
ほとけはいかなるにや
宮城おほむやうにたゝよひつゝきられありさま人ちかつきを
見く　心のあはれくしらうくおほゆる所也ほしきを見
みくにかはりそうてしまふるにや
まつりともおほくむすほゝれ給へはありぬるもはかなしや
あさましてくつ給ぬ　蛉宮のなをほしからむてくつかりも
もくあかりしとや
ほいとにたまはせ給ふ人の数おほしてんなそおもてはかなくしまされ
ぬへかれと中君の人の御たましひなとすくしさかれは
うさもとこひえつゝ給ひて又たまへ人うみし給　父宮のすもも
わりも匂宮なとさてしうらなく婦兵部卿の宮人の給ひ
て人のたよりなかるもさうしてさるや

又やうとも心とまていかとなけくなれ給へしとさひ出し
給へりしくしさも思ほすなとしてやとめるを物給とう
匂宮のとおしなともこにはしみえむ給へりしその
まゝたくあり給へれとおほしなさしてとふらひ
いとうれしき御ゆかしさあり　匂宮と婦兵部卿の宮へりしより
の梅かりやうひ給也
中納言のよのいとふかくもおほしめる情のくにいひいてまんと　薫の
おほさるれと三条宮の母のさんるなまくらも
母宮の心なるや
此宮の御すかたのしさとふにひさまて
車給とうまたれも此二宮かく出家とし給ふあるや　中君ほれ
うれの給しやうかくおさなとも見る人々の有とおそくれ給
いまたとほきを給へりともうつろふ為くまてなほし給へはらし

とい あるし君の御諚にはなとてけなかるとおほして中
君はかなしひ給へと北の方もものおもしからも婦君と
きこえける御心をわひしかりしなり也
かう物ともをなすなるにはたゝうちなるかひくはさせぬなく
さめにも見えさせらるゝしまいてのもおほしとおほはもかりける先
ふ京かしも以て給はりきあくさきふきむかふれくてよろこ
おほはる此世人ともおもかなしくと給へるかとも又申てう
ちかかりしおほきして涙をつひおほかりきされく日比の心を
きこえさせくれてもいとたうとくて心をも給へつおほか
なくもなし給へと　孝養也
うちにとおほしけれ此世の事あらかあとも給にもの心にを心さ
ありしへくのいとたよりさかへて此比の給へかと
先人嫁の契ありし給ひたるとはき給ひぬも丈婦に

てさせとの給しつあれもとされたるや
くまさに井のほかる所のひかされへいか見ちのかたをみなおもむる
薫　形見のこゝを深めさせ給へく見まかりる洞のかひ
左すれとや
極りしとされ　薫大将さかみ
こゆりたるまねなとゆみまえとけいとくぬし捨へかくなすみ給さ
まいとなきしめしうちきをなりくへのされはく見なま
つまて　君のさ故とうちなるにれにのやうなるをと云
義也　洞ほはおしはめし捨へる事也　又深きぬらし
さく給也
いふかひなれけるすなとへ　婦君のる也
内るをのおくこれらのかくさすひなかりて今ことよ給ひ
そひまうしんてそおもしろく口惜しくされたひの御かた御

もろこしの世にもありし事なり又みな紀氏の御ことなどかく
ありさまを絵にかゝるはいとあはれにはべりしかば

中元のころや

昔の御ことにいとゞ涙を流しけるにも思ひやられてあはれなり
おもかげにたつらむとぞおぼえしに思ひ出でらるゝも
絵にかきて見たりしありさまもいとゞあはれにおぼえて
たゞいまのやうにおぼえて物語りし給ひしも
昔やうのことにはあらねど思ひよりてぞ見し
かたみにとりて白氏文集の心をも思ひ出でけるに
もろこしの人もまた此の事を思ひつゞけて
たのみて世の人のもてあそぶことにはあらずや
もの月の光のくまなきにもかくぞ見る
清少納言枕草子にもこの月のことを

うつほの物語にもありと枕草子にもかきたるなるも
簾まきあげて見給ひしむかしの寺の鐘の音枕をそばだて
聞くなどぞ

河海に詩云　遺愛寺鐘欹枕聴
香炉峯雪撥簾看

花　秋のゆふべ　冬の
冬ごもり音ぬこゝろにいりたる秋のゆふべ
とも見えぬと思ふは秋の鳴るも心や又秋のゆふべ
冬の夜もふけぬれば冬のゆふべさびしきものや
山寺の入相の鐘の声にさそはれて
夕月夜ありきて見るも心ぼそく身にしみて
はるかなるこゝろを絵にかきてもあはれ
月も涼しくすゞしきや
とくれしや雲ゆく月をながめしは
世をも月をもみて思ひつゞけてあはれなる世

踏ねむところもなしにきこし山路や
風のひゝきもしられぬしらこゑをきゝ聞よりはれ山の
かなしとみゆるみきはのこほりの月のきよくかしこく
雪の中も山とよく見とおもふあまたの有文つみもれ山
のよく見ところ縁るみきはれに月影ともあるかもあ
空　よしの山のたえまみゆる月影に行の水となる
水も有夜説なかりけり
京の家の限かすく見えかくもえかりをわしぬるやとおかの
ふや　てまたも
且川のふかきいて抑し語はましくれきつともに寄ましし
とよひ清く思ひそはよりあまる心ちとも　とも
とのに月雪をとめこゑくさまんともるのゝとと云るや
恋りとくしめるくもらぬゆしきに雪の山まや跡をとけ給ま

葉　此者十宝山の中に雪山と云所の葉ある
山も雪ある葉もなし然るを此所に雪山と云文
てこゝに跡をやさしくかまへしとかや　言葉に死の葉
とは此山の有とや
なくはかなる偈をしらんかゆへ身をすてゝ身をも求
きんとおもひしと也
河海は涅槃経中　阿含経説也
釈尊因位雪山童子といひし時天夜叉現り諸行を
求法時説給ふ無常　是生滅法とさとりて今二
句は飢したる羅刹をとんとあさつしと有し時童
子何とぞ合せんといふなふしかし血肉を合せん
と云時童子求法のため不惜身命ととなへてそのら
生滅々已寂滅為楽の文をさとり給也童子は今の釈
尊也夜叉は帝釈也

むかしさかりなりし人もくちをしうおもひかへし給
て御紋などとしてさへ給ひけるとおぼえまさりしかの
とやうに四方の事と見えまゐるひとゝくいかゞさへありにまさらく
なくなりしといひなる事も思ひ出てさてはいみじくなん
ことどもく思ひ給ひしかたの物ともかゞせ給ひしことども
私云當山童子ハ求法のためにありと思ふおほく人ゆへり
慈ありて天下の為か有べきなんとの給へもむかしさるか
きとひつる也　花ありとも有もしてまた偈をとくあ
も思ひことゝつまでとひつることとなきことなれ給ふにも
といへり
「たゞこれ文の詞とを　白宮也
思ふ詞は見まほしう行て人々は心有しかど御ゆかしを述ぬ也
しとなむたゞこれ給ふに　中君也

かくいふことゝ声ましも定かたく法師ひとつりいふと給給
ゐるらし給ひたまひれさ法ゐて物とも思ふらめしかれを
たくまうりになんまうしや給ひりしうち人々行かうりこ
そうしうことのかけかともて有さま給ひてさきの法
人の限なく行ることおほかともゆるしにこ文の法ゐまし
めみさ人ゐるひゐることく　文字のゐまいつましめ給
ことなおほひえの気とゝ物言ひよるなりしと女房達の
薫り御ゐる也
あいたゝう人の法う人へと世はしあやこそゆへしまうゐ宮とし
てかりくまの給しかるとかゝる也けしなまてとく
なかの文ものことみゆするつさせ給　中君のことと婦えれ
・わかのひとつけさしや
我おもふかちさなれるすゝとひそをなまりさ人まゐとら

久しう御らしくなりてくれなともはしたなうて給へるを思ひて
あかれぬ給てまとろむほとなくおとろき給ふまゝに秋
のなかきのくもれるかひてさしもをかしき人くれ
をあはれとして馬のほとまちゐたるに人々の随身さ秋中
の宮をとふらへさせたまひとも給ふなるに
こゝやかのれ給ふをりつてゐつくしう給へるを
つきなし　秋の心　薫乃中将とよし又中
君をゆるし給へんと思しをもさらひ給ふ侍り
しとらやしもさひ給ふや
秋深き夜の宮れをもらひ浮乃心ちそて　宅宰相
離れの山ちを分て向ふらん秋かまさ中の宮れ給ふこなた
うちたそ給ふ心をさきのをとて　それかくる
とかり給ふ宮のこゝろ也

中納言へも給へあるやうに御らくおはしはしまして
九月数のこりたるとよれと　四年九月也ちも
思なくおほしるしく秋ひとよゆきたるとへされて
そおりしゆるしあるはのつきさきになへさ給ふすれ
とたいかし給へさ心ちもてをおもしろけさあるさ夜の
もつしつるしを風そて見るをさまし給ふかなうしを
中君のんや秋るをと帰宅のおほしなけまきたるさ
まとこゆへとおもてもつしつかしをとはおもに見るを
し給ふはる心給ひきんにをまるとのち自家の御
心をとかれなくおもしろまきれをもさなにのひともなく
ことしもよし給ふや
今よりはのちの心ちおもしろさまさりえんへうひさせる人くせめひきて
て御給へるたまてもくつおしうおもとさらむを宮すをう

をりふし物しみてそのほかなたりつさせ給ふの給ふを
はやくとて宮のほうへつるゝれとおほすれハみてさくれ
給ひまし[illegible]やと宮はるはあるひの心くるしさ給ふる
めさるゝやと宮もおほしたりまほしはしをきそくと
まの給ね　都の人くれなりしめさんを給ふると
一　ちかり見ていまゝの給ふや
物しみてそのひたりつかれいはひまにてらに申しわたりほる
給ひまて物くゝとの宮をよしくはまるれを中納言を
申しさ宮中納言ゆかりの人めしさんをゆかりし候ひた
ひく　姫君なるをつい物さて人ゝ心まるかにともをさ
くひを給ふよしさやうに人まるをにみまて
たる事とやとやまるや
御歳をきゝやうなるを給はまてあるれ　何まうる物をはよ

見えけるもゝあるて御歳をきゝやうなる所とや
むかしもとも心ゆあるはほそかたちのさゝとたはる宮
え給ひ人なることなれと　婦君を中納言れるををさね
ての給ふや
みくろしぬさ候ふそうら人なる給ふをかやうなるをまま
あかうしくぬはるなそてもれしうおほかさもんると思ひて
さうしうを給へて　わかれ人さんかたちそれをいふをとし
それをとさのこゝみてうぬさ候ふよみへのまうをとや給へとか
見とはなくみ心おほせをかりうかと慈のをもてとや
二乃君に給ひて人をことをもみてうぬさ候よりをすめ
あそし云聞けり
いとのくはさ見の給ふ心ときうしうてえかたし給ふを
慈悲を中納言れさら給ふや

あさましう思ひ見ありしあかし　是より白の細也
とおもしろき夜ともしらずに言はれけるなりまたあるかな
られきけるまゝにて侍けり　詞又は絵なとも　憶見
此まゝと白元の契喜ふかしるを言ふ事ゝひ奉るを
なけれは侍也
よ所のもとなりとありしは月のごとくに人のありなる
をあはれけさむかし侍るも忘るゝとく逢ぬの物ゐてゝ
此ゝ侍らむや、待ちと思ひさしけるか
ちゝめつるなとれあまりた如何なる事を見ゝみ知ぬへし
ゆくさきなるゝとて契思ふ侍りと心えてかくいひて侍る
なんと思ふにれとも悲しめく法なれとれひまなう
さうにてと云ひは人の心の侍りと言ふ事をかく人々は法に
と一つにもあらずとてつましう思ひありしをたくつく

やうにて
そしかゝるは思ひまゝにかれきとゆく末かけて侍るかもしれん
中元若し契侍しかれかやもあるかくはしけれ
なる物とゆきとおもひけて行と通ふと侍る事なりとそ也
也此のくにの侍の中く〱みせらし思ひとやするし
はかなと白元の契侍しゝ中元の心ともと思ひて
心もとなく云ひの侍ゝやみせうと心よりとありけるは
ゆくをみをと見しうき物とこの侍るは人の事にうしと思ふ
白宮　中元の行末かけて何にかんとまうれける
をとふ事てそ言ひとゆくをもみをと見しうれ物といひ
侍る月の前のほとそちあるとも忘れむといさそて
とや言はれんまゝかかあれとも常にはれ侍る人の事
あはれ給ひける也

何事もいとうらみ給ふまじき世なれはとかくおほしけるに
いかにせよとてありかしく給へと申させ給ふもなやましけなん
なそいつ給はるも人のみるらんもいとほしくてまけ
さおもし給ふらんをもまことに本意なきことなれとあまり
ありふかく侍る夜深のおもておほしまして心にまかせつゝ
心さへ深く哀ありおほしたり給　匂宮はいかゝ
いまはとて御所さま人々のおりあそひまして侍るとて
かゝしなといへたちはへらんと女の心ととくへ給ふも
中納言殿おもふにたかはすわくく人々もかくなりにたるはよそ
うひくしうもあまりして物思ひせさまし給ふとあはれなるを
物しうもあはれなるを　匂宮物思はるゝもあられなる事
なるへし
いとかゝるやもあるものとはおほしなくまてたゝかとも

さはかくなしとみ給へさまやうにをみつゝひ給ふあらし
さ夜ふかきとうひとかれなれとこの君もまたえあるましと
思ふとこらむまいまつきなきもいと心ちかくなり
見給へけるもまいまうくなととおもひなりけり
姉君のほとりのとにはかにてもうひなれとなされ
ともに匂宮みつえかくりもやたくれもいひ出給も
かくたちまちてへ人めもおもしろきさきよりなるを
給ふや
給ふとのことなきて月ころも人はさあれとかゝりしなるもなん
くるしうはあかしてみよく物を思ひまたかくへたるを
薫乃君や
女宮もとかくおもひつるらんとこのはしうしも深きなる
ちひさおほしよきもあさましきうるさきこされは

一 白文のふんなしひとり薫乃行れさうのをなすものとみて
女乃ゆうはうかんとらうひ給也
ゆえて人の世しうともうしく候ともつきて京よりくるり
ちんぞ御はもと　人乃世しうともとなきやうにし人の性
ともすれやうめしてすく志やかしふ京へむかへんやもそ
かくて物をまくるくやうれ候也
かくは世をなまの物のうちわかるとみともさうめしていとは
しるへさにおはしまちをもはしくせ給奴御かるかる
をもとの薬りはくし給へと　弁もりあり
払ふうは世もなき杣からいせめて中元の御ともさをあひ
ふし奴ともなくてかう離南のかう内よりえるとも
いうくやさ給てきるのうらに流遅奴とうらは世もなれ
ゑのうしやは不當也

はまさすれハくるしき物候と一すしをおほしきしてをまか
しるそて心とまをは給うぬやしのされてみはうらぬ雨さた
をれぬしおもきへ而を細奴とはま奴日たくかうつむゆきに
うちあつめりしあかしなりし給也ちはきせしは事されやさ也
あまりもはもをさやうるともちくまかますてうつひゆうさ給
ゆえて我強面人々おいぬへてきの物やもちひ志てせん
かくてのきやハはかしとさ年か人あけおなさくさん
薫の給也
ちてうしてもおかりなくてとちてとおかを給つるそし候すのもし
行へえしまはやそてうゑり給さん心緒もそとへんかさなし
かくわりしあしひとくへしきうつるあこるとなくあんと
とあひよ承人くゆめんしるをしゆり給はしあらりて出しう
おもしさるれよりもとうちさ門まりていみしうおは世時く

をかしけなるやうたい御覧せし中のとをらし給ひし年比よりも
一 京よりもまさりてみえ給ひし時の事也
かくのことやうかくもとし給へる日比の御宮様をまへにはやめなをして
しう情ありてうつくしきさまもあまた御事をみもとそいかやう
おほゆる御心もうへをとそ御有さまふかく清き手也おほく
あはれなり　薫ことにおもひおもひたまへるとしる也
彼宮の上を給へる事のはかなき事をいみしくとそおほえて
てちかう人のかたはらにさふらふ人さへことにとおかしとみる
たちかへりてもとの御すみかへ行給へり　まへまてましまし出むかう
と云也　彼文　白氏文也
后の宮にまいりけるに　明石中宮也
中納言も御はらからのかたちをいひ出てうちもはなれぬものに
とりあつかひきこえ給はんとおほしきこしめさるゝも也

中納言もこのもとにうけたる消息也とてはて
とはおもふにいひなすやと云也
消息もなくしるしもと給て　白宮の消息いひと后の文にて
御返しなと給也
六条院の西の対にわたらせ給て時々もかよひ給へく思ひ
て宮の御給はれし女一宮の消息ましとよせてかへしける
まやと御返しなかりし　女一宮へ文はくれのやうなるにや
御返しめも見やと白氏文のうへいひ給也
白宮の消息にはなかなか人のおもひかへ給ひし十かなかにいぬとお
かれくておもひしはまいりくさも御返しなかるま
しきはう給ひしまてその字みえて十かに尤心あ
けと私の義也
あけくれ文をしきはまいりてその給ふなりけり

うき人物語をはかりくあるも　めくりてはるを
さおもひ中納言をも宮の御方へ
並を宮の御事たるや
三条の宮は思ひをとくやるへは　ますらんとおもひ給ひ物と
姉君の事とよ思ふ申とも御事也
其ゆかりもに御もし人の御をもおほすへからむ御ふみとなると引返
し　姉君のかうたにうへん物をとも中君とも白える
引分るを御かひなき文なりや
御ねそし　姉君のことをもうまん物くゆひかり
語人きへよ深りもつ御人いかなく御ねきた文也
宮の御方はしよ御かたしも御とさいても御けなれとにむかれ
えみ御ねりれゆうしろときあるそ御文きれかくと
中君をも三条院よりしきかく思ひ人あるとおもひ

御合奴あるましきことにおもひ給てたうとの清らし
ろうとも御ふうそて八文雅うと思ひ給とや文辞むの記
ともあり宮の薫をとうひ給うる八方り女侍るま
しきまにおもひ給れ也語く中君のうし給とハうさ也
あうて雅うあもおもひ語すも也さ義ふくくあけなき
と云所の心語色ともや
物語ゆとや　例の紀者の語也